

内  
 金百九十七匁四三五  
 銀百五十二匁四六五  
 此通貨四百六十兩換  
 一文政金小判一分判 百兩目方三百五十目  
 右同斷  
 一朱金 百兩目方六百目  
 内  
 金七十二匁三二八七  
 銀五百二十七匁六七一三  
 此通貨二百二十七兩一分三朱換  
 一草字二分判百兩目方三百五十目  
 内  
 金百七十一匁一二  
 銀百七十八匁八八九  
 此通貨四百〇四兩二分換  
 一古二朱金 百兩目方三百五十目  
 内  
 金百〇二匁六六六六

銀二百四十七匁三三三三  
 此通貨二百六十兩〇三朱換  
 一五兩判 百兩目方百八十目  
 内  
 金百五十一匁七二四  
 銀二十八匁二七六  
 此通貨三百四十二兩一分二朱換  
 一保字金小判一分判 百兩目方三百目  
 内  
 金百七十九匁三二二六  
 銀百二十九匁六七七四  
 此通貨三百九十六兩二分一朱換  
 一正字判小判一分判 百兩目方二百四十目  
 内  
 金百三十六匁二五八一  
 銀百〇三匁七四一九  
 此通貨三百七兩一分換  
 一安政二分判 百兩目方三百目  
 内

金五十八匁六六六六  
 銀二百四十一匁三三三三  
 此通貨百六十一兩三朱換  
 一元祿大判 一枚目方四十四匁一分  
 内  
 金二十六匁六一五四  
 銀拾六匁二四七五銅一匁二三七  
 此通貨六十一兩一分三朱換  
 一享保大判 一枚目方四十四匁一分  
 内  
 金三十四匁六  
 銀七匁九銅一匁六分  
 此通貨七十八兩一分換

一慶長大判 一枚目方四十四匁一分  
 内  
 同斷  
 一新大判 一枚目方三十目  
 内  
 金十一匁  
 銀十六匁銅三匁  
 此通貨二十六兩二分一朱換  
 一寛永壽錢 代り廿四文天保百文錢一枚ニ付四枚ヲ以換  
 一但シ當通用十二文  
 一寛永銅錢 代り十二文同斷八枚ヲ以換  
 一但シ當通用六文  
 一文久銅錢 代り十六文同斷六枚ヲ以換  
 一但シ當通用八文  
 但シ天保百文錢ハ是迄ノ如ク通用

閏四月十四日我藩の日田天草兩地警衛を免せらる  
 〔京都并江戸返達御用狀扣〕

閏四月十四日辨事御役所御呼出御渡之 御書付寫

九州御領之地所一圓長崎裁判所可爲管轄旨被 仰出候ニ付其藩に當分取締被 仰付置候分被 免候事  
 但春來取調候書類早々長崎裁判所に指出可申事

細川越中守

明治元年

五三三



閏四月十四日我藩番頭大河原次郎九郎の率ゐる番士隊并に歩兵砲兵諸隊に上京を命ず  
〔京都江戸狀扣〕

以別紙申達候

夷則組

大河原次郎九郎 組共

右同

御物頭片手 組共

平野宣太郎 門人共

四小隊 役々共 百八十人計

右者至急ニ出京被 仰付蒸氣船を以小島沖より被差越管候尤行裝等之儀之隨時勢專實用輕便を主とし候様

一今度御人數被差登候付而之 思召之旨被爲在金鼓旌旗之合圖之被差止且老年或之病氣等有之而々之各別之 御優待を

以御留被置候間無心置居殘候様

右之通被 仰付旨昨日及達候此段爲可申達如是御座候以上

閏四月十五日

溝口 孤雲殿

惣連名

田中八郎兵衛殿

閏四月十四日日本藩使者津野田儀左衛門等筑前藩に至り三條實美等太宰府に於ける警衛方及び歸  
京の節の便船のことにつきて謝意を陳す

〔高原家文書、黒田侯爵家藏書隣國使者往來書類一斑〕

慶應四年閏四月十五日

細川越中守様方御使者被差越昨十四日博多着縫屋源兵衛宅止宿役筋出會之儀申入候間手筋方申出之

御使者

津野田儀左衛門

副使

武田文九郎

薄暑之初彌御安全被成御座珍重思召候然之先年來太宰府表へ御滞在之五卿方御警衛之儀御相受持ニ付而之始末御人  
數等可被差出置候處段々御頼談之上諸事御引受被成進殊此程御歸京之節ハ御船をも被差出此御方御人數乗組被仰付  
候向も無滞相濟厚忝思召候右御摺挨以御使者被仰遣候付乍野品御目錄之通被進候

御目錄前

新躬刀 洞田貫宗廣作

同短刀 同

同鏡 延壽宣勝作

御返答

薄暑之初彌御安全被成御座珍重思召候然之先年來太宰府表へ滞在之五卿方御警衛之儀御相受持ニ付而之御頼談ニよつ  
て諸事御引受且御歸京之節ハ御船をも被差出候爲御摺委曲以御使被仰遣御目錄之通り被進被入御念儀忝思召候右  
御答被仰進候

明治元年

五三五



閏四月十四日長岡護美我藩征東大隊長清水數馬等の建議に關する舊幕歩兵採用の件を否とし藩地より銃隊を召登すへしとの旨砲隊長安田源之丞に諭示す

〔安田家文書〕 明治元年關東征伐覺書

閏四月十四日 左京亮公召出シニテ御沙汰アルニハ歩兵抱方ハ無用ニ屬シ之レニ換ルニ御國元ヨリ銃隊若干呼登シニ決定シ其趣ハ申遣シタリトノ御意ナリ右銃隊到着ノ上萬般着手ノ筈

閏四月十五日皇族の待遇に關して布達せらる

〔一新錄皇令〕

慶應四年閏四月久我様書記方々京都御留守居方々知せ來候書付

後四月十五日

親王皇兄弟皇子皆爲親王諸王皇兄弟皇子以外爲親王自親王五世雖得名不在皇親之限

伏見宮	有栖川宮	閑院宮	賀陽宮	山階宮	聖護院宮
-----	------	-----	-----	-----	------

右嫡子者即今先是迄之通爲御養子可有親王宣下旨被仰出候事

右嫡子相續之節先是迄之通爲御養子可有親王宣下旨被仰出候事

右親王宣下後ニ候間是迄之通嫡子始賜姓可被列臣籍旨被仰出候事

仁和寺宮

右爲聖護院宮子相續之旨被仰出候事

照高院宮

但嫡子始メ賜姓可被列臣籍事

梶井宮

右親王宣下後ニ候間是迄之通嫡子始賜姓可被列臣籍候事  
但可爲賀陽宮以下之通且被止座主號候事

閏四月 右之通久我様書記方々爲知來候ニ付則相達申候以上

御留守居中

閏四月十六日 村上彈助殿

閏四月十五日我藩外三藩に命し定日を立て、練兵を行はしめらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

今日太政官代に御呼出ニ付罷出候處軍防局松尾豐前を以御書付ニ通御渡ニ相成候付則相達申候以上

閏四月十五日

御留守居中

村上彈助殿

明治元年



猶々大炮打方ハ勝手次第留矢之節ハ相止候段口達ニ相成此段も相達申候以上

二七日 細川右京大夫

市橋下總守(仁正寺)

森對馬守(播州)

松平俱馬守(豊後)

右日割之通於聖護院村操練被 仰付候條其旨可相心得

候事

壬四月十五日

操練場規則

一 當朝辰半無遅々人數相揃着到之届隊長より軍防掛に可申出事

一 御差圖次第操練相勤可申候事

一 兵隊屯所に於て發砲一切致間敷事

一 御暇之 御沙汰在之迄隊々可扣居事

一 進退之節可爲行軍事

壬四月

閏四月十六日長岡護美書を本藩征東大隊長清水數馬に與へて軍制變更の急務を述へ將士其意を奉して勉勵功を奏すへき旨を指示す

〔王政復古帳〕

安田源之丞今十六日關東へ被差返候付清水數馬へ 左京亮様御直書左之通

關東近日之事情安田源之丞指越報告之趣承知いたし萬般心配之程察入候方今天下之兵制專簡便を主とし候折柄於御國

茂屹ト御一新之思召ニ而此度若殿様至急ニ御下國被爲在候程之儀ニ付孰茂右之御趣意を奉し衆力一致殊更戰爭之實地

ニ臨一際勉勵いたし候様御番頭以下に茂精々相示關外之任を可被盡候猶委曲ハ源之丞可申也

閏四月十六日

清水 數馬殿

左

京

右之外ニ於大坂御渡ニ相成候御二方様御書寫共御渡被成候事

〔安田家關東征伐事件覺書〕

閏四月十六日 清水元帥へ御直書下附セラレ御用濟ニテ京都出發ス飛脚番山田清左衛門ヲ差添ヘラル書夜兼行

閏四月十六日北陸道鎮撫使參謀津田山三郎は江戸の狀況及び自己の意見を畧叙し越後の片桐省介を紹介する書簡を京都在勤の長谷川二右衛門木村得太郎に贈る

〔王政復古帳〕

一 輪拜呈仕候各様御安康被爲成御奉務奉慶賀候次私儀無異當地迄參着仕候段之頃者木村様迄粗言上仕候通ニ而乍憚御休意可被下候扱當地之形勢追々御承知候半一旦御入城砲器軍糧等差上候手敷迄之處之無異相濟慶喜水府表御預等一々恭順奉命候處其後徳川家名相續等之事を初メ旗下并市中取締等之儀御慮置振段々遲寛ニ相成候委茂有之近日府内騒然旗下并市中之人心一切居り合衆官軍は長陳ニ退屈いたし強ハ暴行甚々しく弱は情ニ流レ醜態を極メ候勢ひニて人心離散瓦解之勢ひ不日ニ破レニ至り可申者必定ニ御座候然處近日太政官より御發令之趣討會等之事件などは中々近日御手之被及候儀共不奉在決而今日之事機ニ有御座間敷此令一度御發ニ相成候而ハ餘程御難事ニ立至り可申殊ニ薩長之人數越後路へ出張之報も昨日あたり相達薩長と申候へ之彌益敵ノ氣を激成し固結せしむるの御仕向ニ相當り甚以不宜儀敷と愚考仕候仍而北越出張之兵之一先當地へ繰込當府滞在之倦兵之御練替漸々御差返しニ相成始終兵氣を新ニし東國筋迄御前撫御平定之期を能々時機御見定メ之上ニ而御取懸りニ相成度右等之事情京江之道程隔絶初メ御入城頃之勢ひを以事を容易ニ見過候より段々御輕舉之御施行も有之哉ニ乍恐愚考仕候畢竟ハ當表之事情御地ニ貫通いたし兼居候處より右之次第ニ成行誠ニ大切之御時節御方略を被失候様之事共出來仕候而ハ如何ニ茂殘念至極能々御評議をこらされ度奉懇希候就而此節別紙之人名當府下之事情并東北之模様も餘程吞込居候人物ニ而兩三年前より知己ニ御座候間先日

明治元年

五三九



來當營中ニ夜晝夜出入盡力仕候者ニ候間少も無御疑念當地之事情十分御聞取被下御都合次第ニ之良公子へ茂拜調被仰付御直ニ御聞取被爲在候様之御取計之被出來間敷哉偏ニ御周旋之程小生より奉希候何分ニ茂當府下萬般之事件紙上ニ盡兼候間同人より御聞取被下度多忙中略筆御推覽可被成下候頓首

閏四月十六日

津田山三郎

長谷川仁右衛門様

木村得太郎様

二日向署之候御自愛御專一奉神禱候長谷川様ニ之過日來御出京之御模様之承知仕居候得共寸楮も届兼失敬之段御宥免可被下候外ニも絶而書狀も届兼失敬之段御序宜敷奉頼候再拜

片桐省介

右者越後國內桑名領之郷士ニ而五六年以前より當地に住居いたし全體名分之學をとなへ報國有志之者ニ而當府下之事情も熟知之者ニ候間得斗同人より當地内外之事情御聞取被下度一體今日之憂者當地之事情御許に貫通不致候處より百事御施行機會を被失候筋ニも立至り可申敷と過憂罷在申候何分ニも今日之御急務者當府内人心鎮定 王化御施布之上ニ而東北之御處置ニ者御取懸リニ相成度今日之模様至迫至切決して容易之御輕舉無之様萬々奉禱候事

閏四月

津田拜

御兩賢君

机前

閏四月十六日北陸道鎮撫總督高倉永祐等江戸常盤橋内營中に於て北越再進のことを決す

〔防長回天史第六編上〕

〔越後口戰争抄略〕

閏四月一日四條隆平私記ニ依ル北陸正副督常盤橋内越前邸ニ移ル是レヨリ先キ高倉永祐ハ更メテ北陸道鎮撫總督ニ任シ四條隆平新鴻裁判所總督兼鎮撫總督ニ任ス此月十六日營中ニ於テ北越再進ノ事ヲ決定シ而シテ發向ハ海路ヲ取ラントシ二十二日ニ至リ二十四日ヲ以テ品川解纜ノ旨ヲ大總督府ニ申稟ス願要補任鎮撫其他ニ依ルニ四月十九日高倉ハ更メテ北陸道鎮撫總督ニ任シ仍舊鎮撫總督ヲ兼ヌ(中略)四條手記ニ依レハ四月十九日ノ任命ヲ閏四月五日ニ江戸城ニテ下付セシナラン

閏四月十七日還幸につき供奉並に留守の公卿諸侯以下に御物酒饌等を賜ふ我藩世子護久及ひ長岡護美又恩賜を拜す

〔京都并江戸返達御用状扣〕

眞藤多津人閏四月廿一日早打ニ而京都被差立五月三日着左之通(節略)

- 一去ル十七日午半刻若殿様御用之儀候間重臣之者禁中御仮建に罷出候様御達ニ付田中八郎兵衛罷出候處大坂 行幸御供奉御勤ニ付而大和錦一卷御末廣一本下賜候段五辻大夫様より被仰渡恐悦奉存候若殿様御禮御勤振之儀者御承知之上禁中御仮建に御禮御使者重臣之者被差出可然由御座候右御拜領之御品々茂多津人持參被仰付候
- 一右同日左京亮様御用之儀候間禁中御仮建に被成御出候様御達ニ付五半時之御供揃御乗切ニ而一先太政官に御出四條様ニ而御召替夫々御參 内之處 御親征御用御勤ニ付而大和錦一卷御かまほり一本御頂戴且又 行幸ニ付御精勤爲御褒美別段於御前賜御酒饌天盃御頂戴御手自御包物被成御頂戴恐悦奉存候右ニ付御禮之儀者御直ニ被仰上候由ニ御座候別紙御式書寫一通并賜物御名前寫二通差上申候
- 一細川豊前守殿右同日御用召ニ而 還幸御供奉御勤ニ付而大和錦一卷御扇子一本天盃御頂戴御暇被仰出候段御申上有之候

閏四月廿一日

村上 彈 助

明治元年

五四一



御國御用人衆中  
新御屋形御用人衆中

一先於小御所  
御對面出御以前直入御  
賜酒饌  
出御

先御留守三藩於御前賜物アリ

次宇和島 長岡賜物

次三職以下各口謁着座

次供御多はこ盆

次供御吸物

次供高杯三本

次猶下賜酒饌

六位藏人以上非藏人役道

次三獻計之添賜

天盃諸藩第一進出拜受

天盃其所ニ置復座

次入御

次高杯三本御下賜之一同拜受之事

右一通

一還幸ニ付供奉并御留守之輩賜物之事

一供奉堂上

御晒 壹疋

金 千疋

一同諸大名

大和錦 一卷

御かはほり 一本

あるひは末廣

一御留守中京師御守衛三藩

大和錦 一卷

御かはほり 一本

或ハ末廣 已上共

一別段 行幸ニ付精勤 御褒美於御前御手ツカラ拜領

醍醐大納言

一供奉大名御暇賜候ニ付御于小御所於御前賜酒饌候事  
但

右兵衛督

仁和寺宮

山階宮

近衛新前左大臣

應司前右大臣

中山前大納言

三條前大納言

德大寺大納言

中御門大納言

萬里小路中納言

右大辨宰相

烏丸侍從

蜂須賀阿波守

宇和島少將

薩摩少將

津和野侍從

右御包物

津々連織

御對多葉粉入  
御紙入

右御包物同織物  
同上

右御晒壹疋

明治元年

右大辨宰相  
烏丸侍從  
宇和島少將  
右城侍從  
坊城侍從  
長岡左京亮  
五辻大夫  
戶田大和守

松室丹波  
松尾但馬  
吉田遠江  
田中國之助  
壬生官務  
土山淡路守



長岡 左京亮  
五辻 大夫  
戸田 大和守  
當番林和清間詰

右出席之事

閏四月十七日御参 内御拜領物有之候御名前寫  
一吉川芳之助様 森 對馬守様  
細川豊前守殿 柳澤甲斐守様  
市橋下總守様 加藤遠江守様

松平圖書頭様 加藤能登守様  
毛利讚岐守様 小出伊勢守様  
織田出雲守様 池田攝津守様  
北條相模守様 池田備前守様  
藤堂大學頭様 島津淡路守様  
松浦肥前守様 島津修理大夫様  
亀井隱岐守様 左京亮様  
蜂須賀阿波守様 伊達伊豫守様  
以上

閏四月十七日切支丹信徒を列藩に分ちて保管せしめ其處置方法及び分配人員を指定せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、一新録皇令、王政復古帳〕

〔閏四月十七日齋根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達三通の内〕

切支丹宗之儀年來元幕府ニ於ても固く制止候得共萬染餘燼絶切不申近來長崎近傍浦上村之住民竊ニ其教を信仰之者追々蔓延致し候付今般廣く御評議被爲在候上、<sup>イニナシ</sup>格別之御仁旨を以「御處置御決定被遊候依之別紙之通御預被仰付候事」  
一右宗門元來御國禁不容易事ニ付御預之上は人事を盡し懇切ニ教諭いたし良民ニ立戻候様厚く可取扱候若シ悔悟不仕者は不得止可被處嚴刑候間此趣相心得改心之目途不相立者ハ可届出事  
一改心之廉相立候迄者住人と者屹度絶交之事  
一開發地土工金工或は石炭堀其外夫役等勝手ニ可召使事  
一山村ニ住居可爲致候事

一當日より先ツ三年之間壹人ニ付壹人扶持ツ、其藩々々には被下候事

但長崎表より追々差送候間支度次第早々到着所に其藩々々より人數差向受取可申事  
右之通被仰出候間此段申達候事

閏四月

大和國 拾五萬千二百八十八石  
柳澤 甲斐守 凡百人  
伊勢國 三十二萬三千九百五拾石  
藤堂 和泉守 凡百五拾人  
尾張國 六拾壹萬千五百石  
徳川 元千代 凡二百五拾人  
近江國 二拾五萬石  
井伊 掃部頭 凡百三拾人  
美濃國 拾萬石  
戸田 采女正 凡八拾人  
若狹國 拾萬三千五百五十八石  
酒井 若狹守 凡八拾人  
越前國 福井三拾貳萬石  
松平 越前守 凡百五拾人  
丹波國 笹山六萬石

青山 左京大夫 凡五拾人  
同國 龜山五萬石  
松平 圖書頭 凡五拾人  
丹後國 宮津七萬石  
本庄 伯耆守 凡五拾人  
紀伊國 五拾五萬五千石  
紀伊 中納言 凡二百五拾人  
三河國 吉田七萬石  
大河内 刑部大輔 凡五拾人  
加賀國 百二萬二千七百石  
前田 宰相 凡二百五拾人  
右大阪迄但藏屋敷に相渡  
因幡國 三拾二萬二千石  
池田 因幡守 凡百五拾人  
出雲國 拾八萬六千石



松平 出羽守 凡百五拾人  
 石見國 津和野四萬三千石  
 龜井 隱岐守 凡三拾人  
 備前國 三拾一萬五千二百石  
 池田 備前守 凡百五拾人  
 安藝國 四拾二萬六千石  
 淺野 安藝守 凡百五拾人  
 右尾之遺迄  
 美作國 津山拾萬石  
 松平 三河守 凡八拾人  
 備後國 福山拾萬石  
 阿部 主計頭 凡八拾人  
 右柄津迄  
 阿波國 二拾五萬七千九百石  
 蜂須賀 阿波守 凡百三拾人  
 讃岐國 高松拾二萬石  
 松平 讃岐守 凡百人  
 右丸龜迄  
 伊豫國 宇和島拾萬石

伊達 遠江守 凡八拾人  
 土佐國 二拾四萬二千石  
 山内 土佐守 凡百三拾人  
 右三ツ濱迄  
 豐後國 岡七萬四千四拾石  
 中川 修理大夫 凡五拾人  
 日向國 延岡七萬石  
 内藤 備後守 凡五拾人  
 右鶴崎迄  
 長門國 三拾六萬九千石  
 毛利 大膳大夫 凡百五拾人  
 右下之關迄  
 豐前國 中津拾萬石  
 奥平 大膳大夫 凡八拾人  
 右中津迄  
 豐前國 拾五萬石  
 小笠原 豐千代丸 凡五拾人  
 右小倉迄  
 筑前國 五拾二萬石

黒田 美濃守 凡百五拾人  
 右博多迄  
 筑後國 久留米二拾壹萬石  
 有馬 中務大輔 凡百三拾人  
 同國 柳川拾一萬九千六百石  
 立花 飛騨守 凡八拾人  
 右若津迄

薩摩國 七拾七萬八千石  
 島津 修理大夫 凡二百五拾人  
 右鹿兒島迄  
 細川 越中守 凡百五拾人  
 右高橋迄  
 計三拾四家人數凡四千百人  
 (以上國名の下の石高は後人の記入せるものなるへし)

末松謙澄編  
 〔伊藤井上二元老直話維新風雲録〕

(伊藤侯應答の内)

問 耶蘇教のことは何かございませぬか  
 答 其の時はないがそれは明治二年頃かになつてから  
 問 元年に藩に預けられたことがありますか  
 答 二年だと思ふそれは長崎で三百年もずつと續いた一の村落が耶蘇教で固まつて居つたのが御維新になつて開國の主義になつたから頭を擡げ出したのでそれで耶蘇教征伐をしなければならぬと云ふ論が起つて其始末にかゝると喧しくなつて渡邊昇が彼の始末に行つて耶蘇教を止めさせると云ふやうな考で方々へ割付けたのだ耶蘇教の方は追々にやつたから左様の困難はふかつた(答二年だと思ふとあるは答者の記憶違ひなるへし)

閏四月十七日丹後峯山藩主京極主膳正謹慎を命せらる  
 (京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳)



(閏四月十七日彦根藩留守居より我藩外六藩へ廻達三通の内)

京 極 主 膳 正

謹 愼 被 仰 付 候 事

閏 四 月 十 七 日

閏四月十八日關東の殘賊を討伐せらるゝを以て更に出兵し奮戰掃撃其功を奏すへき旨を本藩主詔邦に命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、一新録皇令、王政復古帳〕

今十八日太政官代軍防局より御呼出ニ付罷出候處吉田遠江を以御書付一通御渡ニ相成候付則相達申候以上

閏 四 月 十 八 日

御 留 守 居 中

村 上 彈 助 殿

細 川 越 中 守

徳川慶喜既ニ及伏罪候處殘賊屢抗官軍且民間を亂妨いたし候次第萬民塗炭之苦を被爲救候背 微慮實ニ天地不可容之賊徒也早々人數差向ケ在東之官軍と合力いたし奮戰掃撃 皇威相立候様可致旨 御沙汰候事

〔一新録自筆狀〕

(閏四月廿一日附溝口孤雲田中八郎兵衛ヨリ家老中老宛書翰同日京地指立五月抄略)

以別紙申達候益田勇儀一昨十九日關東を着彼地之模様且出張之御人數新等之儀委細相達候付此許ニ而評議之次第別紙書取(此別紙今)を以 左京亮様にも相伺思召不被爲在候付則差進申候間一大隊被差登等之儀 御兩殿様は茂御伺ニ而御急決之程希申候且關東一轄之近狀言上之爲勇儀引返早打ニ而御國許ニ被差下候條何茂直ニ御承知可被下

候同人儀御用濟次第猶又關東に被指越答ニ付願ク至急被差返候様御。旋可被下候 (中略)

一殘賊屢官軍ニ抗し候付而之早ク人數差向掃撃いたし候様猶又 御沙汰之趣別紙御書付御渡之處當時在京之御人數ハ僅ニ寺町御警衛且 左京亮様御側廻迄位之事ニ而右之内より引分關東出張之出來兼候付御國を御呼寄之御人數着京之上可被指出段御受被仰上置候處前文一大隊被差登候方ニ相成候へ之夫ニ而事濟可申ニ左京亮様ニも相伺思召不被爲在候何様今日之急務之御國力を御養立時變ニ應し益大信を被仰候儀御專要之筋ニ被考申候薩長邊所々には多人數繰出候由ニ之候へとも 朝廷に拜借願等ニ而軍費を被償候様子ニ相聞申候(下略)

閏四月十八日舊幕府の令に依り管轄せし地域石高等を各藩に調査申告せしめらる

〔京坂并江戸返達御用狀扣〕

今日民政御役所を御呼出ニ付罷出候處加藤貞之助を以別紙書取之通演達有之明日中取調へ御届出有之候様との事ニ候間此段相達申候以上

閏 四 月 十 八 日

御 留 守 居 中

村 上 彈 助 殿

右一通 舊幕府より預地昨年春迄之分並昨年春已來之分尙又御一新後之分年月並預高取調早々可申出候事

閏四月十八日下野佐野藩主堀田攝津守謹愼を命せらる

〔王政復古帳〕

閏四月十八日太政官より彦根様衆御呼出ニ而御渡之御書付二通御同方より被差廻候(其一)

堀 田 攝 津 守

右謹愼被 仰付候事

明 治 元 年



閏四月

閏四月十八日兵庫に於て外國人に暴行を加へ遁亡せしものあり發見次第申告すへしとの旨を達せらる

〔王政復古帳〕

(閏四月十八日前條同様彦根留守居より調達の内なり)

當津切戸町木挽渡世

山田屋大藏事

源

三拾六七才

人相

一中脊中肉色黒く

一顔平面鼻低く

一眼一ト通り眉毛濃く

一薄菊目石有之其外常躰

但同人女房よせ并悴安藏召連候事

右之者外國人に手疵を爲負逃去候ニ付見當次第早々可申出外國御交際之儀者於 朝廷重大之御事件ニ付嚴重取調可尋出候申出候ものニ者褒美金可遣候萬一心得違隱置候もの於有之者可爲曲事候此段早々可相觸もの也

后 四月十六日

右之通兵庫大坂裁判所に觸達相成候條其他御領私領共同く布告被仰付候間其旨相心得召捕次第早々兵庫裁判所に可申出者也

閏四月

太政官

閏四月十八日諸侯滯京五十日餘に亙るものは歸邑を許し且つ會津等賊勢益々強暴なるを以て國力を養ひ不慮の備を嚴にすへしとの旨を達せらる

〔一新録皇令〕

戊辰閏四月十八日大政官より彦根藩衆御呼出御渡之御書付御同方々差廻來

諸侯參 朝御制度之儀者追而可被仰出候得共先頃御親征行幸御出籠前御誓約濟之向者一ト先御暇被下候處其後上京御留守中滯京 還幸後御誓約濟之面々も同様永ク滯在いふし徒ニ疲弊往々藩屏之任難堪様立至候而者不相濟段者勿論之事ニ付五十日餘滯京之向者追々御暇被下候條歸國之上者御誓約之御趣意ヲ奉體認速ニ家政向改正者勿論方今松平肥後等賊徒益々暴威を募り官軍に相抗候次第不謂事ニ而此後之形勢ニ依り恐多も再ひ 御親征可被仰出候處可有之候哉 全ク皇國內御鎮ニ茂不立至事ニ付彌以不慮之備ヲ嚴シ於國邑御指揮可奉侍旨被仰出候事 但兵隊等總而先達而 但兵隊等總而先達而 但布令同様可相心得候事

閏四月

閏四月十九日徳川氏より獻納せし軍艦の管守を我藩に命せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

今日太政官代々御呼出ニ付罷出候處非藏人松尾豊前を以別紙御書付一通御渡ニ相成候付則相達申候以上

閏四月十九日

御留守居中

村上 彈助殿

肥後

右當分之内軍艦御預ケ被 仰付候付乗込人數早々東下致し可請取旨 御沙汰候事

明治元年

五五一



閏四月

〔一新録自筆録〕

(五月四日附家老中老連名瀧口尾藤及ヒ田中宛書翰の一節)  
一徳川家より差上之軍艦薩長肥前此方様に御預ニ付乗手被差登方之儀致承知候右付而者御軍艦懸之面々等見込之次第も可有之候間然議之上早々取堅被差登候様取扱可申候

閏四月十九日財政の窮乏を救ふ爲め新に紙幣を製造して通用を十三ヶ年とし之を列藩に融通して産業を興さしむへき旨を布達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

(閏四月十九日豊根藩留守居より我藩外六藩へ廻達四通の内)

皇政更始之折柄富國之基礎被爲建度衆議ヲ盡シ一時ノ權法ヲ以テ金札 御製造被 仰出世上一國之困窮ヲ救助被遊度 思召ニ付當辰年ヨリ來ル辰年迄十三ヶ年之間 皇國一回通用可有之候 御仕法ハ左之通相心得可申者也

但通用日限之儀ハ追而可被 仰出候事

右之通被 仰出候間末々迄不洩様其向々ヨリ早々可相觸候事

太 政 官

辰閏四月

一金札御製造之上列藩石高ニ應シ萬石ニ付壹萬兩宛拜借被 仰付候間其筋々可願出候事

一返納方之儀ハ必其金札ヲ以テ毎年募其金高ヨリ壹割宛差出シ來ル辰年迄十三ヶ年ニテ上納濟切之事

一列藩拜借之金ハ富國之基礎被爲立度 御趣意奉體認是ヲ以テ産物等精々取建其國益ヲ引起シ候様可致候但シ其藩々役場ニ於テ繰リニ遣ヒ入候儀ハ決シテ不相成候事

一京攝及近郷之商賣拜借願上度候金札役所へ可願出候金高等者取扱候産物高ニ應シ御貸渡シ相成候事

一諸國裁判所始メ諸侯領地内農商之者共拜借等申出候得者其身元厚薄之見込ヲ以テ金高渡産業相立候様可致遣尤返納之儀ハ年々相當之元利爲差出候事

但遐邑僻陳トイヘトモ金札取扱向ハ京攝商賣之振合ヲ以テ取計可致事

一拜借金高之内年割上納之札ハ於會計局裁捨可申事

但正月ヨリ七月迄ニ拜借之分ハ其募堂割上納七月ヨリ十二月迄拜借之分ハ五分割上納可致事

右之 御趣意ヲ以テ即今之不融通ヲ 御補ヒ被爲遊度御仁恤之 思召ニ候間心得違有之間敷候尤金札ヲ以貸渡金札ヲ

以返納之御仕法ニ付引替ハ一切無之候事

閏四月

閏四月十九日列藩に賦課して陸軍を編制すへき旨達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

(閏四月十九日豊根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達四通の内)

陸軍編制

一高壹萬石ニ付

兵員十人 當分之内三人

但京畿ニ常備九門及畿内要衝之箇所共其兵ヲ以テ警衛可被 仰付候間追而 御沙汰可有之候事

一高壹萬石ニ付

兵員五十人

但在所ニ可備置事

明治元年



一高壹萬石ニ付

金叁百兩

但年分三度ニ上納兵員ノ給料ニ充ツ

右之通 皇國一體總高ニ割付陸軍編制被爲立候條被 仰出候間此旨申達候事

但勤方心得等仔細之儀者軍防事務局に可伺出候事

閏四月

閏四月十九日立花出雲守陸奥伊達郡下謹愼を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（閏四月十九日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達四通の内）

立 花 出 雲 守

右謹愼被 仰付候事

閏四月十九日

閏四月十九日宮家公卿諸侯及び社寺等領地高改正の爲め舊幕府より受封の判物を提出すへき旨示達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（閏四月十九日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達別紙二通の内）

王政御一新ニ付而之宮公卿諸侯並神社寺院等領地高之儀御改正可被 仰付候間是迄舊幕府ヨリ受封之判物急々御用有之候間内國事務局へ指出候様被 仰付候事

閏四月

閏四月十九日神職の葬祭には神式を用ふへき旨示達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（閏四月十九日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達別紙二通の内）

一神職之者家内ニ至迄以後神葬祭相改可申事

一今度別當社僧還俗之上者神職ニ立交候節も神勤順席等先是迄之通相心得可申事

右之通被 仰出候事

閏四月

神 祇 事 務 局

諸 國 神 職

別紙之神職共に之達向國々觸頭未定之事ニ付其藩々より可被爲達置候事

閏四月十九日

神 祇 事 務 局

閏四月十九日列藩に令して臣子の大義を忘失するものあるを戒飭せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

以廻狀致啓上候然者今十九日辨事御役所太政官代に重臣之者御呼出ニ而議事所東園中將殿御出席非藏人松室甲斐侍座別紙御書付中將殿被成御渡各御藩に茂及御達御書付之趣一ト際厚御心得被成且御觸下藩々にも厚御布告被成候様ニも可及御通達旨被仰渡候尤例之通掛り非藏人衆を以御達可被成之處御書付之御趣意厚相辨へ可申先重臣之者御呼出中將殿御直ニ被仰達候儀ニ御座候此段御承知被成御書付壹通ツ御留置廻狀早々御順達留り之御藩彦根屋敷に御返戻可被成候以上

明治元年

五五五



閏四月十九日

彦根中將内

佐成源五兵衛  
横内平右衛門  
田部金藏

次第不同

肥後様 長州様 土州様 秋田様  
伊州様 松代様 加州様

右御留守居中様

大政御一新萬機 御親裁千載之御一時ニ付被爲對 御先驅 御至孝之實蹟相立蒼生之艱苦を被爲救度深く被爲遊 宸  
憂候處逆徒等様々之遺言を流布し愚民を誑惑し姦徒を誘ひ 天子之御保全可被爲遊土土を掠め王民を苦しめ現に攘奪  
窃取至らざる所なし然るに只目前之偷安を事とし往々逆徒之鼻息を窺ひ臣子之大義を忘失し進止隱昧兩端を持候藩も  
有之歟ニ相聞御遺憾ニ被思召候他日御吟味之上可被 仰出旨も可有之候ニ付此段改而爲心得 御沙汰候事

閏四月

閏四月十九日日本藩舊幕府の令に依り管轄せる地域石高の調書を民政役所に提出す

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

民政御役所

舊幕府より預地昨年春迄之分並昨年春以來之分向又御一新後之分年月並預高取調早々可申上旨御達之趣奉長候越中守  
預高等左之通御座候

一慶應三年二月三日松平主殿御預所豊後國速水郡大分郡村々並西國筋郡代窪田治部右衛門支配所豊後國國東郡同國

直入郡村々左之通預所被申達政事向私領同様土地人民撫育方之儀厚世話いたし候様との儀も違有之候

豊後國直入郡

一高貳千九百八拾九石三斗貳升四合

是之窪田治部右衛門代官所之内より

同國大分郡

一高三千貳百四拾石貳斗貳升九合

是之松平主殿御預所より

同國國東郡

一高四千八百五石八斗七升三合六勺

是之同人當分預所之内より

同國連見郡

一高壹萬千三百四拾四石八斗八升九合五勺貳才

是之右同斷

高合貳萬貳千三百八拾石三斗壹升六合壹勺貳才

一窪田治部右衛門支配所肥後國天草郡村々非常警衛之儀越中守に永く被任海岸防禦筋等行届候様前條預所一同違有之候  
一前條豊後國預所並天草郡且豊後國日田表非常警衛之儀等心得方當正月廿七日參與御役所に相伺候處追而御沙汰可有之  
候間當分是迄之通可相心得旨即日御付札を以御差圖有之候  
一元窪田治部右衛門支配地今般御領と相成候間肥後國內ニ有之候分總而取締被仰付候旨當二月七日參與御役所より御達  
有之候

明治元年



一右取締被仰付候付土地人民取扱筋等不依何事先私領同様ニ相心得可申哉之段當三月十二日辨事御役所に相伺候處先私領同様相心得候様即日御付札御差圖有之候  
 一九州御領之地所一圓長崎裁判所可爲當轄旨被仰出候付越中守に當分取締被仰付置候分被免旨去十三日辨事御役所より御達有之候  
 右之通御座候此段御届候以上

閏四月十九日

細川越中守内

青地源右衛門

閏四月十九日日本藩津田山三郎書を在京長谷川二右衛門等に贈り左渡鎮撫使參謀に轉任を命せられたれとも思ふ所ありて退職の斡旋を乞ひ且つ北陸道鎮撫に關する意見を陳ふ

〔王政復古帳〕

津田山三郎

北陸道鎮撫使高倉三位四條太夫參謀被仰付置候處被免佐渡鎮撫使滋野井侍從參謀被仰付候事

閏四月

片桐省助出立延引ニ付奉追啓候討會時機緩急之儀愚論など立兼北陸道兩卿ニも明後廿一日比より御出發之管御決評小生儀も越後高田迄御供申上夫より佐渡に渡り候管ニ御座候然處私儀も此節北陸道參謀ニ而北地筋當地迄之處一戰之功も無御座候得共兇戾角まがり成ニ御供仕先者一幕無事ニ相濟候間佐渡參謀ニ而是より佐州に遠島流罪之實以困窮之次第ニ御座候然し太政官より之御下命ニ候得者爰許限ニ而御取扱も出來兼可申病氣等申立是非退職之儀も何分奉恐入候次第ニ付御許ニ而御周旋被下此節高田迄佐渡參謀餘人は被命被差下候ハ、小生儀者高田より直ニ歸京仕度懇願ニ御座

候間吳々も小生心情御察被成下佐州之賑請者御有惣被下別人ニ被命度何卒御周旋之程偏ニ奉希候全弊即今之時勢彼我之徳力相計候ニ中々一時ニ佐州邊迄御手を被延候時機ニ有御座間敷先第一者當地之鎮撫尤御急務ニ而當時出張之惰兵たと新ニ御操替一先御凱陣跡ニ者鎮撫使御任選ニ而太政官も爰許迄御押出位ニ而一時治道を御布施被成御仁恤之御趣意貫徹いたし候様之御仕向ニ無之候而者迎も不定ニ至候期者有御座間敷唯今通ニ而者日々々々人心離散仕候勢ひニ而王化ニ歸服致候人心ニ者萬々無之其邊之處者省助より得斗御聞取被下度吳々小生身分之儀者如何ニも宜敷奉希候右之段迄奉略呈候謹言（本書中筆に追啓とあるは津田が去る十六日の書に對する言にして片桐省助は抄書と本書と俱に携帶して本日江戸を發し京都へ向ひたるものなり）

閏四月十九日

津

田(山三郎也)

長谷川様  
 木村様

閏四月十九日奥羽鎮撫總督九條道孝十二日の奥羽列藩歎願書を却下し仙臺米澤二藩に會津討伐を命す二藩主之に服せず更に衆議を盡して太政官に稟請せんとの旨を申告す

〔防長回天史六編上〕

（奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略）

十九日九條總督十二日ノ諸藩歎願書三通ヲ却下シ左ノ命ヲ下ス

仙臺中將  
 米澤中將

今般會津諸藩降伏歎願書并奥羽各藩添願書被差出熱覺之處朝敵不可容天地罪人ニ付難被爲及御沙汰早々討入可奏功者也

明治元年

五五九



閏四月

鎮撫總督朱印

五六〇

同日仙米二藩主ヨリ左ノ届書ヲ總督府ニ上リ列藩ハ歎願却下ノ旨ニ服セス因テ討會ノ兵ヲ解キ更ニ衆議ヲ盡シ旨ヲ太政官ニ候セントスルヲ告ク其文左ノ如シ

今般會津宥保降伏謝罪之儀家來共歎願申出候ニ付國情等ノ儀委細演說之上寛大之御沙汰被成下候様過日奉懇願候處朝敵不可容天地罪人ニ付難被爲及御沙汰早々討入可奏成功旨御達之趣承知仕候固ヨリ降伏謝罪顯然之事ニテ降者ハ容レ拒者ハ討候社王者之兵ニ有之殊ニ更始御一新之御被爲動干戈候儀於天朝必不被爲好旨征討總督府ヨリ御沙汰相成居候次第モ有之此上押テ御征討之命被相下候儀乍恐公明正大之御處置如何ニ奉存候加之當時農桑繁盛之折柄諸藩數萬之出兵萬民徵發轉輸之苦ニ不堪既ニ所々一揆等相起候勢實以不忍聞見最早蒼生塗炭ニ陥候間是迄出兵之分番兵而已指置解兵仕候上猶又衆議相盡奉伺太政官候外他事無御座候間此段御届申上候以上

閏四月十九日仙臺藩士等奥羽鎮撫總督府參謀世良修藏を福島に殺す

〔新録探索報告〕

一澤殿九條殿并仙臺表ニおゐて幽閉長州ヲ差出候參謀セラ周藏ト哉ハ頭を切頭者仙臺髮之會ヲ取體者川ニ投候由同人儀尤衆之所惡之由

關東戰爭之起リハ正氣隊より肥前二人筑前一入長三人切害事起候由ニ御座候

一仙臺如何ニも會ニ説得せられたると相見會之申分至極至當之理ト相考投頭佐會之論ニ相成會之歎願書等取次致し候覺悟ニ而兵威を張り押上り候由既ニ領内者旅人之通行を留九條卿を抑止いたし軍監某を殺害ニおよひ候趣

〔防長回天史第六編上〕

奥羽鎮撫使ト奥羽同盟

先達テ澤公仙臺へ御下向アリシ頃ハ一藩一舛ノ俗論ニモ非ス已ニ米澤口ナトハハ出兵メ賊徒征討ノ舉モ致ス程ナリシカ本藩用事ノ潮上主膳ナル者驕然ト専ラ逆意ヲ逞シ竟ニ後ノ四月廿日ニ至リ醍醐殿ノ馬前ニ於テ參謀世良收蔵ヲ初五人ヲ不意ニ切害メ返逆ノ實ヲ表シ續テ忠純ノ聞ヘアル三好監物等慘酷ニ處置シ諸藩ニ出兵メ官軍ニ抗スル也

〔仙臺藩記要領抄略〕

閏四月上旬仙臺大隊長佐藤宮内白石<sup>本ノ</sup>ニ在リ一日地理探險ニ託シ屬僚數人ヲ隨ヘ守備線外ニ於テ會人數名ト會ス其際仙會相爭フハ非ナリ仙會ノ戰ハ空彈ヲ放チ虛戰ヲ粧テ可ナリ會人ハ世良ヲ討取レハ可ナリトノ談合アリ再會ヲ約シ二三日後宮内ハ屬僚ヲシテ再會セシメ十九日討入ハ之ヲ見合セタルコトヲ告ケ且ツ前議ヲ進メシメ其結果自ラ白河ヲ去リ白石ニ赴キ仙臺參謀ニシテ總督附ナル大越文五郎ニ謀リ會人ヲシテ世良ヲ討タシムレハ本藩ハ其罪ヲ免ルヘシ然レトモ此事ハ執政ノ命ヲ受ケサルヘカラストテ大越ト共ニ但木土佐ヲ訪ヒ會人ト應接ノ願末ヲ述フ但木ハ此頃既ニ會津謝罪ノ歎願ヲ出スモ趣意總督府ニ徹底セス將ニ世良ノ爲メ國事ヲ收ラントストテ世良斬殺ノ事便宜處置スヘシト二人ニ命ス(中略)福島ナル仙臺軍務所ノ潮上主膳亦姉齒武之進ヲ白石ニ遣リシニ但木ハ九條總督歎願採用ノ意アルモ世良之ヲ拒ム因テ世良ヲ暗殺スヘシトテ其内意ヲ潮上ニ傳ヘシム既ニシテ潮上附屬軍監小島勇記急ニ白石ニ召サレ至レハ則チ但木ハ諸藩軍議ノ上使人ヲ會津ニ遣リ來二十日夜ヲ以テ會兵ヲシテ勢至堂口ヨリ白河城ヲ襲撃セシメ仙兵ヲシテ會兵ニ紛レ世良以下ヲ悉ク討滅セシムルノ策ニ決セリトテ其旨ヲ潮上ニ傳ヘシム(中略)但木ハ(中略)自筆ノ書ヲ潮上ニ與ヘ世良ニ關シテハ竊ニ人ヲ白河ニ遣レルモ万一討洩シ其持地ニ至ラハ討取ルヘシト命シタリ(中略)

此間福島ニ於テハ佐藤宮内大越文五郎ハ會兵ヲシテ白石城ニテ世良ヲ討タシムルノ方策ヲ講シ大越ハ參謀ノ居處ニ大越ノ上紅下白ノ旗ヲ建置キ會兵ヲシテ之ヲ目標トシテ討入ラシムルヘシト談合セルニ際シ白石本陣眞田喜平治ヨリ坂



本大炊等(阪本大炊遠藤久三郎)白河行ノ事アリ世良討取ノコト姑ク停ムヘシト命シ來レリ佐藤ハ機密既ニ漏ル大事恐ラクハ遂ケ難シト憤リ大越ト其所見ヲ異ニシ佐藤ハ去テ白石ニ赴ケリ(中略)時ニ福島ニテハ瀬上主膳土湯口ノ陣場ヲ撤退シ姉齒武之進岩崎久三郎ヲ從ヘ福島ニ歸リ軍事局ニ至リシニ同地出張ノ參政泉田志摩他行シテ在ラス因テ淺草宇一郎(元仙臺人ニシテ福島)ノ家ニ入テ休憩ス會々世良參謀連ニ白河ヨリ來テ福島ノ旅宿金澤屋ニ入ル此夜(十九日夜)遂ニ害セラル

〔全書〕

十九日未明世良ハ總督府ニ急用アリトテ白河ヲ發シ福島ニ向フ

閏四月廿日明日太政官代を禁中二條城に移さるゝ旨達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月廿二日辦事役所より彦根藩留守居を呼出し一昨日達せらるへき筈なりしも都合により今日被仰出旨にて相渡され彦藩より我藩外六藩へ同達せし書付二通の内)  
衆而被仰出候通二條城に被移玉座候就而者御造營并是迄之官代御修覆<sub>レ</sub>付自明廿二日當分之處太政官代ヲ禁中に被移候旨被仰出候事

但武家玄關を以辨事傳達所ニ相心得可申事

閏四月

閏四月廿日副總裁岩倉具視輔弼中山忠能の職務を免せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月廿二日彦根藩留守居より本藩外六藩留守居へ同達二通の内)

右 兵衛 督(岩倉)

中山 前大納言(忠能)

右被免當職依別段思召自今御前日參被仰出候事

閏四月廿日

閏四月廿日諸寺跡山等の住職任命及び訴狀其他の取扱規定を達せらる

〔王政復古帳〕

閏四月廿日大政官方彦根様衆御呼出ニ而非藏人を以御渡之御書付御同方被差廻候

一諸寺跡山住持職之義是迄 朝廷に願出候向者勿論其他舊幕府<sub>レ</sub>於テ訴狀ヲ請來候跡寺ニ於テモ向後太政官代に可願出候事

一諸末寺住職之義者本山ヨリ窺之上本山ヨリ可申付候事

一諸宗本山之勿論末寺ニ至迄其本山<sub>レ</sub>而取調宗門國郡寺號等巨細書付可指出候事

一公事訴訟之義之其國裁判所に可申出大事件ニ至テハ總テ可願出候事

一從來藩々ニ而取扱來候分之總而是迄之通相心得此節別段巨細書付差出ニ不及候事

但是迄執奏家に窺來候向之先執奏家に窺之上可任指揮之事

右之通被仰出候ニ付夫々可觸示候無本寺之向之其國郡裁判所最寄之國主諸寺より可觸示候比丘尼ニ於テ同斷取計可申候事

但執奏有之候寺院に之其執奏家ヨリ可觸示候事

閏四月

明治元年



閏四月廿日來廿三日車駕山陵に幸し給ふを以て長岡護美に守衛を命せらる

〔王政復古帳〕

閏四月廿日太政官代官御留守居御呼出御渡之御書付寫

長岡左京亮

來廿三日辰刻 山科陵 後月輪東陵等 御參拜 行幸被爲在候ニ付先陣御守衛兵隊人數三十人可差出旨 御沙汰候事

但寅半刻參集可有之候事

後四月二十日

閏四月廿日日本藩森尾龍彦海軍御用掛を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

森尾龍彦

海軍御用掛被 仰付候事

後四月二十日

〔一新録白筆狀〕

〔閏四月廿一日附溝口孤雲田中八郎兵衛より御家老中老宛書翰四月廿一日京地被指立の一節〕

一森尾龍彦儀海軍御用掛被仰付旨昨日軍防局吉田遠江を以御書付御渡ニ相成候付是又指進申候右者 左京亮様方吉井幸助に御沙汰被成置候趣も有之候由ニ付早々登京之儀とも可被及御達々存候

〔一新録白筆狀〕

〔辰五月四日京師に之返御家老中老より溝口尾藤及び田中充の一節〕

一森尾龍彦海軍御用懸且眞藤多津人身分之儀ニ付被仰趣夫々承知いたし候夫々取計可申候

閏四月廿日賊兵來りて白河城を襲ふ官軍支ふる能はず去て二本松に至る

〔一新録探索報告〕

明治紀元辰六月林支助東行雜誌(抄略)

閏四月十日

同廿日仙臺二本松岩城三春等之兵ニ而守りたる白川城を羽太打之道より會兵來りて襲取をり此戦ハもとより奥羽一致之事ふれハ態と棄城て遁を會兵を入し隨而直ニ二國各藩之兵來りて會と共に白川城を守せり

〔防長回天史第六編上〕

〔奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略〕

二十日拂曉賊三百餘人三道ヨリ白河ヲ襲フ中村小次郎野村十郎諸藩兵(二本松、三春)ヲ指揮シテ防戦セシモ賊兵市中ニ入り諸處ニ放火ス官軍遂ニ支フルコト能ハス中村小次郎脚ニ傷ク總督府附屬諸員以下一旦根田ニ退ク諸藩兵遂ニ各々其封境ニ退キ總督府附屬員野村十郎以下逐次去テ二本松ニ向フ

十九日醒醐少將ノ世良ト別ル、ヤ(十九日醒醐總督は福島を出て、白河へ向ひ世良參謀は白河より)其日本宮ニ至リ翌二十日郡山ニ至テ惣シ將ニ發セントスルニ臨ミ和田右文(世良ニ隨ヒ白河ニ在リシ二本松人)馬ヲ馳セ來リ報シテ曰ク此日拂曉賊三面ヨリ白河ヲ來リ侵ス仙臺兵既ニ在ラス我二本松兵、平、泉二藩兵ト共ニ防キ戦フ衆寡敵セス支フルコト能ハズ乃チ軍用金ヲ井中ニ投シ參謀書類ヲ燒キ火ヲ城ニ放テ遁レ歸ル賊北進ノ勢アリ請フ二本松ニ退キ後圖ヲナセト參謀附屬ノ士ニシテ白河ニ在リシ者亦至ル遂ニ二本松ニ入ル夜半會計平坂信八郎及ヒ長藩士野村十郎至ル中村小次郎脚部ニ負傷シ繼ニ二本松



ニ至リシモ歩行ニ堪ヘス因テ二本松藩吏ニ托シ旅舎ニテ療養セシム事ヲ殺サル(此時九條總督は)  
岩沼に在りし也

閏四月廿一日官政を改革して太政官を議政行政神祇會計軍務外國刑法の七官と爲し且つ府藩縣の制を定めらる

〔小楠遺稿〕

新政是迄之次第に而者種々因循に落入第一公卿始め其人にあらずして猥りに御舉用に相成御役人上下に懸り夥敷相成且諸局名々各々に趣向を立本末一切貫通不仕制度も又自然に混雜致し實以無致方次第と罷成候故第一御政體之大趣向を被立其任にあらざる人物公卿始め一切御退け其中より御登用に相成且廣く人物御求諸職に被任候筋に御座候惣而是迄之通諸局隔絶仕候者必竟御政體立兼候而已ふらず人材其根本に不居して諸局に分難いたし候につき病源分明に相見る故此節第一三職を被建左之通

公卿已下末小吏に至迄減省半分に至中候

公卿初末々迄御所附者皆俸祿御加増之御決議に而御座候近日御達に可相成候

一 所々裁判所最弊害有之候間知府事縣令等に被改候等級等は政體書に有之候間略之

一 輔相 岩倉公

三條公も御一同被仰付候管之處御東下に付欠員御歸京之上被 仰付管

一 議定 二官同職に而御間も一席也

一 參與

一 辨事

右委圖書政體書に有之候間略す

上より出候備者輔相より議定參與に御渡之下より出候事者辨事受取議定參與に相渡し議定參與に而議定いたし輔相に而御斷決主上に御伺相濟候上辨事に御渡夫々執行に相成候夫故辨事を行政官と被命候

一 議定 中山前大納言、正親町中納言、徳大寺中納言、中御門中納言、越前前宰相、肥前前中將、薩摩中將、阿波少將

一 參與 小松帶刀、後藤象次郎、大久保一藏、廣澤兵助、三岡八郎、福岡藤次、添島次郎、横井平四郎

右之内福岡添島者和漢西洋之制度に委敷此節之御政體も全く兩人に而調出候事

一 辨事 人名等未相分不申候近日に日誌に出候管にて略之

一 八局之中内國制度被廢候軍防も海陸軍相立候得者被廢候管

一位階を被下候儀は右三局御政事之根本に而外國に對しては大臣と稱し候事に而輔相之御任體三位之右衛門督に而者此迄之御格合清華以上之御方に者手を突き御咄合有之候位に而御大政御執行者決而出來不申候に付二位之右大將に被任議定も四位之諸侯に而者御同様に付二位之中納言御宣下參與者諸藩士之御選出辨事者公卿諸侯も被仰付候得共三ツ之  
二は藩士に而相勤候者不被得止事參與に四位辨事之藩士に五位階を御宣下被仰出候然處岩倉公に於ても甚た御心痛議定之諸侯並參與辨事之藩士者勿論之事實に當惑至極に有之候得共御政體に於て不被得止事之條理に候へは御辭退申上候者不罷成去逆直様御請申上候儀ハ心底相濟不申今暫之處人心折合候迄御受不申上宣旨者辨事に預け候に申談今日大略相決中候

一 太政官諸局人名は近日難陟相濟候上出版布告被仰付候管

一 海陸軍者先陸軍より御取起先日一統御達に相成候通に御座候御しらべ万石拾人之出兵登人前百兩之出銀右之内先三人之出兵に而此兵士出京之上十分精練之處にて尙又三人出兵右同様左候得者十人之出兵相揃候迄ハ來春夏にも懸り可申候關東會津平治し右出兵過半にも至り候者京師不虞之御用意は充分に相立自然に諸侯互之猜忌も相歇所々警衛御人數等一切御解放に相成總計之御手廻に而出京に相成候者必然に候御國ニ取りてしらへ見るに五百四十人之御人數に五万



四千兩之御公役餘者一切御出方ニ及ヒ不申諸藩皆同斷にて富國之道者兵を省くに如くは無く公私に於て至極之良策と奉存候

一 大坂裁判所被廢知府事に被改長谷川岩下直に知府事被仰付候管に御座候木村得太郎日州富高之縣令に一任之管全辦諸藩御領地は一切御取上縣令支配に相成管に御座候(以下略)

閏四月廿七日

横井平四郎

米田虎之助様

〔防長回天史第六編上〕

(明治元年夏期ノ大勢及ヒ毛利氏抄略)  
二十一日太政官代ヲ禁中ニ移シ且ツ政體ヲ改正シ八局ノ制ヲ廢ス太政官ヲ分テ議政行政神祇會計軍務外國刑法ノ七官ト爲ス又地方ヲ分テ府藩縣ニ知事辦事ヲ置ク此日三條岩倉二卿輔相ヲ以テ議定ヲ兼ネ中山正親町三條德大寺中御門ノ四卿及ヒ春嶽閑叟容堂等ノ諸侯ヲ以テ議定ト爲シ小松帶刀後藤象次郎木戸準一郎大久保一藏三岡八郎福岡藤次副島次郎横井平四郎廣澤兵助ヲ以テ參與ト爲シ併ニ位階ヲ賜フ

〔一新録自筆狀〕

(七月四日附下津休也より家老中老宛書翰抄略)  
一大政官之模様別條無之候岩倉卿根ニホリ御精勤ニ候其外公卿ニ之別段之人才無之よし横井ヲ承り候肥前老公御病氣次第ニ御甘キニ之相成候得共今以御床之揚り不申候ニ付止を不被得暫之御休養御願ニ而今日御出立ニ相成申候尤御甘ニ相成候得之猶又御家内様御同道ニ而御登京被成候御舍之由春岳公容堂公之日々參政御精勤被成一躬ハ至而靜謐ヲ拜見候參與之面々も關東を始段々急務之受々ニ引分候ニ付當時ハ到而之人少別紙名前ニ印を用置候丈残り居申候横井も早く全快いたし出勤仕候ハ、朝廷之事茂さばけ岩倉卿之土臺も助ケ可申ヤ見込候後々御座候得とも何分ニも今之通ニ

而何もかも出来不申其遺憾之至ニ御座候同人出勤仕居候得之岩倉卿拜調之都合茂能く小生方少々申上度筋も有之候得共其儀不能殘念ニ候今日ニ至り乏敷物ハ人才ニ而岩倉卿初是ニ之大困究之由重疊御尤ニ御座候太政官要路之名前之別紙懸御目申候

議政官

- |           |
|-----------|
| 三條右大臣     |
| 岩倉右兵衛督    |
| 中山一位      |
| 正親町三條前大納言 |
| 德大寺大納言    |
| 中御門大納言    |
| 河波中納言     |
| 土佐中納言     |
| 越前宰相      |
| 肥前中將      |
| 三岡四位      |
| 福岡四位      |
| 小松帶刀      |
| 木戸準一郎     |
| 後藤象次郎     |

參與

議定

行政官

- |          |
|----------|
| 大久保一藏    |
| 廣澤兵助     |
| 副島二郎     |
| 横井平四郎    |
| 西郷吉之助    |
| 岩下佐次右衛門  |
| 三條右大臣    |
| 岩倉右兵衛督   |
| 阿野中納言    |
| 坊城右大辨宰相  |
| 大原左馬頭    |
| 勘解由小路左中辨 |
| 五辻彈正大弼   |
| 秋月右京亮    |
| 神山五位     |

輔相

辦事



門	脇	五位
田	中	五位
丹	波	五位
千	種	前少將
戸	田	大和守

以上

坂	田	莠
松	宇	豐後
水	野	助大夫

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(五月十五日村上よりの内)

一越前様か、然者宰相様御儀去ル廿一日更議定被蒙 仰同廿二日從二位權中納言 宣下被蒙 仰難有御儀思召候得共御官位之儀者御猶豫御願被成候處被 聞食候右爲御知被仰進候此段各様迄宜得御意旨宰相様被仰付候

五月

一阿州様か、然者阿波守儀去ル廿二日更ニ議定被仰付同廿二日從二位權中納言 宣下被仰付難有仕合ニ被存候右爲御知各様迄宜得御意旨被申付候

閏四月廿一日日本藩庄村助右衛門京攝間に於ける内外の異聞を在藩機局吏坂本彦兵衛に詳報す

〔一新録探索報告〕

(前略) 兵庫及大坂ニ而異人共之評論承取候次第左ニ奉報告候

亞米利加彦云日本即今官軍と關東との戦争差起申候譬ハアメリカ南北戦争ニ似たり是日本今日不可謂之御厄難と奉存候ト云

官軍と關東と互ニ戦争ニ及候時ハ日本之疲弊甚敷無據砲器彈藥等一々是を英佛蘭米之不論外異ニ不求候而ハ難被行然

ニ今日諸侯之疲弊何國と而御同様ニ御座候上ハ無據差當候前之川途ハ年賦之示談賦又之暫時之相談を以外國人ニ借不申候而之難被行薩長土藝其他筑前等之諸藩外國人之金を借或ハ船艦砲器等國債無之國迎之御國之外之悉くハ有之間敷存候薩長土藝等之諸藩下地之國債ニ而も大分之事也加之此節 朝廷之御入費茂亦夥敷戰爭連年打續候末莫太之御國債何を以御返済可相成哉ト云

外蕃之事ハ如何トモ成ヘカラサル日ニ之日本之土地を望候様之儀何時差起可申哉茂難計奉存候既ニ頃日英佛蘭等向後日本國債之成行を評議致し候由承及候ト云

米人口ヒネット之頻ニ傍觀論を發し候必竟日本今日之時勢無據勢を曉不申様ニハ相聞候得共同人之論及結局之英人朝廷に金錢其他を借付心切ゴカシニ致候策略ニ候ト云國債辨不申候時之日本之土地を各國申談保有致候狼心を起り候との論ニ御座候

英人グルーム名人云此節横濱に參り同處ニ而各國人に對し官軍之不氣受甚敷候惣躰日本人ハ自國を食大ニいたし外國人を犬豕奴隸之ことと卑め候を以て日本之道と心得違候族多し畢竟支那人之風習孔子之道と共ニ日本ニ移り行たる物なるへしト云薩州肥後藝御國杯も毀申候と云其内長州人耳外國人之氣受宜諸事ニ付謹慎深しと稱候との事土佐人尤甚敷佐嘉薩州之ニ權候由此節グルーム横濱見聞如此舊幕吏ハ外國交際ニ付而ハ人材多く登用ニ相成居事故各國應接を始メ殆ト水も漏不申事ニ爲有之也依之ミニストル及領事官茂容易ニ事を發不申萬事勤戒を加候勢ニ御座候處 王政一新以後ハ横濱兵庫等之全權其人ニ非して諸事ニ疎漏甚敷外國人茂此節ハ日本知府事を馬鹿ニ致し日本政府を何共存不申形勢ニ相成唯々今日誰彼之應接如此と半ハ諷笑之談柄ト相成候事茂不少候との事

舊幕が佛國に之國債差懸是非只今御返濟無之候而之難叶候積四十万兩餘ニ御座候ト云右之當年中之國債差當り御出方無之候而之難相濟稜也と云

備前守御座候 黒田嘉右衛門溝口太夫御下坂閑老に御差出之御書付と申事ニ而御當家アラン限ハ御寄懸り申上候溝口太夫御座被成候



内ハ決而徳川家ニ對し御貳心無之候との文言ニ有之彼是疑惑仕候儀茂有之候且會津藩上之書狀同家中ニ遣候書狀中ニも當時一途ニ依頼可致之御國之外ニ無之其子細ハ前條云々等之文言も披見致候段嘉右衛門方申聞候間右之本書もしも手ニ入候ハ、何卒披見致度且寫ニ而も御座候哉との儀懸合ニ及其後京都ニ而再度承り合候處何分不明之事ニ候此地ニも種々應答之書狀等も有之全ク離間之策ニ出候事ニ可有之貴國之御事ハ此行世子砲彈矢石之間を御押通被遊御忠勤誠ニ奉感佩候御事ニ而天下ニ彼是申上候者一人茂有之間敷實ニ 朝家ニ茂深く御依頼之御事と奉恐察候との事 黒田嘉話 御門内

一大坂城舊幕兵退去後右様之書付并書狀等數通取殘有之候右を岩倉公に奉入御覽候處直ニ御燒捨被遊候由非常之御英斷ニ御座候との事 肥州藩 柏木咄

土佐藤堂越前紀尾等之親藩ハ同斷稜々之書付等取殘有之候との事

會津人專相唱候ニ土州人之懇切ハ實ニ感泣ニ不堪候最初土佐勢鳥羽を守り居候處初ニ人を遣し申向候旨趣之土佐守人數 勅命を奉し此道を警衛致候若強而此道筋御通行ニ相成候得ハ無據砲擊不致候而ハ難叶候然時ハ甚以不本意之次第ニ候何卒是方間道ニ御懸り御越被下度との儀申來候大坂退去之節茂土州人參嚙々此節之儀遺憾ニ可被存抔切切ニ暇乞抔致相分候事也と紀州に參り話候との風聞諸家々密書等如斯多分ニ取殘候儀ハ必條會桑舊幕之策略ニ而彼我互ニ相疑候様之手段ニ相違無之此議世上一般之公評と承候段紀州藩柏木兵衛話し申聞候

大坂城中ニ取殘有之候密書中ニハ同筆同案之書付等も有之との風便ニ御座候 肥人三宅某話

嗣君御登京之節會桑方人をして頻ニ舊幕兵之先鋒之様ニ洛中ニ揚言爲致候會桑之多術今ニ不被始儀ニ存申候英國ミニストル云日本國之風と貌利太仁亞之風と之自ら別也會津兵を起し候と聞候時之朝ニ此事を聞夕ニ之出兵致し夫ニ而も被行發候時之大舉して速ニ是を征し敵兵之未タ勢微なるニ乘し候事也日本今日之事甚以寬也フリタニア之風と異ト云

又云開國東之舊幕兵官軍之先鋒ニ降然ニ英國ニ而論し候時之毫茂伏罪之兵士を使辱候事無之禮讓を厚ふし東國之人ハ是を西國之侯伯ニ預ケ妻子凍餓を免候丈之處置ニ及ひ降兵之望を安堵セヌめ候事也南兵之北ニ移し北兵之南ニ移し候類也然ニ日本舊幕兵を惡し候事甚敷候然して毫茂生を遂候處置無之候此輩後來如何と想像致候是日本風成時之大ニ英國之風ニ異ふりト云

土佐容堂公より慶喜公に之御書狀も相殘居候との事其大意只今御動被遊候御時節ニ無之候との御文言有之此已後薩長頻ニ容堂公を奉疑候との風便も承及候事

今日 朝廷ニ差當候御急務ハ會計之一事ニ御座候三岡頻金幣之事を議し候大垣小原二兵衛其病痛を厭ひ異論有之候三岡茂既ニ被退程之勢ニ成行候得共此人物を除候而ハ會計之一事之實ニ手を束候との事ニ而不相替員ニ備候由承及申候參與中茂互ニ往來等茂絶而無之先ハ一統相和し不申候勢之由ニ承及申候議定參與中太政官ニ而評議無之儀性々被仰出候事共有之候由

英人ゼームス 有名 船將 云西洋各國近年機械精巧兵卒及大砲彈藥等之蒸氣車を以て運送致候加之大小銃精巧利用を極候譯を以普魯斯ト弟那麻爾加オーステンレーキ 巴上等 國名 等之戰爭之如各國人々皆思エラク此戰必條五七年之久ニも相係可申存候處僅一二ヶ月ニ茂及不申候内勝負相決し合戰之起を記し候新聞帛ト勝敗相決しフロイス帝ヒエスマルク獨乙連合州之大統領と相成候との新聞紙之殆ト一同ニ相達申候事也必竟萬國獨歩之ニイドルゲン 針擊銃 之義 を發明致し候故之儀ニ御座候一旦之戰闘ハ人命を殺し候事多ニ似たりト雖十年或廿年ニも連及致候而數萬之人命を損ルニ比較致候得之凶器トハ中ホから神武不殺之利用アリル可稱候ゼームス云日本兵制及砲器いまた相聞ケ不申候然時之此戰爭急ニ之勝敗有之間敷ト云

此節フロイス佛國と申分致出來殆ト兵端を開キ可申勢ニ候前條之次第ニ而双方之勝敗茂亦年を累テ戰闘ニ及候様之事ハ有之間敷存候ト云 ゼームス 此元及攝坂ニ而承候内外異聞等錄呈仕候猶在後信可奉幣候恐惶頓首拜(本書六月廿五) 日館本に瀆す



閏四月廿一日 壬生旅舎ニ相認

莊村 助 右衛門

坂本彦兵衛様

尙々舊幕吏佛國ミニストル及ヌルモツチ何春洋僧輩ニ依頼し佛國を以格外之保護ト致候軍實ハ惣而佛國政府ニ依頼し長防を減し薩州を倒し藝越之封を削諸侯之兵權を制し其邦入を以佛國に之國債を償ふ事を相企候長薩之諸藩大ニ是を論駁致候ハ當前之條理ニ候廢幕之源實ニ茲ニ基キ候然ニ長薩土藝其他筑前等之各藩是迄ニ而も外異に之國債莫太關東之形勢如此然時ハ此上必定無算之國債相増可申左氏所謂咎而效之罪亦甚敷候天下勤王攘夷家外夷と不戰を以此上なき失策と論候然ニ神州今日之形勢如斯勤王攘夷家之爲ニ被笑可申候是外夷之交際其道を失ひ候より起り候誤ニ御座候英人スルパークス日本人只々 勅命とさへ稱し候得ハ事治候様相心得候地球上ニ決し而無之私論也ト云條理ニ不順して唯々 勅命也トテ事治候國ハ可有之筋ニ無之と云外夷觀觀之間ニ處候而ハ邦國會計向後之處置重疊御思慮有之度乍恐奉存候

閏四月廿一日 日本藩安田源之丞京都より江戸に返りて復命し長岡護美の親書を大隊長清水數馬に致す

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

〔記録〕 閏四月廿一日 夜永田町宇土邸ニ着夫ヨリ本陣及役所へ出頭シテ復命御直書ハ親シク清水元帥へ渡ス

閏四月廿二日 岩倉具視右大臣に任せられ中山忠能以下二位に叙せらる

〔王政復古帳〕

閏四月廿二日

右輔相

右大臣 宣下

岩倉 卿

中山卿者兼而ハ

中山 前大納言

御所付ニ而御用之節々 正親町三條公 迄大政官に御出席之管 徳大寺大納言

一 轉法輪三條公も御歸京之上者岩倉公同様ニ而左大臣ニ被叙哉之御模様

右二位 宣下

春岳 侯

一 木戸淳一郎も追而小松列同様被仰付哉之御模様

閑叟 侯

一 八局茂一ト先ツハ廢局之管 右聞誤等多分可有之候事

阿州 侯

此書付者宮川小源太差出候事

右二位中納言 春岳侯大納言不覺(閏四月廿一日官制改革の際參照せよ)

閏四月廿二日長岡護美軍務副知事を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔閏四月廿五日村上より五月十日藩の内〕

一 左京亮様去廿二日御用之儀御座候間唯今早々御參 朝可被成旨辨事より御達ニ付御供揃次第御乗切ニ而被成御參 内候處是迄之御職務被 免軍務副知事被仰出候段之御書付寫一通并御參 朝之節々御服合之儀付而同日御渡ニ相成候 御書付寫共二通差上申候以上

是迄之職務被 免軍務副知事被 仰出候事

閏四月

長岡 左京亮

閏四月廿二日太政官代に出勤する者の服裝に節朔の外は羽織袴を着用するを許さる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

明治元年

五七五



(前條村上より送達の廿二日御渡の書付寫二通の内)

追而服制可被定候得共官代被移候付而者當職之輩日參殊更御用繁ニ候間當座之處公卿諸侯以下都而節制之餘者羽織袴ニ而參 朝可爲勝手被 仰出候事

閏四月

閏四月廿三日雨天につき山陵御拜の行幸を中止せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

閏四月廿五日村上より 五月十日着

當月二十三日雨天ニ而 山陵御參拜御延ニ相成其後御日限被 仰出無御座候以上

閏四月廿三日親王公卿及び諸侯出行の際の從者數を更に規定せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月廿三日御所御假建に彦根藩留守居御呼出御渡之御書付二通の内他の一通は阿片禁止の令達也)

親王公卿諸侯供連之儀侍六人下部三人其以下ハ刀指二人小者一人ヲ限トス猶減少之儀可爲勝手事

但兵隊警衛之儀不在此限

右之通被 仰出候事

閏四月

閏四月廿三日阿片禁止の令を布達せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

閏四月廿三日御所御假建に彦根藩家御呼出御渡之御書付寫御同方々差廻來候寫

阿片煙草之儀者人之健康を損し人命を害候品ニ付御條約而ニ有之候通外國人持渡之儀ハ嚴禁ニ候然處近比外國人之内阿片煙草密々持越候もの有之哉ニ相聞右煙草之儀者前件生民之大害ニ相成候間賣買いたし或吞用ひ候義堅く不相成候若御法度相犯し他より顯るゝニ於而ハ嚴重ニ咎可申付候間心得違無之様末々之者迄可相守もの也

閏四月

閏四月廿三日下總關宿藩内勤王佐幕の兩派相闘争す大總督府參謀安場一平其間に周旋し勤王派の負傷者を我藩に收容す尋て總督府より勤王派の人々を我藩に保管せしめらる

〔淺井鼎泉記錄〕

一關宿の變云々と御奮記に有之候得とも只々其大略のみにて其詳なること知るよしなし(中略)五月廿日(閏四月の事なり)頃にてもありたるならん夜半安場一平此頃ハ參謀鼎泉の寓に來り申候様ハ關宿藩も勤王佐幕の二派に分れ形勢甚穩ならず而して佐幕派ハ遂に藩公を擁して藩邸内に屯集致居候ニ付早く藩公を抜き取らすんハ後害計るへからざるものあらん明日未明自分等勤王派の人々と藩邸に押懸け之を抜き取らん計畫なり依りて御國の御人數少し計り出張せしめられ度と鼎泉答へて申候にハ其儀ハ去る事ながら御人數の進退は御互の間にて左右すへきものにあらず一々總督府の命を仰かざるへからずされハ御人數出張の儀何分承引しかたしと翌日今の八時頃にもなりしならん横山助之進藤本學之助の兩人來りしに彼等の座に着くや鮮血の臭室内に滿ち何となく常ならざる様子見へたれハ貴下等は何處より來りしやと尋候處彼等申候様ハ我等と安場とハ今曉關宿の藩公抜き取りの爲同藩の勤王家杉山退軒等六七十人と共に同藩邸に押寄候處門扉堅く閉して容易に開かざるに付外より押破りて一同門内に闖入したるに佐幕派の者共抜刀して我等を支へんと致し候ニ付遂に双方の格闘と相成玄關の前又は門内にて大激闘を始め双方多數の負傷者を出たせり混雜の中に藩公は水門より何れにか逃れ行く所を知らざる様相成候ニ付自分等三人我等は細川家の家臣なりと名乗り漸



くの事にて双方を押し鎮め只今歸り來りたる處なり杉山列十四五名は遂に此方の御預と可相成安場は只今右の經總督府へ上申の爲め登營中なりと今の十時頃にはありけん退軒列負傷者多數駕籠にて先手の營所永田町の井伊邸又ハ宇土邸に到着す依りて歩御使番歩御小姓杯十餘人にて彼等の負傷を治療せしめ候處幸に治療能く行届きしかは杉山列も御家にて右の役々に兼て醫術の傳習なさしめられし良法を深く賞讃し且その治療の能く行届きたることを厚く感謝したりと申す事なり十一時頃總督府より右の人々御預の旨達せらる

〔一新録自筆狀〕

〔辰五月二日江戸發淺井新九郎來狀抄略〕

先月廿三日之一舉ハ此許ニ之清水方（清水）始一向承知不仕事ニ而既ニ事終手負人ヲ營中に連來候而始而驚愕仕候事ニ御座候對州列清水手に假之御預ニ相成追而本御預ニ付而之殊之外迷惑仕候云々

閏四月廿三日日本藩遊學生井上多久馬長崎より歸能す

〔遊學一巻帳〕

長岡監物殿家來

井上多久馬

閏四月廿五日

右長崎遊學被仰付置候處御達之趣ニ付一昨日歸省いたし候段同所家司方達

閏四月廿四日箱館裁判所を改めて箱館府と爲し總督清水谷公考を箱館府知事に任せらる

〔防長回天史第六編上〕

〔箱館府ノ設置編末抄略〕

閏四月五日箱館裁判所副總督清水谷公考ヲ以テ總督ト爲シ内國事務局權判事井上石見長秋○薩ヲ參與兼内國事務局判事ト爲シ箱館在留我長藩堀眞五郎内國事務局權判事ニ任シ箱館裁判所所在勤ヲ命セラル

既ニシテ準備稍成ル因テ總督一行將ニ任地ニ赴カントシ我長藩ヨリ提供セル所ノ華陽丸ニ搭乘セントシ堀眞五郎先ツ土井副督（越前大野藩主）ニ從ヒ敦賀ニ至ル次テ清水谷總督モ亦至リ華陽丸船長福原清介ニ照會シテ乗船ノ準備ヲ爲ス時ニ其月十九日ナリ會々土井副督ハ急ニ京都ニ召還セラル是レ朝廷恰モ京都裁判所ヲ改メテ京都府トナリ箱館裁判所ヲ改メテ箱館府ト爲スノ議アリシ爲メニシテ二十四日ニ至箱館裁判所總督清水谷公考ヲ函館府知事ト爲シ函館裁判所副總督土井利恒ヲ罷ム清水谷一行ハ此改革ヲ耳ニセスシテ其二十二日ニ乗船拔錨シ松前領江差港ニ上陸シ函館ノ情勢ヲ審ニシ直チニ函館ニ入港上陸シタリ其二十六日萬函館奉行杉浦兵庫來テ金銀簿書ヲ致ス判事井上接シテ之ヲ收受シ其事平穩ニ終レリ

閏四月廿四日徵兵選出及び軍資納金規定を定めらる

〔一新録皇令、王政復古帳〕

閏四月廿四日軍防局方御留守居御呼出御渡ニ相成候御書付寫二通

今般被 仰出候徵兵并軍資金之儀左之通可相心得候

一歳拾七八歳ヨリ三拾五歳頃マテ強壯之者相撰可差出事

但三ヶ年ヲ以テ定限トす

一當分之内小銃并要具蒲團持參之事

一軍資金上納之儀は三分ノ一ツ、正月五月九月ニ可相納候事

一軍服并月給御賄等從 朝廷被下候事

明治元年



一在所ニ備置候兵隊之儀は 御沙汰次第出兵之覺悟勿論ニ候事

閏四月廿四日

軍防局

別紙之通被相定候間徴兵之儀來ル五月朔日午刻迄留守居役付添守護職屋敷に罷出可申出事

但在京之兵隊無之藩々者來ル七月中無相違可差出候

一五月分金納之儀廿日迄ニ守護職屋敷に持參可致事

軍防局

閏四月廿四日本藩政府は社家觸頭人選其他の件に關して意見を具し京都詰吏員として神祇事務局に指揮を乞はしむ

〔太政官一卷〕

太政官より御渡ニ相成候 御書附寫後々之内

自今大小之神社々家に布告之爲相應之社家と茂觸頭被申附度候間一郡ニ而一兩人程人探有之書付可被差出候其上ニ而

御治定可被 仰出候事

京都詰根取案中に問合ニ付寺社方之付札也

御領内之儀御承知之通寺社御奉行所方一統に御觸ニ相成候事ニ候得之一郡ニ而一兩人觸頭之不被 仰付只今通にし

て被聞候而之如何程に可有之哉其筋御問合被下様子急便ニ被仰越候様惣触御領内一郡ニ而之一二社ほと有之ヶ所も

有之候得之觸頭一兩人被 仰付候而も其詮無之其上遠在ニ至て之神職迄相勤候ものと相考逆も觸頭杯相勤候人触ハ

有之間敷と見込申候間其御含ニ而御取計被下度事

一中古以來某權現或牛頭天王之類其外佛語を以神號ニ相稱候神社不少候何れも其神社之由緒委細書付早々可申出候事

右同斷付札也

某權現以下之御伺ニ相成候答ニ而取調居候事

一佛像を以神祇と致し候神社ハ以來相改可申事

右同斷付札也

佛像を以神祇ニ致し居候分之引改可申候處日本大小之神祇之内何々之唯一之神社と唱妙見辨天金比羅杯其外何々を

浮祠と見究可然哉不洩様御聞籍被下度左候て浮祠に之社職之者奉祠難成哉御問合被下度候事

今度太政官方御渡ニ相成候御書付之内社家觸頭等之稜々別紙書拔付札を用差越申候間其筋に御問合有之別紙之稜々に

巨細ニ御付札を以至急ニ被仰越候様存候以上

寺社方根取中

閏四月廿四日

閏四月廿五日元京都守護職邸を以て陸軍局に宛つへき旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（閏四月廿五日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達）

今般元守護職屋敷ヲ以テ陸軍局ニ被取建候間爲心得申達候事

閏四月

閏四月廿五日各藩有所の軍艦及び船舶調書を提出すへしとの旨達せらる

〔王政復古帳〕

閏四月廿五日彦根様衆御呼出御渡ニ相成候御書付寫

別紙之通被 仰出候間相達申候事

但今明夕中順達可有之候事

閏四月廿五日

軍務局

明治元年



(我藩外十九藩宛)

各藩所持之軍艦并蒸氣船帆前船共船名ヲ始馬力且船之間數ニ到迄早速委細ニ附出候様 御沙汰候事

閏四月

閏四月廿五日官軍白河城を奪還せむとして敵の伏兵に陥り大敗して背進す

〔一新録探索報告〕

(林支助東行雜誌抄略)

一同廿五日(閏四月)曉天薩長大垣之兵白川城を奪はれし事を大ニ憤り是非とも復城之志ニ而白川に押寄し處敵ハ豫め兩方之山間ニ伏兵を隠し置けり然れハ未タ咫尺も別かたき處ニ早や兩方之斥候隊行あひ戰爭始まりし處二三發砲聲響や否や思懸なき所より伏兵起り立散々ニ發砲せしかは官軍遂ニ大敗白坂にも留り不得芦野驛迄引退けり初如斯小勢を以て攻るハ恐くハ失策ならんと黒羽藩其三藩に餘程説得せしかとも是迄之勝軍ニ馴敵を見れば即打ち戦ハ必ず勝と云程之勢なれば中々不聞入且白川ニ砲聲響ときハ必ず我軍取城之時なれハ早々可來會といふて其藩をして畑宿迄出張せしむ然處案外之收軍ニ而葦野迄退しかは黒羽藩も亦同く葦野迄退けり

〔全書〕

風説書 (抄略)

一去月廿四日廿五日之兩日會と庄内白河ニ出勢薩と大戰有之薩勢敗軍手負死人夥しく只二小隊程打殘され候由諸藩より聞取薩長よりハ噂無之候

一薩藩之出兵白河之收軍之爲援兵之由風聞 已上

辰五月十一日

近藤信之助

閏四月廿六日本藩山田五次郎會計官出納司權判事を命せらる

從慶應三丙寅年正月至明治三年

〔江戸京都來狀扣〕

山田五次郎

右者會計官出納司權判事被 仰付旨同廿六日御達有之候由相達申候

閏四月廿六日本藩古庄養拙後名植野虎平太竹添進一郎等探索の命を帯ひて佐賀藩雇の汽船に便乗し横濱を發して仙臺に向ふ

〔淺井鼎泉記錄〕

一古庄嘉門竹添進一郎益田藤彦植野虎平太京都より關東探偵の爲都合に因りてハ津輕迄も被差越候趣にて江戸へ來り滞在罷在候就てハ御先手御人數の中に此迄の御方針に對し種々の物論を惹起し隊長より申出の趣も有之旁々右の四人の中古庄竹添植野の三人ハ奥州津輕候へ被差越候命も有之候ニ付肥前の人數奥州仙臺出張の便船より彼地に罷越候様取計らひ而して益田藤彦は父源七より家督爲致度に付急に歸國可致旨申越したれば御國へ返し候事に致候云々

〔古庄嘉門自筆草紙〕今日までの履歷(古庄鑑)

予ハ東上シテ江戸ノ景況ヨリ奥羽ノ形勢ヲ實見シ都合ニ依リ蝦夷ニ渡リテ今日ノ北海道開拓ニ從事セント思惟シ藩廳出張ノ上役ニ請願シテ許ヲ得東行セリ共同行人ハ植野小平太竹添進一郎ナリシ江戸即東京ニ着スルヤ勝海舟先生ヲ每度訪問シテ先生ノ意思動靜ヲ懸念セリ然シテ奥羽ノ形勢ハ中々鎮定セスシテ追々戰端モ開クヘキ間ヘアリテ通行ノ汽船等更ニナシ然ルニ幸ニ佐賀ノ兵隊ヲ秋田ニ送ル仙臺迄ハ汽船即英船ヲ備ヒテ出航スルアリ因テ佐賀藩ノ役員へ談判シ此ノ汽船ニ便乗セリ此ノ同行ハ矢張植野竹添ナリ而シテ仙臺ノ東ノ濱へ着セリ(以下閏四月廿八日の條に續く)

明治元年

五八三



〔見聞雜錄 慶應四戊辰年 小島家書類〕

〔古庄養拙奥州探案之話抄略〕

一養拙事變業(醫業を廢)被仰付翌々日熊本被差立京地探案被仰付相勤居申候處俄ニ江戸表ニ被差越植野(虎平)竹添(進一)三人罷越彼是探案仕居候處又候俄ニ奥羽之事情探案被仰付候ニ付横濱ニ罷越筑前肥前之人數七八百計リ九條殿正親町殿奥羽鎮撫御出ニ相成候を爲護衛致出勢候ニ致便船五月三日横濱乗出節ニ仙臺領トヲ之濱と申港口ニ着云々

〔防長回天史第六編上〕

〔奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略〕

案スルニ此肥前兵ハ鬘ニ北陸道先鋒ニ隨ヒ江戸ニ着シタルモノ又小倉兵ハ藩地ヨリ一タヒ京都ニ入り轉シテ閏四月上旬江戸ニ着シタルモノナリ大總督之ニ庄内追討應援ヲ命シ前山(清一)ヲ下參謀ニ任シ閏四月之ヲ率キシムニ藩兵ハ英國汽船ニ決シ轉シテ横濱ニ赴ク會々外國船ニ故障起リ運兵ヲ辭ス前山等在再時機ヲ失センコトヲ恐レ佐賀藩船孟春艦ニ駕シテ仙臺ニ至リ九條總督ニ見エテ謀ル所アラントシ前山及ヒ肥前兵ノ一部ト小倉兵ノ士官二名 志津野源之丞 同船シテ二十四日横濱ヲ發ス已ニシテ英國船借用ノ約成リ二十六日二藩兵之ニ乘シテ横濱ヲ發ス先發船二十七日奥州東名濱ニ着シ後發船翌二十八日同所ニ達ス云々

(編者云小島家書類に五月三日横濱乗出とあれとも今取らず防長回天史に従ふ)

閏四月廿六日舊幕脫走林昌之介等海路沼津に至り將に甲府に迫らむとす總督府參謀安場一平急に甲府へ向ふ我藩兵之に隨行す

〔男爵安場家文書安場一平自叙傳〕

本更津屯集の脱兵官軍に抗する能はず林□□を先とし數千名海路小田原に逃れ沼津に至り甲斐に迫らんとするの報あり

り 朝廷急ニ甲斐出兵の事を決し出張を命ず時に津田先輩(津田山三郎將に佐)佐渡行の命ヲ拜シ將に發せんとす途テ品川ニ至リ深夜命ニ應シ熊本縣健士貳拾五名 大砲隊安田退三松見を率て急行す(以下廿九日)

〔安田家 關東征伐事件覺書〕

閏四月廿六日幕府林肥後守嫡子林昌之助品川港投錨ノ軍艦咸臨號ヲ奪乘シテ駿州沼津へ上陸甲府へ攻入ルトノ急報ニ接シ安場一平監軍トシテ差向ケラル右ニ付予カ大砲隊及ヒ大島隊ヨリ健士十名宛ヲ撰出シ都合二十人行軍砲四挺ヲ運搬スルコトニ内議アリ同夕出兵ノ命アルニ付直ニ出發内藤新宿ニ泊ス予カ隊ハ予ヲ隊長トシ森彌左衛門ヲ引廻トシ山田三郎八山田又男井上小四郎河田勝衛尾藤壽五郎本庄熊三郎鈴木權九郎富田英四郎魚住太郎宮川末五郎ナリ予ト森ハ十八ノ外ナリ大島隊ヨリ松見太郎八永山多嘉喜其外十八人名前不詳

全廿七日八王寺宿泊

閏四月廿七日日本藩は神社由緒調及び寺院に神體を勸請せるもの又は神社に佛像佛具等を備へたるものを取除く件を管内に布達す

〔太政官一巻〕

神社山緒等之儀ニ付而太政官方御渡相成候御書付寫一通(三月廿八日御渡し中古以來某)差遣候條別紙之趣早々書付を以相達候様且寺院にも神祇勸請いたし居候向も可有之候間其分も同様相達候様

一佛像ヲ社前ニ掛或は鰐口等差置候分ニ別紙之通付早々取除其段相達候様

右之通候條神社不洩様御達有之書付取持來月廿九日限此方に可有御達候以上

閏四月廿七日

明治元年

寺社方

御奉行中

五八五



御 郡 代 衆 中

付札 本文書付一手永限取調延形堅紙ニ認差出候様との儀も御達之事

閏四月廿七日參與横井平四郎書を米田虎之助に與へ太政官の改革及び關東の情勢等を詳報す

〔小楠遺稿〕

〔太政官改革に關する文は閏四月廿一日の條に掲げたは此には省く〕

一關東大久保勝之兩子非常之盡力に而徳川氏彌以服從に相成御處置として三條公閏四月十二日御發途大坂に四五日御滯り蒸氣船より御東下に相成申候

〔海舟日誌に「閏四月廿三日三條殿並西郷（吉之助林政十郎等肅府の旨承はるとあり）此元に而ハ右御報告を日々相待居一兩日には報告を不待御處置筋御評決に相成候筈に御座候大體百拾萬石より百五拾萬石迄に而宗社を被立候見込みに候併三條公報告之次第に仍而ハ御處置筋相替り可申候

一會津君公者謹身長髪入寺家老受人切腹服罪之由に相聞へ候未表立ち筋々之報告は無之候家中一統者矢張枕城之勢に而別而越後之方手固く相固め候旨に而彼表先鋒より報告有之先鋒惣督岩倉公輕騎に而一日も早く被押詰候様且肥前雷流丸外に一藩名前海軍被差立長藩之海軍と力を競候様一昨日太政官より被仰付候

右之次第に而不遠北陸も一戰に相成可申候

一野總所々之戰爭多くは江戸之脱走浮浪之徒等にて有之尤會人も少々宛は加り居候由也戰爭之次第は日誌に有之候間略之

一東海道へ者一昨廿五日柳川人數貳百五十人繰り出二十より三十才迄之内昨廿六日備前に而も候哉一備繰り出今廿七日阿州勢も同様右之次第に而追々諸藩出兵此方様同斷出兵被仰付候事に付一日も早く御人數京着江戸御人數繰替等之儀有之度相待候

〔中略〕  
一山田五次郎昨廿六日會計局出納司權判事被命候事  
大略右之通に御座候餘者追々言上可仕候已上

閏四月廿七日  
米田 虎 之 助 様  
横 井 平 四 郎

閏四月廿七日日本藩長谷川二右衛門書を下津休也萩蘇源太に贈り京坂の情況を報す

〔荻家文書〕

拜呈仕候彌御安一奉賀候小生儀無異大坂に相勤居申候間乍憚御消念可被下候萩先生よりは先達而は御念書被成下候處其後ハ尙御請も届兼申候御論一々敬服仕候御許一己之私見必多もの増長可恐亡國之勢ひニ相成候由現々笑止千萬ニ候 朝廷之彌以非常之御英斷ニ而此節之御制度被改兵制ニ至迄一言も無之ゑるし誠ニ難有被 仰出迄ニ而未タ御實行上り不申候間速ニ御實効相立候様ニ有之度夫のミ度々言上仕候事ニ御座候大坂ニ而之忠孝を賞し七十才以上之年老をいたゞり大都にてハ有之三千餘ニ而山形先生（典次郎）など御勘定にて御米被下候出役ニ付手を合せおがミ引取候由ニて賣而大坂ニ而も被 仰出之御趣意速ニ通貫人心安堵仕候様ニ有之度專薩藝同役共申談仕候是より病院豐公之宮造宮仕候筈ニ御座候末社ハ加藤氏を始木村列迄夫々分社昨日其地所見分仕候是等之會計三岡之手をからず數萬金を積み候仕法之豐公恩顧之大名に寄附を賦り第一加州を初として數多有之且大坂市在も多分有之來月末より取起候筈ニ而市中士持にゞる等入費覺度病院之永續之仕法市中二便幕吏私欲甚敷事有之一人前市中に受取候處誠ニ繼にて是を除候間下ニ有代物多分ニ相成此税を少々宛上納仕らせ候得ハ一人別ニ付多分ニ相成下ニ之大ニ難有狩衆力にて病院を持候譯柄ニ宜實ニ謀事用られ事聞ル其人々之材力も意外ニ進申候得共邸内之虎之助殿下國後ハ跡戻りにて溝、木大政官に日々出勤ニ候得其他局に一切参り出來兼如何なる譯ニ而候哉早々役人も御引替無之而ハ誠ニ可恐事ニ御座候小生事ハ一切



朝廷に御断も相成兼候勢ニ而既ニ關東會計之主宰に被差越候筈ニ而去ル十三日ニ早打ニ京都ニ被 召候間深情實を  
 遠置候處先下坂仕候様ニ被 仰付已後天下之公論を以御選舉被仰付候間違背無之様ニとの御沙汰ニ而候間此上江戸行  
 之處甚々懸念仕小松久保にも内話仕置候間重疊事情汲取居候右等之事ハ二ノ丸迄申遣置候間内々御一覽可被下候横  
 井も熊本席上之論ニて直ニ出席仕候間小松後藤木戸など現實ニ運ひ候論説ニて横井も事情ニ暮々様ニ相見候實ニ尤之  
 事ニ而御座候近來ハ次第ニ事情相分申候間論説も世舛に的當被用候様ニ相成候此節之顧問選出と改り其列に入り候筈  
 ニ御座候是も席上之論名人ニて現實ニ運せ候處ハ論説之名人ニ而ハ無之基本未々確定不仕末を追之弊多端ニ而其一を  
 言ハ内國之 朝廷御領列藩ニ御預をとき放し郡代を居へ可申との儀ニ相成元より論ハ宜候得共郡代之人を得候而一郡  
 宛其人に任シ又人を得候而ハ半國を茂預ケ之藩をとき其人に任し可然事ニて未々太政官ニが人を得不申候右等之大坂  
 居申間小生之見込とハ相違仕處々裁判所有之實才見届なしニ遣ニ相成候間諸生浮浪之人ニ而其處々之金錢米を取集一  
 時快樂仕候間一向ニ會計三箇手ニ納金無之誠ニ以三岡困窮甚敷有之候右之次第ニ付末々人材登用道を得ざる處御察し  
 可被下候却而當秋作迄大藩々々ニ御預ニ相成居候方何之御世話も無之舊幕丈之納米ニ而可宜關東平治群材相集候上ニ  
 て夫々役割可然存候得共例之愚見先生方之御高論相待申候關東ニ而之御國之人數一戰も仕不申誠口惜し次第ニて種々  
 薩長邊之雜説有之由ニ而御座候今日ニ至り而ハ兵隊之進テ敵を征スル以外無用之異論無之様仕度政事官ハ一日も神速  
 ニ 朝廷之御趣意を布告各其職を盡し候得ハ宜候得共兎角邸内ハ樂屋辨慶臆病ものなるべし種々様々之異論不通用之  
 事を申候而此長ノ日を暮し申候早々虎之助殿上京屈指仕候間くれノも御盡力奉候御許奥向さへ相決候得ハ虎殿ハ  
 御遣し候而も宜可有之と存候 朝廷より御次表之差別無之段被 仰出候此節之御變革ニてハ御國之御爲ニも相成可申  
 と奉存候何分藥功を祈申候事ニ御座候夜中やたらニ相認御推讀奉願候以上

後四月廿七日

洞

水(長谷川二右衛門)

蕉雨先生(下津休也)

萩 犬 兄(萩藤源太)

向々時下御自愛御專一ニ奉祈候小生共身分ニ而難有事ハ 主上玉座ニ被 召存寄御尋問其後ハ御守を茂拜領仕候  
 一天之君如斯ニ被爲在候間諸侯別而御自反無之而ハ行々決而御爲ニ之相成不申候吳々も可恐事ニ御座候小生建白御笑草  
 ニ入貴覽候以上(編者曰、本文中建白入貴覽とあるは四月廿三日の次某日に掲げたる邪蘇教徒處分の件、一は閏四月五日謹久徳川慶喜處分奉答書に次に掲げたる某日の同答申書なり)

閏四月廿七日或人書を本藩世子護久に贈り徳川慶喜の反心なき所以を述へ且つ祖先家康治安の  
 功を擧げ寛典の恩命降下すべく斡旋盡力せられんことを請ふ

〔見聞雜記、内外新報二十五〕

辰閏四月廿七日熊本世子公に松平泉州より留守居を以申出候書面  
 外臣某敢而謹而熊本侯之世子君左右之執事ニ捧呈仕候乍恐尊藩御儀ハ千百年來右文左武厚く名教御遵奉被遊既ニ足利  
 氏熄滅之餘を茂御再興 王幕共ニ其道を被爲盡候猶徳川家ニ於ても數百年之今日ニ至る迄朝野奉依頼實ニ皇國之御藩  
 鎮ニ被爲成天下學て泰山北斗と奉仰候此度 王政御復古天下御一新之折柄世子君刑法事務之重職御選任被爲蒙候段誠  
 ニ天下之大幸鼓腹舞蹈之至ニ不堪奉存候就而者未御門下ニ拜趨仕候儀も無御座候得共萬死を犯し敢て言上仕候何卒狂  
 妄之罪御情恕被成下外臣某恐惶衷訴之情實御垂顧被下置候ハ、不世之御大恩難有仕合奉存上候扱又今般徳川大君不測  
 之大罪被爲蒙東叡山幽閉蝟居側席悚惶謹而 天裁を被仰候段誠ニ以號天痛哭之至リニ堪へず前後を不覺妄言仕候抑大  
 君御事元來御謙讓之御德質ニ被爲在候哉御家御相續之儀茂御望無之御後見之節より只管尊王之思召ニ而無據御相續ニ  
 相成候者是第一御反心無之證と奉存候扱御相續之後將軍職再三御固辭ニ相成候得共 王命不得止意ニ御受職相成候段  
 苟も心中揆ひ處於有之者將軍之權職維々求て可受之處其御儀無之者御反心無之第二と奉存候其趣御不徳之程深く反躬  
 自責竟ニ將軍職御辭退政權御返上之段ニ至候而は何と可奉申上候哉三百諸侯御指揮茂不相叶神祖御創業之六十餘州に



茂御離れ相成候事者愚夫愚婦と申候而も承知可仕然ルを三百年之御鴻業一朝ニ被爲捨天下之公議ニ任せ何分ニ茂王政復古之御紀律相立皇國之御威光大洲ニ被爲輝度御赤心之由譜代諸侯之諫を茂御採用無之決然御英斷有之候は全公明正大 天朝御尊崇御恭順之餘りより之御事ニ可有之類ル雄藩豪侯之口ニ尊王攘夷を唱へ候類とハ懸隔ニ可有之候苟も反心於有之者誰か國ニ離れ職を失ひ如此所業可仕哉是御反心無之尤明證之第三ニ御座候猶東西御嫌疑之御間より俄ニ二條御城に御退去之節如何ニも 王命御尊奉精々諸臣之動搖を御鎮撫江戸表迄茂厚く御沙汰有之竟ニ阪城に御下退之段是其御反心無之明證之四ツニ御座候其後尾越兩侯之御内論ニ付謹慎御上洛可有之處御供先之行違より戦争ニ及候節茂無勿體も錦旗立向候より天威咫尺深く御恐懼ニ而三軍を御見捨左計り之金城湯池を差置取物茂取敢へず獨身御東歸ニ相成候段右は誠ニ武門之恥辱千載之上千載之下又可有之儀とも不奉存候此時ニ當り萬々一茂御反心於有之者多言を不待然ルを只々尊王御恭順之御運ひより右之御始末ニ至り候段是又御反心無之尤證明之第五ニ御座候扱御東歸之後流石譜代恩顧之諸藩旗士も不少御再舉之儀身命を抛ち日夜致諫争候得共聊御動搖之氣色茂無之上錦旗東下候半ニ萬一敵對致す者於有之者予か首級を取ルニ同しとの上意ニ而都下恟々を御鎮撫恭謹謹慎只管 王諫を被爲待候此時ニ當り萬一御反心於有之者諸軍を引率し御上洛於闕下是非曲直を御陳正有之候共未タ遲キニ無之竟ニ其儀も無之段是又御反心無之明證之第六ニ御座候其後彌御恭順被爲在伏罪之御陳情御座候趣ニ而候得共御赤心貫徹不仕哉六師御親征之大命茂下り候より御一身之處置無之東叡山中ニ幽閉御墊居天ニ仰キ地ニ伏し益恐懼衆非を只管御一身之上ニ御引受諸侯者申ニ不及旗下之士ニ至り候迄盡く被召放御心中如何程ニ可被爲在哉是御反心無之明證之第七ニ御座候右之通ニ御座候へハ天地神明も御照覽御反情ニ於てハ毫末茂被爲在間敷草莽間之傳聞ニ而定而翻歸仕候儀も可有之奉存候乍去此度王政御復古天下之更始御新政之初メは不經ニ御失錯御座候へ共好生之御大德民心ニ浹洽仕候ハ、億兆之人民感泣歸仁猶孩兒之慈母を慕ふ如く御王政者日月新相立可申敷實ニ皇國之御爲大君之御謝罪御貫徹之道は被爲在間敷哉總令大君如何様之御罪跡御座候共既ニ數代之將軍職被召放一日六十餘州を被上候上御垂憐之道被爲在間敷哉且總令大君者暫く置

其東照御宮王宇ニ御力を被盡天下萬民之爲風雨ニ構浴し千辛萬苦被成候て三百年之今日ニ至候迄天下を泰山之安キニ置玉し御勤勞上下快樂を同しく致し深仁大澤を被思召徳川御家之儀御眷顧之道被爲在哉夫刑法者國家之大典宏則王者之所慎權衡誠ニ懸て欺ニ輕重を以すへからず伏而願曰ハ賢良明公世子徳川大君王政復古公明正大之御徽意を被爲體上者衰職を御補佐中は徳川御家を御推舉下ハ萬民を御仁愛被爲在候而天下具ニ所瞻望被爲副候ハ、臣某多年劬ニ御下風を奉仰慕候素志も空しからず萬民舉て御恩澤を感戴可仕候外臣某敢て伏願之罪を犯し諫而言上仕候外臣某恐懼之至ニ不堪頓首々々死罪々々

閏四月廿八日本藩木村得太郎日向國富高知縣事に任せらる  
〔御國往來狀扣〕

右者是迄之職務被 免日向富高知縣事被 仰付旨昨日於 御所被 仰渡候右之趣爲可申達如是御座候以上  
閏四月廿八日 木村得太郎  
田中八郎兵衛  
溝口孤雲

閏四月廿八日徵兵四十八人以上を出す諸藩に對し其指揮官を出すへき旨を命せらる  
〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

〔閏四月廿八日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達〕  
今般徵兵石高二應シ四十八人以上指出候藩々指揮官相添可指出尤石高人數之員内可爲候事  
後四月 諸藩



閏四月廿八日徵兵教授の爲め英式銃陣習得せる我藩人二名を出仕せしむへき旨命せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

肥

後に

今般徵兵銃陣教授方并助役之者御用ニ付其藩人數之内英式銃陣心得居候者兩人被差出候様被 仰付候事

閏四月廿八日

閏四月廿八日貨幣通用の件に關し示達せらる

〔王政復古帳〕

〔閏四月廿八日産根藩より回達三通の内〕

此度字内貨幣之定價御吟味之上通用被仰出候處諸上納ニ不相立哉ニ茂相心得且又私利を營み多分打替等相取候趣相聞  
に以之外之事ニ候右定價被仰出候迄者右金銀錢等勿論洋銀等度御定通り無疑念取交通用可致候尤太政官諸上納并御  
拂等茂惣而御定之通御取扱相成候間其旨可相心得候萬一異儀申立候者於有之者屹々可被及御沙汰候事

閏四月

閏四月廿八日日本藩徵兵選出に關し疑惑あるを以て留守居役をして指示を請はしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一軍務御局

今般徵兵被 仰出候趣奉畏候右者來月朔日午刻迄留守居付添陸軍御局に罷出御届申上候得者即日より直ニ同所に被留

置候儀と相心得候而宜有御座哉

〔附箋〕本文申出之通

一軍服并月給御賄等者徵兵差出候即日より被下候儀と相心得候而宜有御座哉

〔附箋〕御賄之儀者即日より被下月給者一ヶ月締メ軍服者追而仕調次第被下候事

一兵隊之儀者依御達 行幸御警衛或者左京亮他行之節之警衛其外陣屋中常備等被是差配候譯ニ付一萬石ニ三人之割合ニ  
者何分不足仕候見込ニ御座候間先在合文ケ指出不足分者早々國許に申遣到着次第差出候筈御座候

但此節差出候筈之兵隊者最早詰永ニ相成居候間限定差出置候儀者難出來追而國許より人數參着之上者交代爲仕度  
尤其節ニ至猶奉願候心得ニ御座候

〔附箋〕本文申出之趣不苦候事

一徵兵三ヶ年定限之内ニ而も故障之儀等出來候節者外人體を以代り合せ候儀者宜有御座哉

〔附箋〕無據筋合ニ依而ハ申出之通可被 仰付候事

右之外追々可奉伺儀茂可有御座候得共先右之段奉伺候宜被成御差圖可被下候以上

細川 越中守内

閏四月廿八日

内 山 又 助

閏四月廿八日長岡護美軍務局へ出勤の際隨從兵士の休憩所建設の爲め地所借用の件留守居役を  
して請願せしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

辨事御役所

軍務御局之儀飛鳥井様御亭に被設置候付而者左京亮儀日致參仕兵隊等供待之箇所無御座候付飛鳥井様御門前ニ而五  
拾坪計之地所當分之内拜借被仰付被下候様左候ハ、往來之妨ニ不相成様假家取立供之者差置申度此段奉願候急被成御

明治 元年



沙汰可被下候以上

長岡左京亮内

閏四月廿八日

内山又助

閏四月廿八日我藩末家細川利永細川行真共に在京兵隊なく來五月朔日迄に差出し得ざる旨を申告す

〔王政復古帳〕

軍務御局

越中守末家細川若狭守細川豊前守儀御達之通徴兵差出可申處右兩家共在京之兵隊無之來五月朔日迄ニ差出候儀仕兼候間右之趣早々在所表に申遣七月中差出候様可仕候尤委細之儀之兩人よりも御届可仕候此段申上候以上

細川越中守内

閏四月廿八日

内山又助

閏四月廿八日我藩保管する所の關宿藩杉山對軒等の人名及び携へし所の物品調書を總督府に提出す

〔一新録自筆狀〕

御預人關宿藩名前

杉山對軒 加藤求馬助  
蒔田彦之進 羽太庄兵衛  
三浦平之助 奥原源次衛右門

小島榮之助 遠山時之助  
岡鈕三郎 井上雅之助  
土肥銳之進 堀力次郎

池田正之助 石塚蘇太郎

關亂管入付

近藤與六 水野孫平

一馬上銃

登挺

中鶴久四郎 八木平治

關亂附

八挺

野邑輔 野上錦五郎

一ピストール

田邊政之助 社辰次郎

玉藥少々附

内田榮太郎 小柴貫一郎

メ三拾壹挺

井口金治 黒川友二郎

一大小

三拾腰

瀬尾求四郎 黒崎教藏

但内壹腰不足

入澤恒三郎 塚原其次郎

右之通ニ御座候以上

辰閏四月二十八日

計參拾人

一ミニヘール

貳拾貳挺

閏四月廿八日熊本藤崎宮の社僧神護寺は同宮の神體を明日取下くる旨を申告す尋て本藩廳より指示する迄見合すへき旨を達す

〔太政官一卷〕

口上覺

一佛像を以神祇と致候神社者以來御改被 仰付旨御達ニ付藤崎宮御神祇之儀明日取下可申候

一鰐口梵鐘其外御社内に佛像安置有之候諸堂并經塔之類者上方御取除被仰付可被下候此段御達仕候以上

閏四月廿八日

神護寺

明治元年

五九五



寺社御奉行所

本文神祇等之儀從是申達候迄ハ取下方可被見合置候以上

閏四月廿九日

寺社御奉行所

閏四月廿八日古庄養拙植野虎平太竹添進一郎等奥州東名濱に着船す仙臺藩守兵怪しみて之を拒む古庄等之を辯し遂に仙臺城下に入るを得たり

〔古莊嘉門今日までの層歴〕

然ルニ幸ニ佐賀ノ兵隊ヲ秋田ニ送ル仙臺迄ハ汽船即英船ヲ備ヒテ出航スルアリ因テ佐賀藩ノ役員へ談判シ此ノ汽船ニ便乗セリ此ノ同行ハ矢張植野竹添ナリ而シテ仙臺ノ東ノ濱へ着セリ仙臺藩ヨリハ其海岸ニハ大ニ出兵シテ容易ニ佐賀ノ兵隊ヲ上陸セシメス或ハ都合ニ依リテハ戦端モ開クヘキ有様ナレハ予等ハ此ノ双方ノ間ニハ關係ナケレハ船中佐賀藩ノ兵隊長ニ談判シテ其近傍ニ在ル小船ヲ備ヒ上陸セリ通船中島々ヨリ少々發銃セシモ我々ノ兵士ニアラサル事相分リ直クニ相止メ格別ノ事モナカリシ着船セシハ著名ナル松島ナリシ同島ニモ仙臺ヨリ兵隊ヲ大分出張セシメリ其ノ兵隊長予等ノ宿所ニ來リ面談セシニ能ク言詞相通セス予等ハ熊本人ニテ戦争等ニハ一際關係ナシト申シ述ヘシモ彼等ハ九州ノ詞ハ一般ニ同様ニ聞キ取リ予等ノ詞ハ鹿兒島詞ナリトシテ鹿兒島ノ探索人ナリト疑ヒ予等ノ宿所ニ一小隊計リノ兵ヲ置キテ取り圍ミ一夜ヲ明カセリ其翌日ニ至リ松島ノ何トカ云フ寺ノ和尚曾テ熊本ニ遊學シテ熊本城下ノ澤村宮門先生ノ家ニ暫ク滯留セシ事アリテ熊本ノ事ハ能ク承知シ居レハ此ノ和尚ヲ以テ果シテ予等ハ熊本人ナルヤヲ確知セシ爲メ差遣ハセリ其ノ和尚來リテ種々熊本ノ事ヲ問合セシ上愈眞ノ熊本人ナル事判明シテ其團ヲ解シ事アリ因テ此ノ松島ヲ發シテ直チニ仙臺ノ城下ニ到リテ宿泊セリ(以下五月廿五日に續く)

〔防長回天史第六編上〕

〔奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略〕

前山(清一)及ヒ肥前兵ノ一部ト小倉兵ノ上官二名同船シテ二十四日(閏四)横濱ヲ發ス已ニシテ英國船借用ノ約成リニ十六日二藩兵之ニ乗シテ横濱ヲ發ス先發船二十七日奥州東名濱ニ着シ後發船翌二十八日同所ニ達ス云々

案スルニ孟春艦ニ熊本藩古庄嘉門植野小平太竹添進一郎便乗セリ竹添ノ直話ニ曰ク弘前藩主津輕氏ハ肥後侯ノ弟ニシテ津輕家ニ養子ト爲リタルモノトリ予等ハ肥後侯ヨリ弘前侯へ與フル手翰ヲ傳達シ并ニ奥羽ノ形勢ヲ探知スル爲メ藩命ニ因リ佐賀船ニ便乗ヲ請ヒタルナリ當時仙臺人等ハ薩長ヲ視ルコト仇敵ノ如ク佐倉二藩兵ノ來着スルヤ認メテ薩長兵ノ來リテ戰ヲ挑ムモノト爲シ兵ヲ海濱ニ出シ其上陸ヲ拒ミ將ニ大事ニ及ハントス予等ハ上陸シテ自己ノ來由ヲ述ヘ兼テ來着ノ兵ハ全ク佐倉二藩兵ニシテ鎮撫使護衛ノ爲メナルコトヲモ辨シタリ佐倉二藩兵ノ上陸ヲ得タルハ一行ノ説明ノ力ニ因ルコト少カラス但シ道路既ニ塞リ予等一行ハ弘前ニ至ルヲ得ス藩主ノ手翰ハ仙臺ニテ弘前人ニ託シテ之ヲ弘前侯ニ達シ其返翰ヲモ得タリ既ニシテ仙臺ニ藩ノ老臣某々等(仙臺藩正使坂英力米澤藩正使莊田總五郎等)二藩人若干ヲ從ヘ朝廷ニ上ル書ヲ携ヘ如何ニシテ備ヒ得シ賊海路汽船ニテ西上ノ事アリ予等一行其船ニ便乗シ西歸セリ

閏四月廿九日田安龜之助をして徳川の家名を相續せしむとの勅命下る

〔江城日誌第一號〕(宮村家藏)

〔肥後四戊辰年五月五日發行〕  
後四月廿九日徳川龜之助へ御渡ニ相成候  
勅諭之寫

慶喜伏罪之上ハ徳川家名相續之儀祖宗以來之功勞を被 思食格別之 愷慮を以て田安龜之助へ被仰出候事  
但城地祿高之儀ハ追而可被 仰出候事

後四月

明治元年



右ハ徳川龜之助御呼出ニ相成候處病氣之趣ニ而名代として一橋大納言登城モ大陪察使三條左大將殿附屬万里小路繪殿  
參謀西四計殿并ニ下參謀軍監列座之上左大將殿より右 勅諭御渡ニ相成候處雖有仕合奉存候旨御請申上退去モ

〔海舟日誌〕

閏四月廿九日、田安殿西城え被召客龜之助殿御相統之儀被仰渡、祿高城池の儀は追而被仰出旨なりしかば旗下疑念し  
或は憤激大事を誤らむと廊廟一策を施され我が動靜如何を察せらる歟  
此頃彰義隊の者等頻に遊説し其黨倍多く一時の浮噪輕舉を快とし官兵を殺害し東臺に屯集殆と四千人に及ふ其然るへ  
からざるを以て頭取已下に説諭すれとも敢て是を用ひす虚勢を張て以て群衆を感動す或は陸奥同盟一致して大舉を持  
と唱へ或は法親王を奉戴して義舉あらむと云無稽にして無着落を思はず有司もまた密に同する者あり甚敷は君上の御  
内意なりと稱して加入を勧むる者あり是を非といふ者は虚勢を示して劫さむとす

閏四月廿九日諸藩貢士に陸海軍制會計法及び關東鎮撫の三條につき意見を徴せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

〔閏四月廿九日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達二通〕

諸藩 貢士

別紙三條御下問被仰出候間各見込相認來月二日禁中假建所に可罷出候事

閏四月

議事策問

一軍備ハ民安ヲ保ツ所以シ兵制ヲ定メ海陸軍ヲ興ス其術如何シ

一金穀ハ用度之第一庶政皆是ニ依テ舉ル今日會計之意向ヲ以テ其所立アラシ

〔全書〕

一東軍未奏成功人心猶危懼ヲ抱ク不知何ヲ以テ勳職制定其宜キヲ得シ

〔閏四月廿九日彦根藩留守居より我藩外二藩へ廻達の貢士差出有之候藩々〕

王政に日新  
録には酒  
井右亮  
の次は京  
田の路に  
のあり守

- |                            |                          |                          |                          |                          |                          |
|----------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 徳川元千代 <small>尾張名吉屋</small> | 紀伊中納言 <small>紀伊山</small> | 加賀宰相 <small>加賀</small>   | 黒田美濃守 <small>美濃</small>  | 鍋島肥前守 <small>肥前</small>  | 藤堂和泉守 <small>伊勢</small>  |
| 池田備前守 <small>備前</small>    | 池田因幡守 <small>因幡</small>  | 佐竹右京大夫 <small>出羽</small> | 上杉彈正大弼 <small>出羽</small> | 柳澤甲斐守 <small>大和</small>  | 榑原式部大輔 <small>高田</small> |
| 小笠原千代丸 <small>小笠原</small>  | 立花飛彈守 <small>飛騨</small>  | 松平出羽守 <small>出羽</small>  | 松平下總守 <small>武蔵</small>  | 奥平大膳大夫 <small>中津</small> | 戸田采女正 <small>大坂</small>  |
| 前田綱松 <small>前田</small>     | 前田飛彈守 <small>加賀</small>  | 松平主殿 <small>尾張</small>   | 内藤備後守 <small>尾張</small>  | 松浦肥前守 <small>肥前</small>  | 本多主膳正 <small>尾張</small>  |
| 戸田丹波守 <small>丹波</small>    | 石川宗十郎 <small>伊勢</small>  | 松平伊賀守 <small>上野</small>  | 加藤遠江守 <small>大和</small>  | 青山左京大夫 <small>丹波</small> | 脇坂淡路守 <small>播磨</small>  |
| 岡部筑前守 <small>筑前</small>    | 京極佐渡守 <small>筑前</small>  | 伊東左京大夫 <small>日向</small> | 黒田甲斐守 <small>秋田</small>  | 松平三河守 <small>美作</small>  | 有馬遠江守 <small>尾張</small>  |
| 本多美濃守 <small>美濃</small>    | 松平圖書頭 <small>尾張</small>  | 土井能登守 <small>大野</small>  | 櫻井遠江守 <small>尾張</small>  | 間部下總守 <small>尾張</small>  | 永井日向守 <small>尾張</small>  |
| 久松内膳正 <small>尾張</small>    | 内藤若狭守 <small>尾張</small>  | 松平但馬守 <small>尾張</small>  | 朽木近江守 <small>尾張</small>  | 安藤飛騨守 <small>尾張</small>  | 水野大炊頭 <small>尾張</small>  |
| 松平範次郎 <small>尾張</small>    | 安藤理三郎 <small>尾張</small>  | 板倉甲斐守 <small>尾張</small>  | 仙石讃岐守 <small>尾張</small>  | 大村丹後守 <small>尾張</small>  | 小出伊勢守 <small>尾張</small>  |
| 木下敏次郎 <small>尾張</small>    | 小笠原左衛門 <small>尾張</small> | 土井淡路守 <small>尾張</small>  | 伊達若狭守 <small>尾張</small>  | 相良遠江守 <small>尾張</small>  | 内藤金一郎 <small>尾張</small>  |
| 織田左近將監 <small>尾張</small>   | 分部若狭守 <small>尾張</small>  | 織田出雲守 <small>尾張</small>  | 大關泰次郎 <small>尾張</small>  | 市橋下總守 <small>尾張</small>  | 本多肥後守 <small>尾張</small>  |
| 京極飛騨守 <small>尾張</small>    | 九鬼大隅守 <small>尾張</small>  | 森對馬守 <small>尾張</small>   | 久松大藏少輔 <small>尾張</small> | 牧野遠江守 <small>尾張</small>  | 稻垣若狭守 <small>尾張</small>  |
| 久留島伊豫守 <small>尾張</small>   | 小笠原近江守 <small>尾張</small> | 酒井右京亮 <small>尾張</small>  | 稻葉備後守 <small>尾張</small>  | 京極下總守 <small>尾張</small>  | 伊東播磨守 <small>尾張</small>  |
| 加藤出雲守 <small>尾張</small>    | 大岡越前守 <small>尾張</small>  | 谷大膳亮 <small>尾張</small>   | 青木民部大輔 <small>尾張</small> | 本庄彈正忠高 <small>尾張</small> | 岩城左京大夫 <small>尾張</small> |



王政日新  
録には別  
右京宛の  
次は美名  
あり

- 稻葉右京亮白根 三浦備後守山 松平攝津守小幡 高木主水正河内 本多豊後守山 酒井紀伊守出羽
- 土岐隼人正上野 津輕越中守津 津輕式部少輔石 九鬼長門守三津 酒井銆次郎安房 酒井右京大夫管
- 一柳因幡守小伊 堀 右京亮越後 建部三二郎林田 牧野豊前守田 山口長次郎常陸 田沼玄蕃頭江
- 伊達陸奥守伊 西尾隠岐守江 稻葉美濃守山 木下備中守備中 松平讃岐守讃岐 毛利伊勢守伊
- 池田攝津守四 竹腰伊豫守元尾 三宅備後守三河 北條相模守河内 小笠原佐渡守津 酒井下野守上野
- 遠藤但馬守近江 (列侯氏名の下居所の割註は編者の記入せしものなり)

閏四月廿九日官許を得ざる刊行書の發賣を禁せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月廿九日産根藩田部金蔵より我藩外各藩留守居役への廻達)

一新著并翻刻之書類官許之上刊行可致之處近來種々之書類撰ニ刊行いたし候段不謂事ニ候以後總而官許を不經候品賣買堅被差停候事

閏四月廿九日

閏四月廿九日日本藩徴兵人員先つ五十四入を出すへき旨申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一軍務御局

今般徴兵被 仰出候ニ付先在合丈ケ差出不足分は早々國許に申遣差着次第差出候管之段昨日申上置候通ニ付先五拾四人明日差出申管ニ御座候此段御届仕候以上

細川越中守内  
内 山 又 助

閏四月廿九日

閏四月廿九日我藩制度を改革し船方を軍備方に併合す

〔明治元年  
機密間日記〕

御奉行に

御船方之儀向後御軍備方に併局被仰付追而 來着之御軍艦を初惣而之御船々共御軍備方に被附置候條左様相心得達筋之儀ハ夫々可被取計候以上

閏四月廿九日

閏四月廿九日伊達宗城書を裁して長岡護美等に贈り時事に關する所見を述へ其意見を叩く

〔子爵長岡家文書〕

拜啓連日之梅霖不快爽候處愈御揃御清迪被爲御奉職恭賀々々夜白被成運神略遙願美望の至候過日來兼而御密議之通り太政官大變正御施行之趣風評ハ傳承申候得共制度亦御任用之人體等御沙汰之次第何れよりも不申來甚敷ニ至てハ當局總督之宮モ被免候由且誰カ知軍ニ被命候哉太政官中ニ當局被構候やそれすら表立承知不致小松等も當職ニて外國事務相兼候由當地判事迄申越候處その當職と指候職も不知望洋候條乍御面倒早々御密示被下度實ニ如斯裁判所始度外に被置而ハこまり入候

○諸藩より兵員且賦金差出候事も御布告ニ相成連ニ禁軍可相整と賀上候右ニ付例之管見申述試度當時關東始賊兵爲征伐兵隊差出有之候諸藩モ無差別七月迄ニハ差出候儀と存候處夫にてハ餘りあたり強く御無理歟とも被考候如何  
○關東並ニ會津邊模様近日報告候ハ、御密示被下ガラバより五代へ廿七日 話にてハ鋼鐵船ハ代價被相渡とも難差出様反

明治元年

六〇一



て□□ムよりガ氏迄申越候由右賊勢さかん故中立且願望いたし候歟之由且舊幕會々懇意之向より商船汽船用立兵隊運送いたし又沼津より小田原邊も賊兵にて横斷せるよし也右ニ付昨日家來外用事旁ミツトホルトへ遣爲承候處町人ともよ申越候風説候得共不得確證尙又しかと分候處ハ早々可及通達と申候右等御聞込候哉長藩兵隊敦賀より新潟へ發向疾ク相廻今程憤進苦戦と想像申候意長紙短不盡言勿々聞

五月小盡

少 將 宗 城

握機全權

烏丸 兩閣下

御始侍史

二仲時下御自重爲朝野專念申候僕碌々瓦全乍憚御放念所希候也

閏四月廿九日總督府參謀安場一平我藩兵を率ゐて甲州烏澤驛に至る時に舊幕脫兵黒駒驛に達すとの報あり仍て安場參謀輕騎急馳して甲府に赴く

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

全廿八日 鶴川宿泊

全廿九日 烏澤驛ニテ沼津ヨリノ飛脚ニ出會シ黒駒へ林ノ部隊進入セシトノ報アリ仍チ安場監軍ハ附屬吏ヲ件ヒ急行

ニテ甲府へ赴ケリ隊列ハ黒野田宿泊

〔男爵安場 安場一平自叙傳〕

〔家文書 閏四月廿六日の續き抄略〕

時甲州路養意の時ニ際し人夫繼かす中途獨騎急馳夜半甲府ニ達し使ヲ町奉行ニ遣し翌日登城の事を達す(以下五月二日)

五月朔日大總督府參謀安場一平甲府城に各藩隊長を會し將に甲府に入らんとする舊幕脫走林昌之助等を峻拒するに決し舊幕吏中山誠一郎をして之を説諭し遂に黒駒驛より沼津へ退却せしむ

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

五月一日監軍附屬一名途中迄出迎テ今日甲府表出張ノ各藩ノ隊長ヲ甲城へ召喚アリテ林昌之助甲府へ進入ニ對スル處置ヲ評議決定ノ管ナリシ旨ヲ監軍ヨリ傳達ノ爲メ來リシト云フ右ノ件ヲ聞取り石和驛ヨリ隊列ヲナシテ甲府へ着シ坂本屋ヲ宿所トス

安場監軍ニ面接シテ黒駒驛ニ於テ林一隊ノ舉動且甲府城代沼津藩水野侯初メ會合セシ各藩ノ隊長評議ノ趣旨ヲ聞クニ林昌之助ヲ甲府へ入ルヲ許スノ議ト入レサルノ議兩岐ニ分レ紛紜セシ處松代藩杯ハ一步モ入レサル説ヲ主張シ若シ強テ入府スルニ於テハ已ムヲ得ス防戦ノ手段ヲ爲スノ外ナシト云フ監軍素ヨリ防止ノ説ヲ取り水野侯ヲ説キ追拂ノ議ニ一決セリトノナリ仍テ幕吏代官中山誠一郎黒駒迄相越シ林列ヲ説諭シ沼津へ追返ス斷判中ノ由然ルニ夜ニ入り林列大勢黒駒ヨリ甲府へ向ケ進入ノ況狀ナリト傳フ是ヲ以テ支度用意ヲナシ防戦ノ準備ヲ整ヘ斥候ヲ出シ置キシ處夜半ニ及ヒ監軍自ラ來テ林列ノ脫走隊明曉愈沼津へ向ケ引返ス事ニ落着セシトノ報ニ接シタルトノ口述ニ付巡邏ノ隊士ヲ呼歸シ宿所々々へ引取ル

〔男爵安場 安場一平自叙傳〕

〔家文書 翌日(五月二日) 則登城大ニ軍議を開き處分を決す町奉行中山及び城代水野の老臣某等異議あり大義ヲ發して論破し遂ニ

五月朔日陸軍所法度を定めたる旨を不達せらる

明治元年



〔王政日新錄〕(熊本縣)

陸軍所法度

- 一 皇國一致 御國威相立候儀至要之事ニ候條士風を不失禮義を守り親交可致候事
- 一 長官々々之指揮堅く可相守事
- 一 何時出兵可被 仰付茂難計候間速ニ出陣相調候様心掛勿論之事
- 一 猥ニ酒を飲むへからざる事
- 一 亂妨狼籍者勿論押買等堅無用之事

五月朔日本藩徴兵五十四人名簿を添へ陸軍局に出仕せしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政日新錄(熊本縣)〕

一 陸軍御局

今般徴兵被 仰出候付高壹萬石ニ付兵員拾人當分之内三人今朝日迄ニ留守居付添差出候様御達御座候處 行幸御警衛或者左京亮他行之節之警衛其外陳屋中常備等彼是差配候譯ニ付壹萬石ニ三人之割合ニ者不足仕候得共先在合丈ク別紙名付之通差出申候不足分者國許に申遣置候間參着次第早速差出候様可仕候尤右之趣之軍務御局に茂申上候處申出之通不苦旨御差圖御座候此段茂御届仕候以上

五月朔日

細川越中守内

内 山 又 助

一一六休日ニ付外出不苦候事

但暮六ツ時限り歸局可致事

右條々堅固ニ可相守之若相背候者於有之而者主人々々

引渡嚴重可被 仰付者也

五月

右之通徴兵之面々に被 仰渡候事

五月朔日

一 陸軍御局

徴兵

指揮官隊中取締役兼帶	物頭格	東	太郎	平	三	五
指揮官	士分	鈴木	傳	太	郎	四
		西山	傳	之	進	七
		磯野	今	彦	八	二
		竹村	助	次	郎	九
嚮導	徒士	山川	爲	三	郎	七
裨官	徒士	都山	矩	平	一	三
		山田	七	左衛門	四	三
		野尻	儀	八	郎	五
		嘉悦	才	太	三	五
		三浦	門	平	三	三
		森	會	兵	衛	五
銃兵						三

明治元年

徒士

河内	山	弘	八	二	二
入江	貞	雄	五	二	十
内田	童	之	助	九	九
佐藤	甚	四	郎	八	八
岡田	卯	藏	二	十	八
岡田	嘉	兵	衛	十	八
田尻	作	右衛門	五	三	十
行德	歸	九	次	二	二
北原	喜	十	郎	一	二
森山	新	平	郎	三	十
寺崎	三	郎	七	二	十
島田	準	次	郎	一	二
三原	金	吾	一	二	十
田尻	彦	八	郎	二	十
岡本	喜	十	郎	四	三
牧野	慎	左衛門	五	三	十
宗村	熊	四	郎	二	二
田添	太	郎	彦	八	十



坂田	八朝	二
内田	英記	二
中山	榮記	二
間部	政彦	六
高木	敬藏	二
本田	龜喜	三
桑原	七郎	九
稻原	吉左衛門	二
水野	左久助	三
高木	益次郎	五
本田	禮次郎	二
藤山	富士平	四
稻葉	哲之助	三
櫻井	又之丞	九
栗崎	丈左衛門	三

五月朔日本藩銃陣習得者二人を陸軍局に出仕せしむ  
〔京都并江戸返達御用狀扣、王政日新録熊本縣所藏〕

人數合五拾四人  
右之通差出申候以上

大鼓手

江藤	又作	三
西川	徳右衛門	一
鳥田	熊彦	二
緒方	權五郎	五
鎌田	新兵衛	三
赤星	嘉一郎	二
芥川	和次郎	一
大鼓手		
徒士	神山熊彦	八
佐久間	義雄	五

細川越中守内

五月朔日

内山又助

一陸軍御局

今般徴兵銃陣教授方並助役之者御用ニ付常藩人數之内英式銃陣心得居候者兩人差出候様被仰付候段軍務御局より御達ニ付未熟之者には候得共則兩人今日差出申候

右之通御届申上候以上

士分	古庄	八	太
士分	池永	一	平

細川越中守内

内山又助

五月朔日

〔從慶應二年至明治三年  
江戸京都來狀扣〕

右者徴兵引廻被仰付置候處被御免徴兵銃陣教授方并助役之者御用ニ付差出候様御達ニ付右御用として被差出旨  
右之通閏四月廿九日及達候

古庄	八	太
池永	一	平

右者今度被差出候徴兵引廻並兼相動候様被仰付旨

右之通去ル朔及達候

五月廿一日

尾藤金左衛門

明治元年



御家老衆中  
御中老衆中

五月朔日本藩保管中の關宿藩士杉山對軒等其藩情を縷述せし歎願書を交附せしを以て之を總督府へ進達す

〔一新録探索報告〕

閏四月歎願覺 五月朔日歩御小姓迄差出候付督府に差出可申評決せし事

今般弊藩家臣共兩般と相成候次第者近來勤王佐幕之議論相起先代大和守者病死仕隱岐守幼年之事故晚と方向ヲ相定候下知不行届始終銘々之見込ヲ以荷擔之姿ニ相成然處當三月已來御東征ニ相成候ニ付猶以議論紛々一定不仕當四月九日會津藩脱人と稱服部半藏田口敬作と申者城下に罷逐而會申込候間役人共之内出會候之處徳川報恩之義兵相起候間連入可致之掛合有之就而者慶喜公ニも御謹慎中暴動者報恩之筋ニも相當り申間敷斷然と不承知之旨接話仕候右ニ付如何成粗暴之儀申掛候も難計殊ニ城中甚々微勢ニ而心痛仕候間杉山對軒儀出府仕主人歸城之儀申促其段東海道鎮撫御惣督に奉願上候處急速歸城鎮撫可仕之蒙御沙汰就而者早々發途可仕様主人に申含候處更ニ存寄無御座夫ヨリ在府家臣共に申談候處當節之處歸城者勿論一同供不仕連申出何れも佐幕ニ無之而者不相成趣申募段々大義名分之次第柄及説諭候處何分ニも右之譯解得不仕其内近習之者拾三人脱藩仕徳川脱走之徒ニ連入仕候由不得止事對軒儀空敷江府出立關宿に罷歸申候然處同月十九日賊徒城下より三里先岩井驛と申處に千五百人程止宿明日者關宿に繼立之注進有之城下江戸町に者薩州御人數貳百人程止宿ニ而對軒罷出伊知地正治殿に御出會申候内右之注進故其段申述候處明早曉進軍被致候趣就而者川筋に番兵可差出旨之談ニ而其夜番兵人數可差出と申談候處中々不承知之者有之幕府之義兵ニ防戰者相成難き旨申出對軒儀種々大義説諭ニおよひ漸之事ニ而出兵爲仕翌廿日岩井驛迄薩州御人數進軍戰爭相成午刻前後砲聲夥敷烟火

も相見へ定而官軍不勝利無程城下に可攻入と驚候様子ニ而丹羽十郎右衛門木村正右衛門と申者先立ニ而關宿者無程落城隨岐守守衛として罷逐候旨觸相廻し出兵先之者迄連を出し百人餘脱走仕候私共ハ微勢ながらも防戰之上打負候ハ、一同割腹之覺悟仕候次第之處右様之所業言語ニ絶候小膽と歎息仕候夫より丹羽十郎右衛門木村正右衛門始メ之者ども出府之上佐幕論主張仕就而官軍定而可被打圍と相心得邸中之妻子迄も夫々被爲立退主人ヲ分家久世下野守に召連其外所々に押隠候趣御座候右様 天朝之大命ヲ不相守賊徒ニ荷擔仕候而者遂ニ蒙御疑惑當家滅亡仕候者眼前之儀故關宿に滯陣被致候安場一平殿へも段々右之精實具ニ申上全右之以御情愍今日迄關宿城無恙罷在就而者何れも主人隠岐守歸城仕候様心苦仕度是迄兩三名も出府探索も爲致候處上野其外へも主人ヲ押隠し置候折柄安場殿ヨリ御内達之趣も有之對軒始出府仕今般之次第と罷成一朝之行違ひよりは是迄之盡力風塵と相成乍恐勤王之爲災害ヲ相求候姿ニ相當り何共々々殘念至極懸歎仕候今般者不思議成譯ヲ以不割尊藩之奉蒙御厚庇誠以弊藩之大幸無涯一同不堪感激奉存候此上何共御苦惱之儀奉恐察候得共一同之心情御愛憐被成下御惣督府に御歎訴も相成候儀御座候得者幾重ニも御執成之程奉願上候尤御不審之御次第も御座候ハ、何々度成共御究問被成下度此段伏奉懇願候誠恐頓首不宣

後四月

- 杉山對軒 加藤求馬助 藤田彦之進 羽太庄兵衛 三浦平之助 奥原源次左衛門
- 小島久米之助 遠山時之助 岡鈕三郎 井上雅之助 土肥銳之進 堀 力次郎
- 池田正之助 石塚蘇太郎 近藤與六 水野孫平 中鶴久四郎 八木 平 治
- 野村昇輔 野上錦五郎 田邊政之助 社辰次郎 内田榮太郎 小柴貫一郎
- 黒川友二郎 井口金治 瀬尾求四郎 黒崎教藏 入澤恒三郎

〔一新録自筆狀〕

歎願書

明治元年



本月七日付佐倉表より御達章關宿に被成下直様杉山對軒儀上總大多喜表御總督御宿城に罷出安場一平殿より御内達之趣ハ主人隠岐守歸城不相成候ハ、大義名分難相立次第ニ付早々出府歸國之儀申促候様可致尤尋常之所置ニ而之行届申間敷候間肥後藩御人數御貸可被下候間急連取計可申旨御談ニ付難有奉畏關宿表に立戻一同に茂右之趣申達去十六日對軒儀繼ニ二三十名召連出府仕其後之事件委細ニ申越肥後御藩に罷出御出兵之儀相願向安場一平殿に御而會申上大多喜ニ而御達之通取計可申候間御人數拜借之儀尙又申上候處御承知ニ相成其段肥藩島田治兵衛に相頼候處未タ安場殿より御談茂無之參謀衆より御達無之而之私ニ出兵者難相成と之譯有之如何可仕と心配罷在候由其後吉村長兵衛殿へ拜願是迄弊藩家臣共兩般ニ相成候次第委曲申上分家久世下野守へ取扱御委任者乍恐御行届相成間敷段是又逐一申上就而者何モ茂幼主ヲ教惡仕候奸徒共其打取不申候而之主人歸城ニ者難相成是非共肥藩御人數拜借以 朝威奸徒掃攘仕候より他計有之間敷候間強而吉村殿に奉嘆訴候處尤之趣ニ御聞取被成下就而之御總督御登城ニ付西城に御同道可被下旨ニ而西城に罷出御評議相待居候處吉村殿より御達之趣小事より大事ニ及候場合も當今之形勢有之候間先暫見合置候様々の御沙汰有之敢而争闘を好候次第ニ而之無之幼若之主私共預居國家之廢亡を相憂奉致訴候次第ニ付其段御含も被成下候得者小事より大事ニ茂及候を強而奸徒共掃攘仕度儀毛頭無御座段申上候處家之儀ハ御總督御始メ其方共盡力之儀者御承知之儀故心配有之間敷段御達ニ付深難有奉存候旅宿に罷歸一統にも申達候處何モ奉教承其段關宿表に申越候間富田久太夫始連名之歎願書奉差上委曲是迄之次第柄分明ニ奉申上候間右ニ而御賢察奉願上候其後安場殿ニ茂大多喜表より御歸陣相成右之次第柄申上候内小役之者壹人并近習頭田岐七郎と申者召捕候間駕斗相糺候處隠岐守深川邸中に當時罷在候趣就而者以御威光奸徒掃攘主人取戻申度儀安場殿に奉申上候處御總督に御伺之上御承知被成下去廿三日朝卯半刻人數召連罷出候様被仰付則翌朝深川邸に御隨從仕候途中ニおいて對軒に御談之由者其方儀ハ隠岐守居間に平常之格合を外し直ニ罷出安場殿に主<sup>人落字カ</sup>爲懸御日候様周旋可仕尤先方ヨリ手向仕候節如何可仕と相伺候處是者勿論之事と被仰聞御同人ニ之表座敷に御待被成候處人數之儀ハ要處を相伺可申御達ニ付其心得ニ而申談對軒儀家人居間に罷遊可申

忠許共其君親守所罷在候者眼前之儀ニ付壹人罷越候者一同無覺東相心得五六番隨從口より這入候處如安以刃身相支無餘儀打捨申候右之動搖故人數追々入込及争闘其内主人ハ何モか爲潛何共殘懷至極ニ付庭内迄駕斗見届隠處探索仕度存念ニ罷在候處安場殿ニ之以御威光御談判之上主人御取戻被下候思召ニ翻歸仕候殊之外御憤激ニ相成何共奉恐入候一先引上げ謹御罷在候由併先方より手向仕候得者何分ニ茂難打捨場合ニ罷成右一事ニ而是迄勤王實効可相立城中一同決議憤發仕候茂風塵ニ罷成候儀誠以殘懷無此上自然勤王之宿願貫徹不仕家中兩般ニ相成相互ニ主家ヲ滅却仕候次第ニ相成候而之只々愁歎無涯儀ト涕泣仕候可相成儀ニ御座候ハ、此上以 朝威隠岐守歸城ニ相成候様偏御仁惠之程奉伏願候且又杉山對軒始暴祖之所業ニ相當り候様可被爲聞食候得共至誠忠懷ヨリ出候儀ニ而決而主人ニ手向等仕候儀ニ者限て無御座候全安場殿に爲掛御日度より之儀ニ而途中奸徒相支御疑惑を奉受肥後家に御預ニ相成何共奉恐入候得共右之儀之安場殿御承知と奉存候就而之對軒始一同被召出御吟味被成下候様仕度奉存候猶其上ニ茂江府詰重臣共迄對決被仰付候得之猶以難有仕合奉存候仰願ハ王政御一新之折柄正大明白之御裁判被仰付候得者於私共茂重疊難有奉伏候間此段不願恐奉哀訴候何卒萬機御哀憐之程伏奉懇願候誠恐惶頓首謹言

關宿藩臣

後四月

木 下 源 助  
杉本市郎左衛門

五月朔日義に本藩に保管を命せられし關宿藩士三十人を更に藝州藩に變換の命ありしを以て同藩に交附す

〔一新録自筆狀〕

辰五月二日江戸發自筆狀并事情書二通添

明治元年



別紙關宿嘆願書貳通差廻申候右藩之黨派之儀者隠岐守殿登京之旨者相違無之候へ共議論二端相分主君ヲ擁し江戸邸内  
に罷在一方ハ杉山對斬在所に二公子ヲ擁し別番之通ニ而先月廿三日之一舉ハ此許ニ者清水方始一向承知不仕事ニ而既  
ニ事終手負人ヲ營中に連來候而始而驚愕仕候事ニ御座候對斬列清水手に假之御預ニ相成追而本御預ニ付而者殊之外迷  
惑仕候暫白金に差置候處昨日藤州御屋敷に引移申候廿三日朝ニ者横山助之進安場一平藤本學之助罷越爭ヲ漸取沈候由  
右之一舉ニ付對斬列奉欺天朝主君に劍戟ヲ以迫候罪案ニ相成候ニ付別紙貳通差出候得共近來者其實情茂相違候様不承  
候已上(本文中別紙二通とあるは前條記載の一文なり)

五月二日

淺井新九郎

御奉行 中様

五月朔日薩長大垣等の官軍襲ひて奥州白河城を抜く

〔一新録探索報告〕

林玄助東行雜誌(抄略)

一五月朔日官軍前ニ策略も不設又嚮導も不用余り敵を侮りし故全敗績せりとて此度ハ方便をかへて櫻町上り町九番町之  
三口を三路より一時に攻懸るの策略なり彼ハ如以前官軍九番町之一口よりのミ攻寄すならんと心得會兵始め大兵を以  
て此處を堅め其他櫻町上り町等之口々ニハ仙藩始め弱兵ニ而堅め備格別不嚴處ニ前而之九番町口にはハ態と散兵を以て  
接し或ハ往還之並木を以て身を覆ひ徐々として進撃し敢而急迫せざりしもとより九番町備ありし臺場より彈丸を烈敷  
打出とも余り不中其争之隙ニ却而迅速に二口を襲て打不意しかは櫻町口初に敗れ遂ニ大敗軍となり狼狽無限四方に度  
を失ひ東西に逃迷ひ固より戰氣を落せし兵なれば更ニ抵抗も不出來後ニハ短兵を以て切り立しに其死する者數を不知  
戰場ハ一時是を下すの地なきはとにて山中如申といへとも死骸充滿し取集て數計六百余もありしといへり

一此大敗之爲ニ落力仙藩ハ悉く城下迄退き會ハ聖堂口に退し程之事ニ而其他之藩々は云ニ不及余程難を落せり然ニ仙  
之老臣片倉小十郎如何ニ弱兵なれハとて堂々たる大國一敗ニ弱わり其ため兵を退とは余りノ云ひ甲斐なしとて大ニ  
之を悲憤し自三大隊計之兵を引卒して再出兵せり固より會藩ハ中々一敗之爲ニ力を落す國にあらされハ初發より種々  
盡心したりしか遂に奥軍再び振起し榎倉ハ官軍と近接の國なればとて會仙等之連合兵來りて援守し要地々々ニ砲臺等  
築き嚴重ニ防禦し一ニハ白川より之進撃を防ぎ一ニハ追而白川城を襲之一路となせり  
一右之如く大敗之爲ニ一時ニ奥軍瓦解せんとする勢なりしか再び興起し種々軍儀等あり官軍亦白川城を抜ハ抜きしもの  
固より孤軍を以て深く敵地に入り續く味方之兵もなく漸守城之策を爲すのミにて其地敢而進撃等之暇あらずかくて  
双軍徒ニ光を消し同廿日迄ハ更ニ一小戦もなかりし其比より斥候隊のせり合ひ杯始まり其初る毎ニ官軍常に利を失て  
逃歸れり又此小戦にて四五日を送りしか其勝ニ勢を得しにや終に敵兵大舉し來りて廿六七日之大戦争となれり

〔幕末實戰史〕

翌五月朔日早曉官軍再舉白河を襲ふ會仙榎倉二本松の兵防戰終日烈戰同盟軍大敗官軍奮進城を取る此より同盟軍屢々  
此を攻むるも遂に復す能はず

此の時會兵死する者凡そ二百人同盟軍にても三百人位ありしと官軍の死傷も少からざる由

五月二日我藩寺町門の警衛を免せらる

〔京都并江戸返達御用狀、王政復古帳〕

(五月十五日内山村上より六月四日齋藤用狀の一節)

一去二日軍務官を御呼出ニ而寺町御門警衛被免候間徵兵に引渡可申事との御書付一通御渡有之候間差上申候云々

寺町御門警衛被 仰付置候處被免候旨 御沙汰候事

細川越中守

明治元年

六一三



但徴兵に引渡可申候事  
(付札) 本文引渡之儀者此方様より差出被置候徴兵と交代被 仰付筈ニ付日取之儀之勝手次第ニ而宜敷旨演達有之候事  
 五月二日 我藩老臣溝口孤雲願に依りて參與を免せられ且つ在職中勤勞の賞として大和錦印籠等を賜はる

〔王政日新録〕(熊本縣 廳所藏)

一辰間四月廿八日溝口孤雲殿參與徴兵御斷之願書被差出置候處五月二日左之通被仰出候付御書方借受此所に控置候事  
 兼而 勤王之志不薄就中御政務御一新之折柄官代出仕勉勤之段神妙之至被思食候今度依願參與職被免賜暇候猶何時被爲召候儀も可有之候間此旨可相心得候事 但爲勤勞之賞賜此品候事

五月 大和錦 一卷

印籠

三組 猪口盃

五月二日松平確堂三河守齊氏德川龜之助の後見人となる

〔江城日誌第一號〕

五月二日

松平確堂當分之内徳川龜之助後見之儀願之通被 仰出候事

〔海舟日誌建言始末二〕

五月二日確堂殿龜之助様御後見田安殿より御願大總督御聞届旨申來る

五月二日大總督府副督正親町公董軍兵催促の爲め京都に歸着す

〔一新録探索報告〕

久留米藩を寫取之書付

一五月二日之夜七ツ時正親町中將殿御歸京ニ相成候事

但大原殿ニも御歸之趣ニ候事

一閏月廿二日蒸氣蘭船御乗込ニ相成造船中隊入五月二日大坂表に御着船也

一江戸表ニ而大總督初御一同西丸に御入之由

一城中諸役人衆退散ニ相成候趣歩兵百人余罷出當時官軍ニ御預

一野州表脱藩人追討田安殿へ大總督を被仰付

右三條ハ中川修理太夫藩士正親町殿隨從ニ付相咄申候事

但極内密出入方々之者ニ咄候様子此節ハ正親町今度御歸之一條ハ何分軍兵不足ニ付御催足之爲御上京之趣

一正親町殿も近々御下關之由也

(中略)  
(下略) 五月十一日

近 藤 信 之 助

五月二日參謀安場一平甲府鎮撫の件に關し大總督府に陳情の爲め單身江戸へ返る

〔男爵安場 家文書〕 安場一平自叙傳

予鎮府の議一定せず甲州の守り覺束なきを以て單身東京に歸り其事情を陳す(以下五月六日に續く)

〔安田家 記録〕 明治元年關東征伐事件覺書

五月二日 安場監軍甲府處置筋言上ノ爲メ總督府へ急行ニテ出發スルニ付當府内取締方各藩隊長ト申談シ油斷ナキ様



可取計トノ示談アリテ分襟ス

五月三日舊幕旗下の士歸順せし者は朝臣に列せしむとの旨を達せらる

〔江城日誌第一號〕

五月三日

徳川龜之助重臣呼出御達之寫

旗下歸順之輩自今 朝臣ニ被 仰付候間此段相達候事

五月

五月三日我藩末家細川行眞歸邑を請願して許可を受く

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（五月十五日内山村上より六月四日着御用狀の一節）

辨事御役所に

末家細川豊前守儀依召上京四月十二日着坂仕其後還幸供奉相勤上京仕上坂以來及五十日申候此節格別御用之儀茂無御座候ハ、兼而御達之趣茂御座候間在所に之御暇下賜候様有御座度左候ハ、連ニ家政向改正之勿論兵隊等夫々指揮仕度此段御内意奉願候様越中守申付越候以上

五月三日

細川 越中守  
内 山 又 助

（指令）可爲願之通候事

五月三日本藩軍船主任を牛島五一郎に命す

〔明治元年  
機密間日記〕

覺

鎌 田 軍 之 助

御軍艦御用主立ニ成申談候様被仰付置候處被遊御免候以上

五月三日

口達

牛 島 五 一 郎

其方儀御軍艦御用受込被仰付之以上

五月三日

五月四日天皇日に學問所に御して政を聴き且つ文武を講し給ふへき旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

五月五日

一前橋公鍾田才吉方以廻狀昨四日御呼出ニ付罷出候處非藏人口ニ而大原左馬頭殿を以御渡之御書付六通可及廻達旨被仰渡候との廻狀（の内）

主上御幼年ニ被爲在是迄後宮 御住居之御事ニ候處先般 御誓約之御旨趣茂有之候旁之 思食を以て以來表 御住居被爲遊毎日御學問所に 出御萬機之政務被爲 聞食候間輔相より遂 奏聞候様被 仰付候尤時々八景之間に臨御茂被爲在 御政暇ニハ文武 御研究可被爲 遊之旨被 仰出候事  
五月

明治 元年



五月四日來七日より軍務官を陸軍局へ移さるへき旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（五月四日御渡同五日前橋藩鎌田才吉方廻狀六通の内）

一來ル七日より軍務官陸軍局へ被移候様被仰出候事

五月

五月四日濱田藩主松平武聰に謹慎解除の命ありし旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（五月四日御渡同五日前橋藩鎌田才吉方廻狀六通の内）

松平右近將監

謹慎被免候事

五月（五月五日前橋藩より廻達文六通の内松尾石清水兩宮）

〔五月五日日本藩廣田貞右衛門刑法官判事試補を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕

（五月廿一日在京尾藤金左衛門より家老中老宛來狀の一節）

五月

廣田貞右衛門

右者御雇を以刑法官判事試補被 仰付旨同五日於 御所被 仰渡候由相達候

五月五日佐倉藩主堀田相模守他行禁止を解かれし旨達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

五月五日

一前橋公鎌田才吉方添紙を以今五日非藏人口ニ而別紙壹通御渡ニ付及順達候段加州様御列御留守居當り之書付一通

堀田相模守

上京之上他出被止置候處今度被免候事

五月

五月五日信濃國松代藩主眞田幸民討賊の功を賞せらる

〔一新録探索報告〕

一信州地漸々平定全く松代侯勲勵之所爲ニ而此程朝廷御褒詞被仰出候（近世史料編纂綱例に「五日眞田幸民ノ討賊ノ功ヲ賞ス」とあり綱文の日附は今暫くこれに據る）

（下略）

五月十日

尼崎藩方借寫

五月十五日

吉

田（軍之助也）

五月六日東海道先鋒副總督柳原前光鎮撫使として甲府に至る

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

五月六日 甲府鎮撫使トシテ柳原前光鎮撫使ノ兵ヲ卒テ入府セラル勝沼驛迄隊伍ヲ組テ奉迎ス假參謀ニハ伏谷又左衛門

村田卯一郎隨從セリ一蓮寺ヲ以テ御本營ニ充テラル

幕吏小田切八郎舉動ニ付參謀ニ面談ヲ遂ケ差圖ニ依リテ附屬ノ者共大小取上ケ取調相濟迄沼津藩ニ御預ケ同人妻子

明治元年

六一九



八代官中山誠一郎ニ御預ケ相成タリ

五月六日参謀安場一平我藩論の動搖するを聞き之を憂ひ大總督府に乞ひ此日江戸を發して上京す

〔男爵安場家文書安場一平自叙傳〕

（五月二日の續き）

甲州の守り覺束なきを以て單身東京に歸り其事情を陳す督府之を容るも藩論の根據俗論勝を制するの勢あり細川藩命將に危頼の極に陥り從之藩屏の大任を竭すに由なきを以督府に乞ひ上京

〔三條實美公年譜〕

（五月廿一日松平慶永の岩倉具視に贈りたる書一節）

安場逸平ナル者肥後藩ニテ江戸へ朝六日立ニテ是又薩船ニ乗組今夕着京江戸之事情官軍ニ屬シ居極密心得居候者ト存候大略之處家來承り歸り申候

五月七日東國の形勢益々紛擾するにつき我藩に對し急に出兵すへしとの令達あり

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

五月七日軍務官官御留守居御呼出御渡之御書付寫

肥

後に

東國益紛擾之形勢ニ付先達而御達被成候通至急ニ人數練出シ速ニ鎮定奏功奉安 宸襟候様可致盡力旨 御沙汰候事

五月七日

五月七日軍資金は自今爲替を以て上納すへしとの旨達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（五月七日軍務官官御留守居御呼出御渡之御書付寫）

諸

藩に

今般被仰出候軍資金上納之節向後爲替座封ヲ以相納可申候事

五月

陸

軍

局

五月七日北陸道鎮撫使一行江戸より海路越後國今町港に達し高田に至りて本營を置く我藩津田山三郎参謀となりて之に從ふ

〔防長回天史第六編上〕

越後口戰爭（抄略）

五月七日北陸道鎮撫正副總督高倉永祐四條隆平二卿一行江戸ヨリ海路今町港ニ達シ再ヒ高田ニ入り本營ヲ置ク（中略）是レヨリ先キ高倉永祐ハ更メテ北陸道鎮撫總督ニ任シ四條隆平新潟裁判所總督兼鎮撫副總督ニ任ス（閏四月）十六日營中ニ於テ北陸再進ノ事ヲ決定シ而シテ發向ハ海路ヲ取ラントシ二十二日ニ至リ二十四日ヲ以テ品川解纜ノ旨ヲ大總督府ニ申渡ス會々三條大監察使東下ノ事アリ而シテ發程一日ヲ延ヘ二十五日發程シ二十九日品川ヨリ開航シ五月四日箱館ニ達シ七日今町港ニ達シ其日高田ニ着陣セシナリ 北陸行進兵中肥前兵ハ奥羽出張ヲ命セラレ越後州兵若州兵ノミ奥ニ方リ長岡藩漫ニ中立ヲ持スト稱シ敢テ官軍ヲ迎ヘス陰ニ會藩ト通ス會々會藩ヨリ奥材同盟ノ成立ヲ越後諸藩ニ報スルノ書官軍ノ手ニ落ツ官軍大ニ警戒ヲ加フ勅ヘ甲府駿府ニ佐幕黨蜂起シ官軍頗ル苦シムトノ風説越後地方ニ傳ハリ人心益々動ク

五月八日朝廷用度不足して軍費給せざるの虞あり仍て資力あるものは金穀を捧けて四海平定の



功を扶植すへしとの旨を達せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

五月八日御月番前橋様衆に御渡之御書付御同方より差廻來候寫

皇運新ニ復シ國是漸々定リ萬機 御親裁ニ出テ百事まさに備らんとす是時ニ當テ獨備らざるものハ金穀ナリ右者全徳川慶喜政權奉還之節國家之用度併せて返上勿論たるへきの處其儀いまた相運ハさる内春來の始末ニ立至リ 朝廷無所入して出す所の費用不一方ニ依れり況や頃日征討之兵士家を棄て身を殺し一途報國之折柄萬一軍費給せず兵食足らざる時者奮進勲絶銳氣挫キ 皇威是か爲ニ弛ミ平治之功業速ニ立さる時者億兆之黎庶久しく塗炭の苦ヲ受けんと恐多くも日夜 御宸憂被爲遊就而者内外百官之輩者申迄も無之普天率土之臣民 聖旨を奉承し朝恩を感戴し畢生之報効此時ニありと覺悟し兵力あるものハ其力を以てし貨財あるものハ其財を以てし上下一般之力を合シ四海國定の功を御扶植可致事ニ付銘々一人之私を捨て天下之大事を考へ有餘不足を補ふの天理ニ基キ各其分ニ應シ金穀御用相勤御奉公筋を遂けてこそ即兵士之身を殺して 朝廷ニ盡すと同しく下たるものニ定分ニ候間此旨篤斗可相心得もの也

五月

太 政 官

五月八日濱田藩主松平武聰に作州の内三萬七千餘石の地を管せしめらる

〔一新録探索報告〕

〔五月十五日吉田軍之助尼崎藩より借寫報告せるもの内〕

一昨八日濱田侯に作州ニ而三萬七千四百拾石御預リ被 仰付候趣濱田城者未々御處置付き不申長人之當時管轄ニ有之候得共未々白 朝廷被仰付等者無之儀ニ付何を改被 仰出事ニ可有之候

右作州之地所者是迄龍野御預り所之由有之候

五月十日

五月八日先きに參與を免せられたる我藩老臣溝口孤雲京都を發して歸國の途に就く

〔從慶應二年至明治三年 江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候孤雲方去ル八日爰許被致出立候此段爲可申達如是御座候以上

五月廿一日

尾 藤 金 左 衛 門

御 家 老 衆 中  
御 中 老 衆 中

五月八日我藩兵寺町御門警衛を免せられたるを以て本日徴兵と交替す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一辨事御役所

越中守儀寺町御門警衛被仰付置候處被免候間徴兵に引渡可申旨御達御座候付一昨八日御警衛御場所等夫々引渡相濟申候此段御届仕候以上

五月十日

細川 越 中 守 内  
内 山 又 助

五月九日朝議あり天皇親征の叡慮を漏し給ふ松平慶永長岡護美共に今日未だ親征の時機にあらざるを陳し議暫く止む

明治 元年

六二三



〔防長回天史第六編上〕

明治元年夏期ノ大勢及ヒ毛利氏(抄略)

六日東北不穩ノ報復タ京師ニ達ス朝議乃チ奥羽ト江戸ト併ニ官兵増發ノ議ヲ決シ阿州唐津柳河ニ命シ兵約五百ヲ陸路東海道ヨリ進メシメ又長州薩州肥後ニ命シ兵約一千ヲ海路大阪ヨリ進メシム時霖雨ニ際シ諸軍末タ行ヲ果サス八日夜關東ヨリ復タ報アリ賊軍ノ猖獗ヲ傳フ是ヨリ先キ長薩二藩ノ土岩倉卿ト與ニ天皇親征ノ議ヲ上ラントシ末タ之ヲ公ニセス九日朝議アリ天皇小御所ニ出御シ群議ヲ聞キ遂ニ親征ノ愷慮ヲ漏ラス越肥二藩論シテ曰ク屢々親征ヲ唱フルハ反テ天威ヲ輕クスルニ似タリ今日ノ事未タ親征ヲ要スルノ甚シキニ至ラサルニ似タリ如カス先ツ聖德ヲ修メテ以テ之ニ應センニハト親征ノ議暫ク止ム

五月九日金札發行の期日及び丁銀豆板銀通用停止の件を布達せらる

〔王政復古帳〕

五月九日辨事局より前橋様衆御呼出ニ而御渡之御書付御同方被差廻候爲三通の内

先達而被仰出候金札來ル十五日より御發行相成候間無滞取交通用可致候尤見本札五品兩替共ニ掲置候様被仰付候間此旨向々不漏様可相觸モの也

五月

右一通

一今般貨幣定價御取調之上丁銀豆板銀之儀以後ニ通用停止被仰出候間是迄銀名を以貸借有之候向者其取引致候節之年月日之相場ニよマテ金錢仕切ニ相改可申候

一舊來之丁銀豆板銀共所持之者と近日御改製之新金錢を以御買上相成候間追々其筋より會計官貨幣司に可申出モの也

辰五月

右一通

五月九日府藩縣に印鑑を製せしめ且つ社家寺院の支配を定めらる

〔王政復古帳〕

(九月九日辨事局より前橋様衆へ御渡之御書付三通の内)

一府藩縣各印鑑ヲ製スヘキ事

但某府印某藩印某縣印ト刻スヘシ

一各府各藩各縣ノ所部ニ屬スル社家寺院等以來其向ニ而可爲支配事

但府藩縣ニ而難決事件ハ其支配所カ印鑑ヲ遣シ辨事傳達所ヘ可爲差出事

伊勢兩宮並大社勅祭神社之外ハ以後神祇官ニ而直ニ社家之支配不致事

右之通被仰出事

五月

五月九日若州小濱藩主酒井忠義父子の謹慎を免除せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(五月十五日村上よりの内)

五月十日

一酒井右京大夫様カ……若狹守様兼而右京大夫様ニ御預御謹慎ニ御座候處今般寬典之 思召を以右御預右京大夫様御謹慎共一切被成 御免候段昨九日被仰出難有思召候右爲御知各様迄從私共可得御意旨右京大夫様被仰付候

御預並謹慎被免候事

酒井若狹守

五月

明治元年



謹愼被免候事

五月

五月十日豊臣秀吉在世の功を追賞し神社を建て、祭祀せしめらる

〔王政復古帳〕

(五月十日辨事局より前橋様御呼出ニ而御渡之御書付御同方被差廻候寫五通の内)

先般浪花より大駕御凱旋之節豊太閤之社御建立被仰出候仰太閤ハ撥亂反正翼戴糾合其功蹟古今ニ亘リ加之 皇威及海外ニ赫耀シ寶運茂振起シ萬世人臣之慕範ト相成候段深く御稱譽被遊先年致敗毀候豊國山之廟祠更ニ御再興被仰出候依而者當時其恩顧を受候後裔者勿論其英風を仰欽慕之輩御手傳願出候ものは御差許ニ相成候間天下之衆庶能此旨を得候様御沙汰候事

五月

五月十日癸丑以來國事に斃れし者及び伏見開戦以來王事に忠死せし者等の靈魂を祭祀すへしとの旨達せらる

〔王政復古帳〕

(五月十日辨事局より前橋様御呼出ニ而御渡之御書付五通の内)

大政御一新之折柄賞罰を正し節義を表シ天下之人心を興起被遊度已に豊臣太閤中將之精忠英邁御追賞被 仰出候就而者癸丑已來唱義盡忠天下ニ魁シテ國事ニ斃レ候諸士及草莽有志之輩冤枉罹禍者不少此等之所爲親子之恩愛を捨而世襲之縁ニ離レ墳墓之地を去り掃風沐雨四方ニ游行シ専ラ舊幕府之失職を憤怒シ死を以而哀訴或は新神家を鼓舞シ或は

諸侯門ニ説得シ出沒顯晦不厭萬苦竟ニ抛身命候者全く名義を明シ 皇運を挽回せんとの至情より盡力する處其志實ニ可嘉稱況哉國家ニ有大勳勞者争か煙滅ニ忍ふへけん哉と深く被 歎思食候依之其志操を天下ニ表シ且忠魂を被慰たく今般東山之佳城ニ祠宇を設ケ右等の靈魂を永く合祀可致旨被 仰出候猶天下衆庶益節義を貴ひ可致奮勵様 御沙汰候事

五月

右一通

當春伏見戦争已來引續キ東征各地之討伐ニ於而忠奮戦死候者日夜山川を跋渉シ風雨ニ曝露シ千辛萬苦邦家之ため終ニ殞命候段深不便ニ被 思食候最其忠敢義烈實ニ十道之標準たるを以て 敬感之餘り此度東山ニ於て新ニ一社を御建立永く其靈魂を祭祀候様被 仰出候尙尙後王事ニ身を殫シ候輩連ニ合祀可被爲在候間天下一同此旨を奉戴シ益可抽忠節且戦死之者等其藩主ニ於而も厚く御趣意を可奉體認旨被 仰出候事

五月

右一通

五月十日日向延岡藩主内藤備後守志摩鳥羽藩主稻垣平右衛門謹愼を免せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

左之御方様昨十日御謹愼被 免候付不取敢爲御知且御世話被成進候御挨拶旁御内使者御重臣を以被仰進候

内藤備後守様

以上

五月十一日

御留守居中

村上彈助殿

〔全書〕

明治元年



五月十二日

一前橋公録田才吉が以廻狀今十二日非藏人口ニ而大原殿御渡之御書付二通廻狀一通

内藤備後守

謹慎被免候事

五月

稻垣平右衛門

謹慎被免候事

五月

(稲垣平右衛門謹慎被免のこと十日たる確證なけれども十二日非藏人口にて大原殿より前橋藩留守居役に一同に渡されたる内藤備後守は十日に有免せられたる旨該藩より通報の文あれば稲垣平右衛門の有免も同日のことならんと暫く假定して本日に掲載す)

五月十日中將西園寺公望越後國第二都督と爲り京都を發して任に赴く

〔一新録探索報告〕

一越後國者賊倍暴行之誦官軍高田表に追々練詰ニ相成薩長加之兵威強大ニ而高田藩も舉而打出奮激進軍先月下旬於柏崎邊戰爭有之候趣尤去ル八日官へ薩長藩等が御届有之候由確と承り猶右御届書面取寫候上可差上候右之節高田藩も悉烈戰有之右者實功追々達

一右越後國形勢不容易趣ニ而西園寺中將殿へ爲越後國二之目都督發向之奉命昨日有之今日當地發有之候尤敦賀が蒸氣船ニ而渡海之由ニ御座候猶 勅命之御次第等之取調追而可申上候(下略)

五月十日

尼崎藩が借寫

五月十五日

(参考) 六日西園寺公望ヲ以テ三等陸軍將ト爲シ越後ニ赴カシム(近世史料編纂綱例)

吉田(俸之助)

五月十日我藩甲府出張兵甲府鎮撫府巡邏警衛を命せらる

(安田家 肥後藩) 明治元年關東征伐事件覺書

五月十日 鎮撫府參謀局召喚ニ付出頭セシ處左ノ通達章ヲ渡サル

不容易時勢ニ付異變之程難計其藩御本營近邊屯在巡邏警衛嚴重可有之旨副總督府 御沙汰候事

東海道鎮撫

五月十日

副總督參謀印

肥後藩

五月十一日我藩鎌田軍之助に豊後鶴崎取締兼番代を命す

(明治元年 機密問日記)

口達

鎌田軍之助

其方儀鶴崎表取締として當分同所に被差越滞留中御番代之場茂相勤候様被仰付之以上

五月十一日

覺 御奉行に

木村弦雄

右者就御用鎌田軍之助一同鶴崎表に被差越候條此段可被達候以上

明治元年

六二九



五月十二日

五月十二日長岡護美に對し速に東下し總督府に力を副へ徳川旗下の士を鎮撫すへしとの命あり  
〔一新録自筆狀〕

長岡左京亮

徳川慶喜謝罪之道も相立既御處置可被 仰出之處旗下之士未タ鎮定ニ不到此儘被差置候而者 朝威不被爲立筋ニ付其方儀當官を以早々東下總督府に示合せ鎮撫之儀勉勵可致旨 御沙汰候事

五月(十二日は三條公年譜、防長回天史等に據る)

五月十二日阿波徳島藩主蜂須賀茂詔及び筑後柳河藩主立花鑑寛に命し東下して大總督府を輔翼せしめらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(五月廿六日京都立早打飛脚六月四日熊本藩持参書類の内)

五月 一阿州様衆方以奉札、阿波守儀當月十二日依召参 内被致候處爲鎮撫東下可致旨蒙仰總督府に示合せ勉勵可致蒙

御沙汰尙又依召同十四日参 内被致候所此度東下蒙 仰候付被奉拜 天顔 天至頂戴且御劍御反物御中啓も頂戴被致

暫時歸國願之通往來之外日數七日計在國被成御許蒙仰重疊難有仕合奉存候隨而近々爰許出立候間右御知せ、

〔防長回天史第六編上〕

(明治元年夏期ノ大勢及ヒ毛利氏抄略)

十二日(五)朝廷阿州侯柳川侯長岡公子ニ命シテ東下セシム皆異言アリ容易ニ命ヲ奉セス

五月十二日長岡護美は書を輔相岩倉具視に贈り關東鎮撫の要は速に徳川氏を處置するに在り然らずして専ら兵力を用ふる時は玉石共燒の恐ある所以を陳ふ

〔一新録自筆狀〕

徳川慶喜既ニ恭順服罪之姿を表シ候得共殘賊屢官軍に抗し關東鎮靜ニ至兼候報告有之候付而者更ニ大藩諸侯伯ニ出師之命を被降一旦兵力を加御處置筋御施行ニ可相成哉之御評議被爲在候末愚衷之趣申上試候過日徳川家寛典ニ可被處聖慮之趣被 仰出候得共御處置筋未タ御布告之時ニ至り不申累月遷延途ニ關東之人心固結之場ニ至兵力而已を以御壓倒被爲在候様之御仕向ニ而者玉石共ニ燒る之覺悟ニ相成候者必然之勢ニ有之左候而者御寛仁之御趣意ニ茂合兼候事ニ付速ニ御處置筋被仰出人心之方向を被定候儀今日之御急務ニ可有御座既ニ關東御處置筋之儀者三條公ニ御委任被爲在候事ニ付三條公より速ニ御處置筋被 仰渡候儀今日之御急務と奉存候萬々一右 朝命を拒ミ暴行を募候儀於有之者天人之所共憤其罪鑿然タル事ニ付列藩不令して相應し協心戮力及勸減候儀當然之理と奉存候伏願クハ條理を先ンし兵力を後ニし一刻茂早く前文御處置筋斷然御施行被爲在度御儀と奉懇祈候以上

五月十二日

長岡左京亮

岩倉輔相閣下

五月十三日長岡護美は更に書を岩倉具視に贈り前書の旨趣を敷衍再設す

〔一新録自筆狀〕

徳川慶喜御處置一刻茂早く被 仰出度段昨口言上仕候通御座候處麾下恭順之道を失ひ此儘被閣候而者 皇威難相立候付是非兵力を以て御押詰御處置可被 仰付旨御廟議之趣奉拜承反復愚考仕候處右者畢竟御處置遷延ニ相成折角難有聖慮之趣茂貫徹不仕慮より人心洶々方向を不知或者官軍ニ抗し不都言之儀も有之哉ニ相見重疊難相濟所行ニ者御座候

明治元年



得共慶喜恭順謝罪之實迹を被立下速ニ寛典之 御沙汰被爲在候ハ、麾下之者とも朝 命を奉戴し且者主家ニ對候而も無狀ニ暴行を可働筋無之於關東自ラ鎮撫之道も相立可申儀と奉存候一旦 朝廷之御條理被爲立候上彼若暴戻を募候ハ、天地不可容之罪を鳴し天下之兵を舉而誅伐を被加候儀ハ申迄も無御座殊ニ不肖之私軍務之職掌ニも被任置候事ニ候得者猶更盡力之覺悟ニ罷在中候然ルニ御處置筋未タ被 仰出茂無之人心不服之交ヒ更ニ兵力を以御制服被爲在候様ニ而者徒ニ賊勢を激成し益關東之人心を固結せしめ候様相成可申伏願クハ於 朝廷專王政之御基礎を被堅萬事公共之思食を以天下萬民御德化ニ服候様之御處置速ニ被 仰出度再應不願憚爾莽之獻言仕候以上

五月十三日

長 岡 左 京 亮

岩 倉 輔 相 閣 下

五月十三日中津藩の江戸邸内勤王佐幕ニ派分争す重臣桑名登等大義を唱へて動かす佐幕黨百餘名遂に走りて上野山内に投ず

〔淺井鼎泉記錄〕

一上野戦争の十日計前の事なりし中津藩の中老桑名登來りて藩の内情を述へ藩中勤王佐幕の二派に分れ如何ともすへき様なし御國とハ御間柄の事なれば我等の藩邸に御國の御人數出張の上御鎮撫被下度と申候に付人數の進退は私にハ行ひかたしされと貴藩の御邸ハ我國の警衛區域中なれば其旨諸隊長に中含置き若し萬一にも動搖あらは何時にても鎮撫する様取計ふへし併し假令へ兩派に分れ候とも安りに他より干渉するハ宜からずと申處桑名も一々承知致したりとて罷歸り申候十三日頃の事なりし佐幕派の人々百餘名ハ遂に脱走して上野の暴徒に投し勤王派の人々は桑名を始め御用人御留守居等皆藩邸内に在りて大奥方様顯光院様の御守護に任したる由上野の戦争相濟みて後彼等宇土邸 當時の御來りて謝辭を述へ過日は御懇話を得且ツ暗に御勢被下候ニ付大に決心する所有之遂に兩派の分離と相成り今日には邸内至極の靜謐に歸し大奥方様にも太く御安堵被遊候就ては今後の善後策に付貴下の御意見拜聽致度旨申候ニ付

大奥方様には早々總督府に御届の上中津へ御下向可有之御下向の上ハ君公にも江戸の事情御承知被爲在御利益計からさるへしと申候處桑名も其と決心致し辭して罷歸り申候其後彼藩の御用人等屢々來り議する所有之候處無程大奥方様には蒸氣船御借受中津へ御下向有之候桑名ハ于今書信物等を送りて消息を斷ず御舊記に中津御使者來るとあるハ蓋し此事ならんかし

五月十四日長岡護美參内寸輔相岩倉具視等に對し建議の主意を上陳し採用せられず遂に小御所に於て宸翰及び御物を賜はる

〔一新録自筆狀〕

五月十四日於 小御所被 仰渡候 御宸筆之寫

關東之儀今日之形勢ニ而ハ彼是懸念不少候付爲萬民親征之他無之と存候處一同評議之趣も有之候間猶豫致し候苦勞ニ者候得共其方共先鋒同様之心得を以發向可致候此末動靜ニより必親征可致候條其分可存知候事

〔全書〕

慶應四年五月京師々自筆之稜書付番ハ此元(熊本藩廳)ニ而出來佐貳役執筆也(抄略)

一於 御所左京亮様別紙御建白書之通精々御義論被遊候處岩倉卿を始メ御同意無之其譯者關東御所置之筋者三條卿に御任せ被置候付御出馬之上御義論可有之との旨其末於小御所御拜領物等有之不被爲得止事御受有之御出馬之上御義論ニ相決候事(本文別紙御建白書とあるは護美の五月十二日全十三日岩倉輔相に呈したる稜書なり)

付紙 委細御兩殿様(顯邦 顯久)達御聽候處勿論思召之筋茂不被爲在候

〔全書〕

慶應四年五月御奉行副役木村得太郎京師々罷歸候節之書取(抄略)

明治元年



一 左京亮様關東御出張被蒙仰候御内評之事

但左京亮様思召之迎及會を抜候儀御見込不被爲在御出張之上屹と大御議論を被發候御内慮之由

附參與共之居殘候内存之由

一 主上御親征之 思召之由

一 右ニ付而之兵力無之候而之不相成孤雲殿はしめ之儀論之夷則殿御備を引出張ニ可相成歟との見込

五月十四日長岡護美に對し重ねて速に關東へ出張すへしとの旨を諭達せらる

〔一新録自筆狀〕

輔相様御逢ニ而被仰聞答之處御用多ニ而徳大寺様被仰聞候

此度左京亮様關東御出張被仰付候付而者段々御見込之趣御建言ニ相成候處尤之儀ニ者候得共秩祿高等之儀者惣而三條卿に御委任之事ニ付於 朝廷茂難御取扱依而右等之儀ハ御出張向ニ而委細被仰上候様關東も日増固結いたし候間速ニ御出張ニ相成候様日數二十日計り御猶豫御申上ニ相成候得共右之次第ニ而此方ニ而一日遅候而者於彼方三日も後レニ相成候場合付速ニ御出張ニ相成奉安 宸襟候様尤兵力を以壓倒せらる候ニ而者無之大藩御出ニ而御都合茂宜敷御運ニ相成候譯ニ付共方共盡力いたし速ニ御出張之儀差急可申様阿州侯ニも七日ニ而御歸國直ニ御越ニ付御同様位ニ相成度との趣被仰聞候事

五月十四日

左京亮様御重々内辨事御役所方御呼出ニ付本間殿出方有之候處右之通被仰聞候由

五月十四日人吉藩兵駿府城警衛を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔五月廿一日村上より六月四日藩の内〕

五月十八日

一 相良遠江守様方、、然者昨十四日家來之者御呼出ニ而駿府城御警衛被仰付難有被奉存候然候而日御門御守衛ハ被成御免候右爲御知被申上度此段各様迄宜得貴意旨遠江守兼而申付置、、

五月某日高松藩兵猿ヶ辻警衛を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔五月廿一日村上より六月四日藩の内〕

五月

一 松平讃岐守様方、、然者此度讃岐守様義猿ヶ辻御警衛被仰付難有仕合思召候右吹聴各様迄宜得御意旨被仰付、、

五月十四日豊後府内藩主大給左衛門尉三河奥殿藩主大給縫殿頭陸奥棚倉藩主松井周防守等謹慎解除ありし旨示達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔五月十四日彦根藩留守居より我藩外六藩へ廻達書付三通の一〕

大給 左衛門尉

五月

謹慎被免候事

松井周防守

五月

大給 縫殿頭

五月

謹慎被免候事

謹慎被免候事

五月十四日肥前唐津藩主小笠原佐渡守謹慎を解除せらる

明治元年



〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔五月廿一日村上より 六月四日曆〕

小笠原佐渡守様御京着後御謹慎ニ相成居候處去ル十四日辨事より御呼出ニ付御出頭之處別紙二通之通被蒙 仰候由ニ而尾藤金左衛門迄彼方御家来より書狀を以御知せ被仰進候右御書付一通差上申候以上

小笠原佐渡守

其方既往御赦有被 仰出候得共壹岐身上之儀者向後尙加探索召捕へ候上者速可申出候事

小笠原佐渡守

五月

同姓壹岐儀於舊幕府老中勤役中段々 御聞込之筋有之兼而 御沙汰之次第も有之候處其方儀之歸順之道相立速ニ上京 謹慎既數十日ニ及ひ殊更壹岐致脱走候就而者謝罪實効可相立ため關東表に出兵被 仰付其他軍艦入用石炭御用等速ニ 御請茂仕於其方者全ク勤 王之素志無ニ念事ニ之可有之候得共壹岐勤役中不束之次第前以取計振茂可有之處無其儀之 落度難免依之相當之御譴責可被 仰付筋ニ候得共前件被 聞食分出格御寛典を以被 免候條彌以國論一定し精々可勵 忠勤旨 御沙汰候事

五月

五月十四日舊幕旗下其他の徒輩朝旨を奉せず上野山内に屯集せるを以て誅伐せらるへき旨を徳川龜之助に大總督宮より示達せらる

〔一新録自筆狀〕

〔五月廿七日附在京尾藤金左衛門より家老中老冠報告の内〕

辨事御役所方之御書付左之通

徳川 龜之助に

過日以來旗下末々心得違之者 朝廷寛仁之御趣意を不奉拜戴主人慶喜之意ニ背キ謹慎中之身を以脱走ニ及ひ上野山内 其外所々屯集官兵を闇殺シ民財掠奪益兇暴を逞し以而官軍ニ抗衛ス實ニ不可赦之國賊也故ニ不被得止明十五日誅伐被 仰出候此段爲心得可相達旨大總督宮 御沙汰候事

五月

五月十四日大總督府は上野山内に屯集せる舊幕旗下の輩を誅伐すへく各藩兵隊に命令を發す

〔江城日誌第四號〕

各藩之兵隊に御沙汰之寫

旗下末々脱走之輩上野山内其外所々屯集屢官軍之兵士を暗殺し無辜之民財を掠奪し益暴虐を逞し官軍ニ抗衛す實ニ大 罪不可赦之國賊也最早 朝廷寛仁之道も絶果斷然誅伐被 仰出候付而者勇闘激奮て國賊を擊殺し億兆蒼生之榮炭 を救ひ速ニ平定之功を奏し可奉安ニ 宸襟旨 御沙汰候事

五月

五月十四日舊幕旗下の暴徒を誅伐せしめらるゝに依りて動搖するなく各々安堵して業を營むへくまた亂賊を扶助するものは同罪たるへき旨を布達せらる

〔一新録皇令〕

今般徳川慶喜恭順之實効を表するニ依り祖宗之功勞を被 思食家名相續被 仰出城池祿高等之儀も追々 御沙汰等ニ 相成末々之ものニ至迄各其所を得ざるもの無之様被爲遊度との 思召ニ被爲在候處豈圖んや旗下末々心得違之輩至仁 之 御趣意を拜戴し奉らざるのミならず主人慶喜之素志ニ戻り謹慎中之身を以テ恣ニ脱走ニおよび所々屯集官軍に相 抗し無辜之民財を掠奪し兇暴到らざる所なく萬民瘡炭之苦ミに陥らんとす故ニ今般不得止是を誅討せしむ素より其害

明治 元年

六三七



を除キ天下ヲ泰山之安キニ置億兆之民をして早く安堵之思ひをなさしめんと欲すれば猥ニ離散する事あるをからす篤と御趣意を體認し奉り末々之者ニ至迄聊心得違無之屹度安堵いたし各共生業を營ミ其分ニ安すへきもの也  
過日以來脱走之輩上野山其外所々屯集屢官兵を暗殺シ或ハ官軍と僞民財ヲ掠奪し益兇暴を逞する之條實ニ國家之亂賊たり以來右様のものハ見付次第速ニ討取若萬一密々扶助いたし或ハ隠し置もの於有之は賊徒同罪たるへきもの也  
右二通江戸市中に御布令相成候旨此度大總督官より奏聞有之候付廣く揭示被 仰付候條末々ニ至迄心得違無之様可致旨被 仰出候事

五月

五月十四日舊幕臣河村惠十郎上野の暴徒に降伏を勸告したれとも遂に容られず

〔淺井鼎泉記録〕

二十四日の夜舊幕臣河村惠十郎來り上野山内の模様を述へ太く歎息致し明十五日にハ上野征討の命下りし由なるか眞なるやと尋候ニ付愈々征討の命下りし由答へ候處何とそして無事に治まる方法ハ有之間敷哉と申候ニ付此場に至りては何とも仕方有之間敷旨答へ自分も出張の積にて其用意致置きたりとて用意の小銃玉藥或服陣笠を指して之に示したれハ河村太く打驚き申候様ハ明朝田安家より石坂貞之助を惣督府に使ハし諸事心底に任せす恐入候段斷に及ハれ候旨ニ付明十五日の御征討ハ御猶豫相願候譯にハ參らざるへきやと申候ニ付其儀は到底行ハれ申間敷と答候處然らハ如何にせば宜かるへきやと申候に付舊幕人にて名望あるものを撰ひ貴下其人と共に今夜中に上野山内に入込ミ山内の暴徒に説諭を加へ降伏せしめらるべし而して其實證として兵器は悉皆官軍の先鋒に引渡し惣督府に献願せられハ或ハ無事に治まる事も可有之乎と申候處舊幕人にて其人を撰ハ、何人を撰ひ可然哉と尋候ニ付山岡則ち其人ならんと申候處彼れも大に同意致し直に辭して罷歸り申候河村の歸去りし後鼎泉は此五六日前より晝夜共眠に就くことを得さりしニ付暫く安眠せんとて一睡し居たる處に従者來りて夜の七ツ打ちたる由申候ニ付直に結束して櫻田門に至る御國の本營ハ

昨日より櫻田門に移り居たれハなり同所より清水方と共に上野に向ひ候處夜明頃より砲聲盛に起り愈々開戦と相成候河村等の説諭は遂に行ハれず團子坂より僅に山内を退出したるよしに有之候石坂貞之助は十五日の日の出頃馬上直衣を着従者四五人引供して櫻田門に來りて總督府に案内頼むよし申出候ニ付總督府に伺申候處直に追拂ふべき旨命せらる候ニ付使者の旨趣も總督府に達する由なかりしとぞ

五月十五日太政官以下諸官府藩縣及ひ諸司の印制を定めらる

〔王政復古帳〕

五月十五日大原左馬頭殿々前橋様案に御渡之御書付寫

太政官印曲尺二寸五分諸官府藩縣印。二寸二分諸司印同二寸

右之通御決定被 仰出候事

五月

五月十五日新製の紙幣を發行せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

(五月四日前橋藩留守屋へ大原左馬頭より渡されたる書付六通の内)

一先達而被 仰出候金札來ル十五日より御發行相成候間無滞取交通用可致候尤見本札五品兩替共に掲置候様被 仰付候

此旨向々不漏様可相觸もの也

五月

五月十五日小笠原佐渡守外三名謹慎解除ありし旨を示達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕



(五月十五日前橋藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達)

小笠原 佐渡守(肥前唐津)

立花 出雲守(陸奥下手渡)

謹愼被免候事

謹愼被免候事

五月

五月

京 極 主 膳 正(丹後峰山)

稻葉 備後守(安房館山)

謹愼被免候事

謹愼被免候事

五月

五月

五月十五日延岡藩主内藤備後守は謹愼宥免の命を蒙りたるを以て使者を遣し我藩幹旋の謝辭を述へ物品を贈る

〔一橋初來使一件〕

愈御堅達可被成御座珍重奉存候將又私儀去ル十日御用召之處病氣ニ付爲名代重役之者太政官辦事御役所に罷出候處別紙之通蒙御沙汰難有仕合奉存候右ニ付而者不輕御厚情被成下且御家來衆より茂毎度預御世話兼而被御示置候故之儀と誠以難有奉存候右御禮以使申上候付目錄之通進上之仕候

内藤備後守使者

五月十五日

原 田 四 手 藏

經節 三拾本

白銀 貳拾枚

御家老中

證節 拾五本宛

内 藤 備 後 守

其方家來大阪詰居中當正月三日後不容易時態ニ立至り候砌奉對 朝廷如何之儀茂有之哉ニ相聞一旦被止入京候處段々歎願之旨趣ニ而は其方在國中ニ而阪地詰重役之者翌四日朝徳川慶喜より野田口警衛被申付倉卒人數差出前日伏見邊戰争之顛末不相辨より不都合之次第ニ立至奉恐入候得共毫奉對官軍及發砲候儀は全無之事ニ而於其方者素より勤王之心底ニ有之候段被聞召屆候最前重役之者舊幕閣老監察等に向ケ諫争致候哉ニ候得共其赤心不行届而已不成終前件輕卒及出兵候次第を以其方儀一旦蒙御不審候者當然之事ニ有之畢竟出先家來共不束者全其方兼々示方不行届ニ相當候付此件御沙汰之品茂可有之處恐前謹愼罷在既ニ百日餘ニ及び候事ニ付寛大之御仁惠を以被免候條彌以臣民を教導し國論一定し精々可勵忠勤旨御沙汰候事

但家來穗鷹内藏進原小太郎儀茂本文御寛典ニ準し謹愼差免候而不苦候事

五月十三日家來之者御呼出ニ付太政官に罷出候處御書付を以甲府御城番應援被仰付早々人數差出候様蒙御沙汰候將亦同十四日參内奉伺 天機大宮御所御機嫌を茂無滞相伺重疊難有奉存候(備考、此使者六月十六日熊本に罷) (我藩道家角左衛門之に應接す)

五月十五日官軍上野山内屯集の賊徒を撃掃す

〔江城日記第五號〕

五月十五日

上野山内屯集之賊徒追討として未明より各藩之兵隊大馬ニ相揃各隊列を懸へ繰出し夫々左之攻口より攻入愉快之奮戦を遂賊徒忽ち敗走し上野山内悉く灰燼となり夕七時半時散陣す此日討取處の賊徒山内所々ニ累々として其數を不知死傷生捕共凡千人余各藩攻口左之通

明治元年

六四一



湯島より黒門前

本郷より

富山邸

水戸邸

薩州	肥後	因州	長州	肥前	筑後	大村	佐原	肥前	備前	伊州	佐土原	尾州
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----

阿州	尾州	新田	備前	紀州	因州	大久保	肥後	備前	肥前	藝州	筑前
----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----

〔一新録探索報告〕

慶應四年五月上野戦争之模様御勘定所根取齋土彌一郎書取  
 十四日夕上野山内其外所々屯集之旗下末々暴動侵掠不赦之大罪と云を以斷然誅伐之儀被 仰出同十五日曉七半時各  
 藩西丸下發六半時比出張御國御人數手分大概左ニ

- 一 大地隊財津大島二手先手御物頭木造和田大板吉田柏原方組共惣人數貳百人上野打手
- 一 本陣政府手共櫻田目附迄押出同所堅アリ
- 一 殿御物頭寺本御物奉行堀虎門應援下地龜山藩 警衛アリ
- 一 白石手銃隊赤坂應援下地大村 藩堅所
- 一 御番頭落合方野田手昨十四日千佳より東沼田出張
- 一 御物頭吉海山路橋本御供

右之通ニ而朝五時廣小路ト下タ谷大名小路俗御成 道と云との間ニ而砲戰御國并薩州因州相備ニ而廣小路正面薩勢進撃御國手之小石川本郷加州屋敷前ニ押出湯島に押下ロシ池ノ端柳原ノ中屋敷に入込大砲手を配り不忍が池を隔て小銃隊之池ノ端中通り廣小路に押出因州と合して薩勢取合之損失を討賊初發之三枚橋迄進て砲戰せしが退て黒門を守り土依及土手の薩々大小砲を打出ス盛ナリ三藩ノ人數進不得就中御國手薩勢苦戰之段相聞候間虎ノ門應援之本陣方引受ルニシテ寺本堀五半比練出ス尤砲戰始ルト程なく湯島廣小路を下タ谷ニ懸ケ所々出火此日連日之雨續キ泥濘膝を没スル程ニ而旁難戰書九半過ニも有之たる哉兵火味方之後に迫候付木造和田薩ノ隊長と咄合勢を山下ニ廻し一時ニ乘入候方ニ一決し歩御使番歩御小姓杯を教導として廣小路裏手を山下に押廻ス其人數前後之次第和田堀一番二番薩小隊三人計續而木造寺本大槻吉田山下雁鍋柏原ノ之向より山王山に乘入ル賊此所之守り乏敷安々と山上に取上り黒門内之賊を目之下ニ見卸し嵩より打下ス賊必死と成て暫時砲戰官軍ノ死傷茂不少此時歩御使番高山秋藏一番ニ乘入り細川勢一番乗と唱候處ニ一小彈來テ左ノ股ト耳ノ下一寸五歩程下より口中ニ打通ス然レ共舌を不損兩所共淺手ニシテ勿論命分ニ不障此勢ニ隨而因州備前紀州伊州裏手々々長州大村佐土原兵士山内ニ込入り寺院堂塔ニ火を放チ柏原手大砲隊之池を遶り北手を乘入り八時過悉ク乘入候間一山終ニ落去さしも立續タル金殿珠樓一時灰燼と成ル賊ノ死傷數不少七時比惣軍引揚六時前櫻田邸に歸營御國之御人數始末何之申分も無之殊更一山之先登重疊奉恐悅候第一御高運之儀之高



山浅手外ニ御貝役千田四郎右衛門朝之内御人數ニ後レ道を誤而大名小路裏手ニ入り賊中ニ被圍横合左之腕ヲ脇腹を  
打通さ重手負候迄ニ而小者山鹿屋人足迄登人も死傷且逃たるものも無之確乎タル正義之大徳天道之照臨斯迄も著明  
なるもの歟と雀躍感泣ニ不堪次第ニ奉存候

一右ニ云千田重手杯も漸々快キ方ニ赴ク高山ハ猶更浅手ニ而不日ニ回春をへしと醫師申出候

一薩勢廣小路中壘を重手横町ニ而玉込其壘之蔭ニ出て炮戦ス殊ニ苦戦手負三拾六人即死八人と後聞長州なども手負打死  
多と承候へども裏手ニ而不分明

一拙子兵食と共に廣小路ニ至りし時ハ早山内ニ火懸り火焰黒煙ノ中ニ飛揚し大炮之音殷々所々ニ響キ下谷廣小路邊廣原  
となる泥潭ノ中死傷算を亂し衣類小道具取散し口も不被當不覺落涙仕候

一山内之賊ハ彰義隊と唱舊幕臣輪王寺之宮様を奉擁初發之實ニ義を彰し無頼を鎮靜し惣督府方之御賞詞も戴キ市中ノ守  
リニも相成居候處近來ニ至各藩脱走ノ者及報國撤兵杯唱銃隊を集ル事万五千ニ及暴動無時屢官兵を暗殺し遙ニ警息を  
奥羽ニ通し候由ニ而宮様より覺王院本覺院を以此方様に御依頼之筋ニ有之鎮靜方御盡力有之右ニ付而幕中之志臣山岡  
川村杯御國之正義ニ感伏し追々山内説諭を加へ候得共彰義隊之さし置外々之脱籍更ニ不同一時官兵を粉ノ如ク碎キ一  
人も遁しましき杯血氣浮動如何ニも鎮靜難被行終ニ今日之域ニ立至三代將軍以來之結構善美忽ニ破滅崩前死を潔スル  
ノ一激忠之可有之候得共全血氣暴動之スル所可歎息之甚數ニ御座候

一御門主之彰義隊三百計隨而其日山内を御立退一旦小塚原迄御立忍其後三川島に御開キ之由翌十六日方十八日迄探索有  
之候得共暇と相分兼會津に御開キとも云又日光御出とも中候此 宮もし北軍ニ御出ニ成候ハ、定而奥羽之賊兵錦旗を  
揚南北兩朝之故智を用可申歟と不安事共ニ御座候當月初方當地大雨打續川々満水行徳市川邊川口岩淵悉民屋を浸し候  
由ニ而決而御越立ハ被行間數今之内奉迎候良策有之度懇祈仕候事ニ御座候

一十五日三番丁に屯集當時御當家御預之歩兵に裏切いたし奥候様との内使ニ來り候旗下箱屋筑後守ら手之者愚人ニ而此

方より之番兵歩御小姓之手ニ生捕此もの、唯ニ五六日之間上野を持堪へ候ハ、宇都宮邊に集居候歩兵隊之頭取大島壱  
介が如きも駆參可申會津勢も不日着をべし只川々之満水故ニ事不成由申出候右之物語番兵を官兵と不知陳述いたし候  
間直ニ被召捕候此一條虚喝ニ而茂可有之候得共其故無ししも非ス其他脱籍之旗下府ノ内外所々屯集上野ノ一戦官兵之  
鋒起し候ハ、應援何程か鋒起可仕實ニ累卵之危を持候處洪水且下谷廣小路之兵火木ト彼を燒立候末俄ニ南風ニ打替  
り我兵ノ天幸と相成全官軍勝利之機天意人力兩ら得たるもの共可申哉(以下略)

〔淺井鼎泉記錄〕

一五月十四日清水數馬方白金の本營より櫻田門に出張有之鼎泉と共に出張し御番頭御物頭等と申談し諸事戰鬪の準備を  
調へ諸隊に酒肴を配る愈々進撃の日には櫻田門の警衛までも盡く引擧げて上野に出張せしむる手筈なりさて先鋒の諸  
隊は柏原要人(御番頭)の引率せる重士隊(御番方に)と木造左門(御物頭)和田權五郎(上)吉海市之允(上)野田彌三左衛門(上)全  
山路太左衛門(上)全の引率せる各小隊とにて大砲隊ハ別ニ平野五郎(御師津勝之助老體に付高)弟引廻し平野宜右衛門(事)の引廻し齋藤藤木九兵衛  
(使番)の案内にて本郷の榊原邸に陣地を構ふる手筈にて有之候

因に鼎泉は兼て上野征討ハ早晚免るへからざるを知りしを以て私に藤本に命して上野の地理を調査せしめ置きたれ  
は藤本専ら注意して小銃隊の進撃地大砲隊の陣地構成所等を調査し御人數の出張ニハ不少便宜を與へたり依りて開  
戦の日ハ藤本大砲隊の嚮導として榊原邸に至る手筈に極め置きしなり同邸ハ上野の左正面を制すへき適當の陣地な  
りしかハ戰鬪中に於て大砲的の中は御國の御人數より發したるものを第一としたる由ニ有之候戦正ニ酣なる頃西郷  
參謀茂右の陣地に來り的小路の多きを見て頻りに賞讃したる由に御座候

十五日昧爽先鋒諸隊堀御物奉行の手合せにて御成小路に進み大砲隊は御原邸ニ至る御成小路は上野正正面より容易  
に進み得ざる所ふをハ小路々々より仕寄を付けて進む薩州の人數も御國の御人數と相前後して進む四ツ時頃に至り戰



開愈々猛烈となり小路々々其裏手より火の手起り次第に蔓延して十二時頃に至るハ殆んど兵士は進路も差固候程と相成候ニ付薩州の人数と申談し今や一刻茂猶豫ある場合ニあらま全軍山内に突入して一大鏖戦を試むべしと申ふとに決し堀手一番に南手の小路より山内ニ突入を高山秋藏(歩御使番)其嚮導たりしか先頭第一ニ進み敵は砂裂丸に中り口と股と負傷是より山内總崩となり收兵悉く東北ニ向て退散す

因一貝手歩小姓の場千田某斥候にて御成小路より敵地間近く進みしか小銃の丸ニ中りて戦死其途く時ニ八ツ時頃にて有之候又大砲ハ二門にて初め千薬四十發宛用意は處四ツ時頃ニハ早打切り候ニ付更ニ四十發宛補充したまとも尙不足其告げ來候ニ付追々補充して遂ニ二百發餘ニ及び居候又各小隊ハ南手より進み重上隊ハ北方團子坂方面より進みたり山内突入後官軍争ふて各臺閣ニ火丸放ち候ニ付焰炎天丸焦し其景誠ニ凄然たる有様ニ有之候さて惣陣拂は夕方七ツ時過りて御國先鋒隊の惣引擧げハ日暮前にて有之候其夜警戒最も嚴肅其極む

諸門の御警衛は御國の御人数にて櫻田門虎比門赤坂門の三ヶ所其受持中候虎比門ハ龜山藩赤坂門ハ大村藩に受持は處人数寡少にて御國ニ應援被命候ニ付御物頭交代にて御詰御人数上野出張の跡ハ諸門の警衛ニ任まるをの無かりし處幸ひ白石清兵衛御次より郷土隊長被命護美公子關東御下向之節御警衛にて江戸に來り公子は御着後直ニ御解放相成候間右白石は一手丸以て諸門の警衛に任せしむるまゝ致し候さて御國より上野出張の御人数ハ左の如し

- 一大砲二門 財津手 副頭 大槻權九郎
- 引廻 平野五郎 御物頭 和田權五郎
- 一大砲 大島藤一郎 副頭 吉田源左衛門
- 一重上隊 御番頭 柏原要人 御物頭 吉海市之允
- 一三十挺組 御物頭 木造左門 御物頭 山路太左衛門
- 御物頭 寺本兵右衛門

千住 一重上隊長 御番頭 落合彌次兵衛  
御口登 一十挺頭 御物頭 野田彌三右衛門

一御物奉行付郷士二十人  
御物奉行 堀 十左衛門

〔小倉上野奥州戰爭御達扣〕

巳四月廿八日達

覺

去春一番手關東に出張同五月上野戦の様子如何程ニ有之候哉之旨ニ付承替申候處右一番手之儀者昨年正月初京攝變動ニ付 禁固御守衛として同中甸豊後路通行或ハ小島沖より萬里丸乗組等を以御國許被差立同下旬迄ニ夫々着京ニ相成候由然ニ舊幕府ニ之強而登京之途中鳥羽伏見ニ而戰爭鎗旗ニ向ヒ炮發之處よりして 朝敵之名相下り忽關東御親征被仰出若殿様ニ者東海道御先鋒被爲蒙 仰候ニ付右一番手出張被 仰付老幼被差省廿歳以上五十歳以下被召仕同二月中旬京都被差立尾州名古屋駿州府中相州箱根其外驛々ニ暫宛滞陳諸警衛等ニ被召仕藤澤より者兩御番頭衆以下御物頭衆等之内甲府に分隊茂被仰付本陣手以下右殘之面々者猶驛々ニ而警衛筋ニ被召仕順々東海道押ニ而同四月初東京に着白金御屋敷に被差置江城且歩兵御受取杯之御用ニ被召仕相勤被居候内甲府に分隊之面々同下旬東京ニ着ニ相成同白金御屋敷に被差置候處無程先鋒總督橋本柳櫻田ニ而井伊邸に御入御國御人数之内隨從被 仰付候ニ付兩御番頭衆共并御物頭衆之内右同其外歩御使番以下之面々共同邸并永田丁豊前守様御屋敷等に轉移被 仰付諸御用向被相勤居候由玆鳥羽伏見之戰破慶喜公大坂落去之末右之通朝敵之名下り討手を被差向候ニ付而之舊幕徒之内ニ之憤怨之鋒先を研一度官軍ニ抗スル之議論或者恭順を旨とし徳川家之社稷を全せん和相計ルもの茂有之論説紛々タル内御同公ニ者斷然恭順ニ御心決上野に御開謝罪御申立之處元ト薩州藩ニ而參謀西郷吉之助と申者を總督府より東京に被差越舊幕臣勝安房杯に而會慶喜公謝罪之實證を得候ため江城并軍艦炮器等差出之談判ニおよび安房よりハ徳川家御處置御寛典之儀依頼互ニ承諾いたし相別レ總督府東京御着之上江城を初談判通夫々受取渡等相濟慶喜公ニ者備州へ御預ニ相成候筈之處御願



ニよつて水戸へ御預ニ相成候由尤徳川家御處置筋之儀滅知被 仰付候而も百五拾萬石又旗下に茂百五拾萬石くらい者御扶助無之而者數萬之人口迎茂被行間敷と參謀ニ而薩州之海江田武次長州之木梨精一郎杯者日算茂いたし居專寛典之周旋ニおよび居候賦之處三條公御着ニ相成御同公思召者海江田木梨杯之存念通ニ無之七拾萬石位ニ滅知可被仰付哉之御模様段々流布いたし旗下之内一日恭順ニ基キ候而も沸騰ニおよび一跡不穩橋本御本營近邊杯ニ茂追々煩敷事茂有之心遣絶へ不申程ニ有之其内舊幕臣之内彰義隊と唱候而凡五百人計上野山内屯集初者恭順正義を表シ既ニ總督府より御賞詞ニ茂相成居候由之處追々ニ諸方脱走之者共相加り遂ニ五千餘人餘ニ茂および候様子ニ而次第ニ兵力茂つき勢を得ニ隨ヒ度々官兵之内を暗殺或者市中ニ狼藉金穀を掠奪杯いたし暴動日々ニ増長ニおよび候内ニ之奥羽と互ニ聲息を相通シ徳川家之再興を謀又其頃迄ニ薩長之外各藩佐幕之情不少儀を相悟上野ニ而事を發徳川家累代墳墓之地を馬蹄ニ被懸候様ニ茂有之候ハ、更ニ傍觀之向茂有之間敷と之胸算より彼是不容易企ニ茂及候賦ニ而何時御誅伐茂難計候處此方様ニ之御趣意筋茂有之候事ニ付惣帥衆を初御奉行衆杯ニ茂右御趣意を被奉可成兵力を不被先鎮撫ニ至候様外交衆之内なと被差出厚盡力ニ茂相成たる由候へ共大勢之内ニ之激烈之者共も有之何分急々一統承服と申埒ニ茂至兼居候處同五月十四日之夕上野屯集之者共暴動ニおよび如何ニ茂寛典之御取扱出來兼明日御誅伐被 仰付候付此方様より御人數百人程被差出候様總督府より御達ニ相成湯島より上野黒門前御國薩州因州裏手本郷之方肥前筑後大村佐土原其外各藩受場々々相定同十五日曉八時西丸下に相揃可申旨ニ付總帥衆初井伊瑪へ集會軍議有之分隊ニ付而者各討手之方爭之鹽梅茂有之候付御備之内先手順之繰出ニ相決左之通

柏原 要 人組共  
木造 誠之 允右同  
和田 權五 郎右同  
同 無 垢 助(權五郎嫡子)

大槻 權九 郎右同  
同 忠 太(權九郎嫡子)  
吉田 源左衛門  
兩 大 炮 手

右先陣討手

本 陣 手  
政 府 手  
小代五郎右衛門附屬  
兩人

右赤坂門并四谷門堅  
右之通分隊相定り受場々々出張(以下略)  
(前文略)

右櫻田堅

寺本 兵左衛門組共  
堀 十左衛門附屬共

崎子 同 無垢助  
誠之允組副頭

右虎ノ尾門堅

吉海 市之 承組共  
山路 太左衛門組共

崎子 大槻 權九 郎  
井上休之允組 同 忠 太  
眞物頭代 吉田 源左衛門

石橋本陣御供

白石 清 兵 衛手

右誠之允方列者要人(柏原要人ニテ組頭ナリ)方手ニ屬出張神原邸に入込之上同人方(柏原ナリ)差圖を受組方之もの共に指揮有之山内目常炮發被爲致候處前顯之通霧深樹木之隔等ニ而矢利之模様茂分り兼候ニ付可然ク所茂有之候ハ、轉所ニ相成度配意奔走をもいたし被居候内薩州隊長之内罷越相談ニおよび候趣有之いつれ之衆茂組召連不忍池ノ端迄押出廣小路筋ニ而因州勢取合之敵ニ横矢を被入尤廣小路筋之儀者初發より薩州勢ニ而取切一旦者敵三枚橋臺場迄出張り炮戦いたし追而之黒門前臺場に引揚り相支山内より茂大小炮等手繁ク打出依之同州勢者大ニ苦戦双方死傷茂不少急ニ勝敗之期茂相見不申候處池端より之右横矢之餘程矢利いたし候由ニ而薩州隊長之内より頻ニ打方茂相勸候由ニ而稍時



刻度移居候内敵味方より之放火所々に相廣り既ニ誠之尤方列之後口手ニも一ト口迫來り前ニ者敵を引受進退之心遣茂有之候ニ付同人方列ニ薩州隊長之内杯と山内乘入之方ニ咄合相決山下雁鍋之様ニ仕寄を被附候處敵者山内山社之高其外所々より炮發必死之躰ニ而防禦いたし中々輒者難進候處權五郎方ニ者組方之もの共引連亂玉之中を駈拔山下之岸ニ取付鯨波を揚せ俱ニ高岸を攀登進撃有之候處其時分ニ至候而者黒門前之敵引揚候付直ニ山内ニ被乘入續而薩州勢并誠之尤方列乘入ニ相成候由之處最早敵者衆ニ術を失山内深引退候得共其内より段々炮發もいたし權五郎方杯目前ニ而官軍之内五六輩破裂丸ニ當り相倒候由其内何々之衆組方を被勵堂閣樹蔭等一々探り矢を打せ猶進撃有之候處追々官軍所々より亂入終ニ敵徒者退散いたし候ニ付薩州勢杯之内より山内所々に放火ニおよび寺院堂閣一時ニ燒亡灰燼と相成無程官軍惣引揚之御沙汰有之同夕七半頃誠之尤方列者同所より直ニ被引揚候由(中略)

右之通ニ而山内乘入之儀者先權五郎方先登之由ニ候處誠之尤方ニ一列衆と雁鍋之様ニ被相廻候節薩州勢之同所町家之兩側ニ相扣兵糧共仕居候者茂有之更ニ進軍之模様及相見不申由ニ而自然之例之心術ニ而之有之間敷哉と思慮を廻シ一列衆之内ニ潛ニ其咄共有之少シ猶豫いたし被居候内權五郎方仕寄之模様を見受右之薩州勢及引續相進候付用心之ため同勢を中ニ取挟ミ一列衆俱ニ乘入ニ相成候由ニ而權五郎方との間格別遲速之違茂無之いつれ之衆差入り進撃有之組方指揮筋茂被行届候由之處誠之尤方ニハ小倉以來戰場之場敷も被踏居一跡落着キ茂宜諸事別段被行届候由(以下略)

明治二年巳四月 日

同廿八日連

山 口 氏

〔見聞雜錄〕

小島家書類

一五月十五日上野山内戦争之事

當春中より前上様上野御謹慎御恭順被遊候御より徳川家臣并諸家脱走之由ニ而淺草門跡寺内ニ屯集し彰義隊ト號多人數兵具を携へ市中之惡徒を平定し其後東門跡ハ北陸道總督高倉殿御陳營相成候ニ付彰義隊者谷中瑞林寺へ轉集し其後輪王寺宮様御警衛徳川尊牌等を守護も前上様四月十一日常州水戸表に御退隱被遊候ニ付而者彰義隊徳川家之重寶重器守衛し上野へ屯集す其後追々諸家脱走之上相加り凡三千餘之人數ニ相成是迄之酒井家之えんちよう組之如く御座候然る處如何之事ニや更ニ事柄存不申候得共官軍御人數御差向ニ相成五月十四日之夜中俄ニ諸家様御勢上野山内ニ向御繰出しニ相成十五日明方より戰始りしよし私事も成田山旅泊に參詣之途中大炮之音いたし淺草御門者勿論神田川之橋大川筋兩國橋を始往來差留柳橋ハ燒落し兩國御橋淺草御門 新橋黒田橋御堅メ和泉橋筋遠橋昌平橋者藤堂和泉守様御固メニ而下谷邊外神田湯島橋邊より遊來る者老若男女ハ筋遠橋一筋之往來ニて大混雜御固メハ嚴敷殊ニ雨天ニ而夜具つゞらたんす杯の持運ニもぬれ鐵炮玉之ふる中をよふノノ子供を脊負ひ幼子之手を引連皆はたしにて遊來る有様哀れとも氣のごく共申へきよふ無之諸家之怪我人ハ駕戸板などニ而かき歸り江戸市中も如何ニ相成へき哉と皆々恐入銀丁川むらニ而も荷物形付用意致し居候此跡 跡ス

上野山下邊大炮之打合ニ而出火ニ相成池之端仲丁廣小路角迄東かニ御橋前六阿彌陀寺之三軒手前ニ而燒留り御橋内兩クニ不殘かん鍋山下通り一圓車坂下町兩かニ燒新寺町玉藏寺門前兩らニ半町程燒山崎町少々宛處々燒谷中團子坂通り燒此邊所々類燒致し夕刻より火之手高く相見上野山門中堂鐘樓其外宿坊四軒寺谷中口等悉く燒失ひ夜中ニ至而不續燒残りし清水觀音堂山王權現其外下寺宿坊屏風坂迄行當谷中口松林邊多殘ル官軍方夕七半時比より御人數追々引取相成町方ニ而ハ同夜安心致し寐る者なく眞事ニ大心配仕候上野屯集之彰義隊ハ多くハ門前町家ニ埋伏し相戦し由後ハ何方へ立退候哉宮様并宿坊共行衛不相分由

翌十六日總督様御遣見ニ相成町人共茂勝手次第ニ見物ニ入申候

山王山之内討死之彰義隊貳十人程其外處々之討死都合六十四人ト申事ニ而兵卒のミ多く彰義隊ハ只三四人程之由跡

明治元年

六五一



ハ歩兵隊之由

脱走兵戰爭最中東橋に落行之處御固メ之紀州様御人數と炮戰ニ及ヒ脱走兵者本所へ渡り逃行之由

駒形邊之打合はけしく玉あられの降如く諏訪丁中次郎の咄御座候落玉五十程ひろい候由

彰義隊ハ徳川旗本御家人之脱走也 純忠隊ハ

精忠隊ハ 盡義隊ハ

松石隊ハ明石之脱走也 臥龍隊ハ榊原脱藩

萬字隊ハ久世隠岐守脱走也 水心隊ハ結城水野日向守脱藩

一聯隊ハ歩兵隊也 猶興隊ハ横濱附屬ト云

浩氣隊ハ酒井若狭守脱藩

遊撃隊 撤兵隊 砲兵隊 傳習歩兵隊 銃隊 徳川家士也

右之上者徳川家を助けんと所領家を捨脱走し上野山内其外處々ニ忍びて安危を窺ひ官軍へ敵對す薩長鍋島家之御人數を殺害せしより如斯之事起りし由此外とも駿河田中城主本多紀伊守殿家來小林助右衛門外六人

掛川太田備中家來秋山七兵衛外二十人

石州濱田松平右近將監殿家來熊谷左織外九十三人其外酒井雅樂頭殿家來諸家之浪上多く屯集せし由

〔嘉永年間以降記録〕

吉海家書類

一明治元年五月十五日上野山内ニ屯集ノ彰義隊御征討後ハ殘賊東方ニ遁レテ各地ニ出沒シ奥州白川口ニ於テ官軍ノ先鋒ト屢戰闘ニ及ヒ官軍頗ル苦戰ノ報アリ因テ本藩ニ命シ右應援トシテ來ル廿二日ヨリ雷發セシム然ルニ當時本藩御銀欠乏且ツ大砲ノ彈丸拂底ノ折柄金五万圓佛式座條砲ノ彈丸五百發拜借ヲ要求シ若シ許容ナキ時ハ斷然出兵ノ御斷ニ決議

セシニ付大總督府ノ使節ヲ小子ニ命セラル道回ノ使命タル實ニ大事件ナレハ豫テ不肖ノ身其任ヲ全フスル能ハサル處アルヲ以テ再三之ヲ辭セシヲ以テ然ラハ本使ニハ御番頭柏原要人ヲ遣ハシ其副使トシテ登營スベキ旨強テ命セラレタルニヨリ已ムヲ得ス本使ト共出營シ參謀大村益次郎ニ面接シ使命ノ趣陳述セシ處當時本營ニ於テモ金子拂底且ツ旋條砲ノ彈丸モ御備之レナキ故願意叶ヒ難ク就テハ半備出兵ノ儀ハ成ル間敷哉トノ内意アレ右ハ豫メ分隊ノ命トモアラハ甲府へ分隊後當藩ハ兵制舊式ニテ甚困難ナル故何分ニモ分隊ノ命ハ奉シ難キ旨返答スヘキ様内意アリタル事故其趣ヲ以テ即答セリ依テ五月廿四日右出兵ハ免セラレ和泉橋昌平橋筋遠目附等警衛命セラレ其後横濱警衛ヲ命セラレタリ會津藩主ヨリ屢謝罪ノ歎願書差出シアレトモ御採用之レナキ趣風評アリ此上ハ如何ニ恭順謹慎ノ狀現ハルト雖トモ終ニ御征討ヲ遂ケラル、御趣意ナルヤ使節ノ序ヲ以テ御先鋒心得ノ爲メ訊問スヘキ旨隊長ヨリ命令アリ依テ小子參考ノ所ニテ窃カニ大村參謀ニ問ヒシニ參謀暫ラク考ヘノ上頗ル不平ノ顔色ニテ是迄會津藩ノ謝罪トイフモノハ一モ實効相立タズ謝罪ノ科ニヨリテ何々ノ廉ハ御容許アリタシトカ不都合極マル謝罪書ニテ一モ御取上ケニナルヘキ書類ナク仍テ何處マテモ御趣意ナリ信實ノ降伏ナラハ軍門ニ兜ヲ脱キ平伏シテコソ始メテ降伏ノ實効相立譯ニテ其上ハ廟議ノ上御處置ノナサレ様モアルヘク王師ノ向フ所ハ古今同一ノ事ナリ例ヘハ爰ニ親子アリ其子親ニ孝行ヲ盡セハ褒美ハ賜ハルヘキカトノ心得ニテハ眞ノ孝行ニテハ之レ無ク中心ヨリ起ル孝行ナラハ其成績ニヨリテハ御賞美モアルヘク會津モ其類ノ歎願筋ニテ御採用ナキ譯ナリ併シ簡様降伏等ノ儀ハ貴藩ヨリ勸誘共アリテハ御趣意ニ背ク様成行クヘク其邊ハ篤ク注意スベシトノ事ナリ

吉 海 小 平 太

〔嘉永年間以降記録〕

江戸下谷ニ而法華宗徳大寺ニ參リ居候友枝善右衛門第三僧より兄善右衛門に差越候書翰

一節啓上仕候時下甚暑之節御座候得共先以御老母様御始御捕益御壯健珍重奉賀候次ニ小子無異隨勢罷在候條乍憚御休慮可被下候乍併前ニ以書狀申上候通り當表茂春以來誠ニ騷敷事耳ニ御座候處則去ル五月十五日於上野山内徳川家脱走

明治元年

六五三



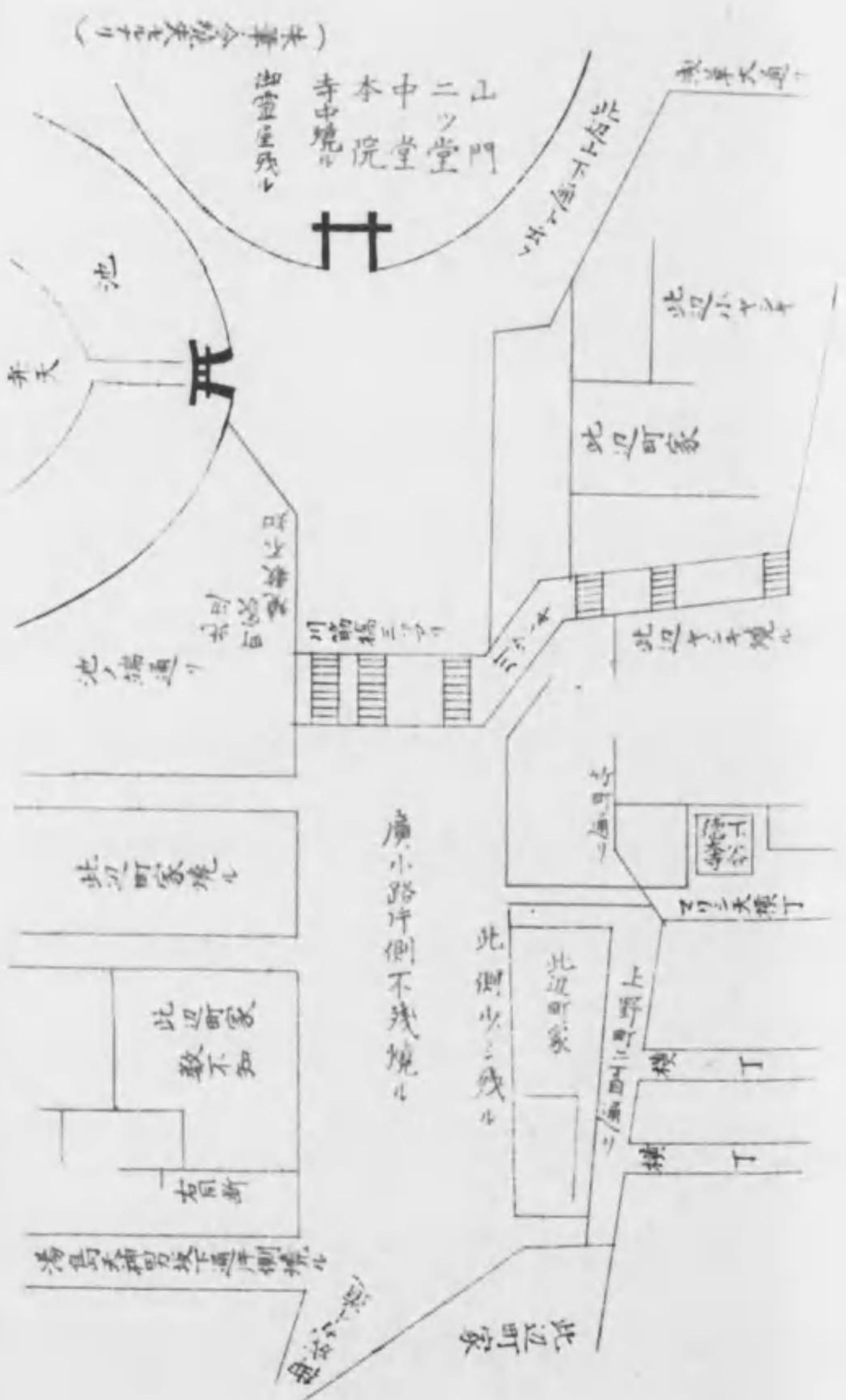
人と號千人余りも屯集罷在申候處大總督宮様より打拂として官軍御差向ニ相成右ニ付十四日之晚より町家並近邊屋敷不殘立退候との御觸ニ而一同驚入俄ニ立退之騒ニ而御座候處當山より上野山内迄指渡シ貳丁余茂有之哉併當山ニ之少も騒不申立退之支度も無之處明ル十五日五ツ時分より少シ前頃より大砲小砲之音響數彌々戰爭相始り始り候様子ニ而俄ニ寺内取片付大低土藏に入置乍去立退之不申候處彼是仕候内ニ上野山内下町近邊五六ヶ所火ノ手相見益合戦之盛ニして雨も止間なく降り尤當山ハ近邊故鐵炮之玉ハ四方より如雨ニ降り來り大砲ハ一發も參り不申候へ共誠ニ急速之場合ニ而驚入候實以可恐可愼一時炮聲止候故物見より見渡し候處四方ハ一圓火事盛ニして納候様子更ニ無御座追々寺内裏口並横手に火廻り候付用水相廻し火ヲ防キ候支度仕彼是致内裏之方へ少々火掛り候處尤前々長雨ニ而十分之しめり仕合ニ風無之故段々下火ニ相成漸火納り口ニ相成候間少シ安堵致し候誠ニ火之中ニ而類焼不致殘り候處之全く摩利支尊天之御利益かと存居最早刻限茂九ツ半時分ニ相成候處右刻限ニ之上野山内ニ而一時勝利之由ニ候處追々官軍方人數御練出ニ相成彌動數戰爭ニ相成山内ニも山門諸堂中堂並宮様御殿向火之手相見候ニ付徳川家御人數彌敗走と見込居候内ニ脱走人之四方に散亂之由何共恐入候次第申様も無之將軍家爲御菩提寺之御靈屋等茂有之清淨之佛地右様之事ニ相成候事ハ實ニ暮々茂存不申候事御府内も彌以 天子御領分と相成徳川家御相續に之高七拾萬石と相極り是迄之御家來御旗本御家人等四拾萬余人も御扶持上り之御人數御座候由ニ而八千石或之七千石五百石高持之御屋敷ニ而當時之色々商人ニ被相成候而ヤシキ長家共儘被致置豆腐屋或之酒屋料理屋古道具屋店を相始メ暫時相凌キ候様子御屋敷ニて商致候儀之前代未聞無情次第ニ御座候申上度事山々御座候得共認メ兼候間余之又々可申上猶後音ニ萬々御語申上候早々御首

六月十二日

玄

澄

向々御老母様に宜敷先々寺内院主始一同小子迄無別條凌居候間御安心可被下候且戰爭前後之次第新聞ニ委敷御座候間能々御按見可被下候燒場所之繪圖といまた開板ニ相成不申候間愚筆ニ任せ認候間御笑覽可被下候以上(新聞略す)



(朱書ノ分燒失セルモノナリ)

明治元年

六五五



## 〔彰義隊頭並 休録〕

〔天野八郎著〕

五月十五日朝六ツ半頃予と春日(頭並春日)小林(頭取並小)山外を一巡せんと廣小路より山下通り根岸まで行し時、切通邊にて大炮一聲す、馬を天王寺脇まで駈る内に續て七發す、池の端へ来る時は、早や戦は始りて、穴稻荷前にて神木隊(神原)二百目の戦炮並に小銃を以て戦ふ、予は稻荷門より山内に入り、本宮へ歸り池田大隅守(彰義)へ神祖御影の寶物を託し、宮警衛として本坊へ促し遣り、八門(黒門、屏風坂門、新黒門、東坂門)防戦の手配し、兼て別段予に附屬する八番隊を引率し、黒門口に向ふ、八番の隊長木下福次郎、副長寺澤親太郎なり、此手は何れも撃劍を善くし、最も奮發の徒なり、一體予が持場とするは谷中門、天王寺なれど、同所には敵一人もなく、黒門口の戦ひ烈しきに依て、斯の如く出張す、正五ツ頃敵、此時酒井幸輔(頭取)は早や黒門に指揮を爲し居りし故、予は山王臺へ上り専ら大炮を差圖す、敵は松源其他茶店の二階より砲發し、大礮は三橋先、又は松坂屋前より打ち出だす、我兵町家へ燒玉を數發すると雖も、霖雨に玉濕り放火ならず、四ツ半頃より、天神男阪下邊に出火すれども、漸々として敵を防ぐの要を爲さず、敵は追々に繰り込み來り、放火を見て一時に討ち破らんと奮戦す、素より我隊恭順の趣意を破らず強壁溝壑の設けなく、事に臨んで疊二三枚宥楯とするのみ、砲玉を防ぐに足らざる故に手負多し、予は谷中門の戦争を聞て、四ツ頃同所へ向け天王寺前へ至るに、同寺にある予が手の隊長小川(名)花俣(名)齋藤(名)手勢百餘人、並に附屬の兵隊を收て敵を大に破り、放火して敵一人もなき故、本營へ引き返へすに黒門口の激戦を註進するに依て、未だ朝の糧を喰ふの迫あらず、直に駈せて馬を山門の内に乗放し、山王臺に向け又防戦一時す、九ツ過る頃黒門は酒井、山上は近藤武雄(頭取)に託し、本營へ歸て諸門へ下知を傳ふ、間もなく黒門口殆んど危しと訴ふるに依て、又山王臺へ奮出す、途中清水堂の脇にて旗下の土小川斜三郎其外撤兵歩兵差圖役旗下の土四十餘人の新手に會ふ、是れ多くは純忠隊附屬のものなり、予此兵に對して曰く、黒門危しと見へたり、衆人山王臺に力戦すべしと、衆同音に諾す、然らば

斯く來り給へと、予眞先に一退して山王臺一番隊(長、士)四斤砲の際に至り、後を顧れば續く兵一人もなし、此時我徳川氏の柔極まるを知る、歎息の一暇もなく苦戦の奔走不肖と雖とも職掌を恥かしめず、一番隊の副長林半蔵に下知して、頻りに大炮を討ち、遊撃隊佐長新開儀三郎、海崎寅太郎外二人を助力とし、予も車臺の運轉を手傳ふ程の激戦なり、酒井は今朝黒門へ出張の儘、今刻に至り暫の休息もなし、組頭以上同人は當日第一等の奮發なり、此時臺に討死深手算を亂し、黒門の番小屋は亂玉に討ち破れ、半身を置くの處なし、此上一時の防戦覺束なく見へたり、爰に於て兼て誓ひ置、八番隊(長、木下)其外撃劍の兵を率ゐて敵陣に切入らんと欲すれども、兵隊右往左往なる故近藤、酒井示し合せ、突出隊引纏ひとして、本營をさして行に春日今朝より中堂山門にのみ奔走し傍觀たるが如く、此時山門裏に猶酒を飲み居たり、是を責るの閑なく駈せ行く、遂に天王寺より援兵を乞ふの使に逢ふ、谷中口敵兵もりかへの戦ひ烈しきに依てなり、本營へ歸り見れば、花俣自身援兵を乞ひ來れり、諸方の戦ひ四五ヶ所の躰を見るに、黒門口最も危く、又谷中口破れなば、本坊甚だ薄く、殆んど困惑す、突出隊切り込みの徒も、此所彼所に散て十人に満たず、兵隊を算ふるに、下寺に三百の兵あるを訴ふ、是は今朝よりはかゝしき戦ひもせざる故、是を三つに分ち、百は同所の守とし、百は谷中へ援兵し、百を引て山王臺に血戦せば、暮合までは凌ぐべしと、分兵の爲めに下寺へ行かんとす、今朝より數刻の奔走に身體疲勞したるが故に、馬に助けられ横に本坊前まで駈せしに、中堂脇より我兵一百餘りなだれ來る、如何んと問ふに、黒門口早や破れたりと告ぐ、酒井は討死し近藤は腕より脇腹を討れて、新井(頭取並新)の肩に助けられ來る、大谷内龍五郎(第九番)は兩腕を討貫ぬかれ來る、跡よりは敵軍込み入る事、潮の湧が如く迫る事甚だ急なり、予此時鞍坪に突立大音を發して曰ふ、此處宮の門外主家累代の廟前、勿論警衛する處の重器目前にあり、爰を去て何處に生を欲せんとするや、速に亂戦職掌を盡して死を潔くせよと呼はりしかば、大久保紀伊守なる者東照宮の御旗を持って眞先に進みたり、此人年五十計り、元大監察を勤めしものなり、予馬より下り、元込七



發砲を携へ同人より後る、事一步、其次に新井鏝太郎同く一步去る、跡より續く兵凡百餘人と覺へたり、あわや中堂脇に於て血戦に及ばんとする時、砲玉一發來りて紀井守が額の上へ中る、此玉小銃にては無く疵口三寸計、柘榴の如く見へて陣笠を打落し御旗を持ちたるまゝ空向に倒る、是を見て續く兵一百餘散亂して一人もあらず、唯予と新井、一人は紀伊守の家來ならんか僅に残るもの三人、爰に徳川氏たるものに亦愕然たり、紀伊守未だ息あるを捨て置くに忍びず、三人して是を荷ひ本坊の門番所へかき入る、其内敵門外へ切迫すれども、守兵一人もなし、新井小門を鎖して、宮御方心元なく、玄關より奥へ行き見るに、只今退せられし跡の體なり、爰に於て御先途を奉護の外他事なし、御跡を墓ひ根岸へ出で、御行衛を問ふに三河島へ落ちさせ給ふといふ、同所へ往く道すがら後を顧みれば、大小の砲聲未だ絶へず、我殘兵來り合せ、本坊前に於て小戦ありし由、是は後の傳聞にて知りぬ、早朝より數ヶ所の戦争多端なりと雖も、是は予が爲す處と予が目撃する處を謀すのみなり、三河島に至り落行く其中を見るに竹林僧正(名映)あり、互に切齒歎息も胸塞りて言葉少ななり、然るに僧正手を取て誘ふの若僧あり、怪しげなる麻の黒衣を着し古き草履をはき、左の手は僧正にひかれ、右の手には珠數を持ちたり、今僧正と予一言したるを聞て、何人と問ふ、僧正是れは天野八郎にて候と答ふ、此時予始めて輪王寺宮御方なるを知る、故に思はず落涙して再拜す、僧正是を制して他見を憚る、問是を推して密に御先途を問ふ、僧正曰く會と答ふ、御供を願ふに微行にあらざれば遂げざる故に、是を許さず、故に心中百拜して別離す、昔年或る俳人に聞くことあり

わらんじは斯うめすものと涙ぐみ遠くきこゆる鐵砲のおと

此附合の跡、今目前にあり、獨身涕泣數行なり、斯くてあるべきにあらず、追々に落ち來る敗兵の予を墓ふあり、心ならずも一百計りを引連れて、道灌山を越へ里鴨を横ざりて普材の護國寺に來る、時黃昏に及べり、寺内に入て暫時憩ふ事を乞ひ、糧の手當など頼みしに快く許さるゆへに、境内の小川にて今朝より土泥に汚れしを洗ひ客殿に入て休息し、酒を飲み、膳を用ひたる上、僧正の談論區々なれども、予は思ふ仔細ありて、府下に留る事と決着す、是に従

ふ者遊幸なり、或は甲州路をさして落ち行もあり、予は此夜九ツ頭護國寺を出て知重の方に行て一二泊を宿りぬ、其他思ひ思ひに信友知己を便りて潛伏す、清々當日の戦を考ふるに、我兵凡二千餘恭順を守りて龜壁の構なく、敵は列藩二十一家の兵隊壹萬に近く、我東臺の廣さ三十萬坪、守る門八ヶ加ふるに天王寺あり、三日の防戦叶ひ難き事必せり、併し一日に落つべしとは思はざりき我兵討死一百餘人手負未だ詳ならず、敵の討死六百餘人、手負詳ならず、就中他向の周旋を委任せしは、吉田定太郎、加藤歸之郎三カなり、此兩人より外へ約し置く兵二千餘人あり、敵山寨を襲ふ時は、速に出兵して其後を討つの誓なり、其他唇破れて齒寒きを知らば、旗下八萬に於ても傍觀もあるまじなど、腰拔武士を少しは便にせしこそ、我輩の拙愚究る處なれ、堅約の二千を始め、援の兵一人もなし、尤も吉田、加藤など他向周旋の任に當らざる事顯然なるを、予如何とも多忙たるに依て是を委任して大事を誤る、是れ予が罪なり、嗚呼此日如何なる日ぞ、天海僧正忍ヶ岡を開基して我主家累代の靈廟を安置する事二百餘年、山門、中堂、本坊の善美、數廟の華麗、金銀珠玉を盡せしも、一時の兵火に灰燼となり、三十六坊數百の僧侶一日の中に不住の乞食となる、百事算數も是れに及ぶ可からず、一月計り経て、宮御方辛ふじて會津へ入らせらるゝの由覺王院も御傍にあるの報告に少しく愁眉を慰めたり、我殘兵所々に潛み居て頻りに予を墓ふて、進退の指揮を乞ふ、兼て心ざす方もある故に、専ら帷幕の内に心機を拙き、晝は深き笠のなき事を得ず、夜も地を荒く踏むこと能はず、爰に顯はれ彼處に潛み、戦々競々として周旋ひまなく五十餘日を過ごし、七月十三日朝、本所石原文次郎宅に於て、官軍稻田兵數十に襲はれ、自盡の暇もあらず、捕となりて西城下札問所の獄に繋るゝ事となりぬ、(以下略)

慶應四年戊辰秋八月十有七日武陵城獄中に之を誌す

天野八郎忠告

行年三十有八歳

(編者云、天野八郎は在獄數月病みて終に歿す時に十一月八日なりき)



五月十五日輪王寺宮公現法親王上野山内を脱し北豊島郡下尾久村の農家に潜み給ふ

〔井上言信編 彰義隊附輪王寺宮殿下〕

山内の開戦となるや、小銃の弾丸は幾個となく本坊屋上の銅瓦に觸れて、怪しき音響を傳へ、危険極りなく、宮には直に本坊を御立退ありて、林光院の靈屋へ成らせらる、淨門院(邦)常應院(守)竹林坊(光)等御側に在りて守護し、宮御家來鈴木安藝守、麻生將監(三)小林右近、安藤直記(清五)等、交る々々御附添申し上げ、竹林坊の眠近なる前評定所留役河野大五郎、御附醫柴田某等も陪侍し、門外には榊原健吉、松平康平、大江紘等、夫れとなく嚴重に警固せり八ッ時頃御小人關根仁兵衛第一着に驅け付く黒門口破れ、官軍亂入せり、早々御立退き然るべしと注進せり、御内佛等(常應院)直に宮の御手を引き、林光院裏手の二段に至りたるに、隊士が防禦策の一として新たに構へたる木柵に阻てられ、進む能はず、其の内に山兵類來たり、忽ちに三十間許り柵を毀ち、逃走するもの頗る夥し、是れ東西南の三方より敵を受け、唯り當千住口のみ寄せ手の軍勢なきを以てなり、宮には一旦中根岸麻生將監方へお立退ありたるに、誰云ふとなく、宮御方なりと、御後に付き従ふもの、蟻の甘きに集る如く、忽ちにして數百人となれり、茲に於て、多人數は視線を集むるの基にて、却て宮御方の御不爲なりと、説諭して解散せしむるも應ずるもの甚だ少し、榊原、松平等強ひて御供をもと願ひしも、御許しを得ず、其の儘退散せり(中略)

宮には麻生宅より、三河島村の出入植木屋、紋左衛門方へ成らせらる、當時の尊容を拜するに、勿體なくも學寮の姿に身を要させ、白木綿の單衣、白羽二重の袴に、墨染の麻の法衣を着け、手甲、脚絆と足袋に草鞋を召し、綱代笠を冠り、左手に念珠を掛け、淨門院、常應院に御手を引かれ、金枝玉葉の尊き御身を以て、降る五月雨に袖をしぼりつゝ、泥濘を没する凹凸の畦道に、玉歩を運ばさせ給ふ御困難は、抑も如何許りなりしぞ、或は滑り或は躓き、且草鞋の爲めに痛みを受え、御足も得上げざる程に至り、同族の人々此の慘憺き有様に、何れも涙に袖を絞らしとぞ、此

處にて山内より寄越したる御置直を拜せ、然るに闇闇にして又々多人數計集れ來り、家は狭し、潜むべき室もなければ、上尾久村名主江川佐十郎方へ移轉のこととなれり、數日の霖雨にて水高き増し、田も畠も一面水に浸され、且小溝のありて徒渉には頗る難ず、田舟を準備せしめたるに、我先きにと争ひ乗り、舟は其の重量に堪へずして、沈没せんとするにぞ、三度程漕ぎ戻し、人を拂ひ除け、漸く無事に達するを得、佐十郎は家屋も廣き故、宮は土藏の奥座敷に成らせられ、僅に御休息遊ばさるゝを得たり、程なく例の人々、續々として入り込み來り、混亂甚きのみならず、名主なれば自然米穀人夫杯の徴發の爲、官軍の出入するやも圖られずと、竹林坊種々に思慮を廻し、追従の者共へは、宮御一泊と囁れ込み、其の夜四つ過ぎ宮を御始め、竹林坊、常應院、淨門院のみ、密に裏口より抜け出て、佐十郎が用意の田舟に乗り、何處ともなく、隣村人家を目的とし漕ぎ出せり、山兵は勿論、宮御近侍の家來に至る迄、一人として御行衛を知る者なし、宮、舟中より山内の猛火炎々たるを顧み、万感に胸を打たれ給ひけん、御落涙遊さる、竹林坊を始め、他兩僧も御心中を察し上げ、頭を低れたる儘無言にて、唯吹歌鳴咽の音の闇を破りて聞ゆるのみ、雨は降る、衣は濡るゝ、腹は餓え、身體は疲る、夜は次第に更け行けど、宿る可き家さへ定かならず、將た前途は如何にすべき、且多年住み慣れつる宏莊輪奐の大伽藍は、萬丈の光焰に包まれて焼き失する、其の影の水面に落ちて凄く顔を照せるなど、這般の光景は、常人と雖も堪へ難き所、況してや、九重雲深き金殿玉樓に人とならせ給ひし宮御方に於てをや、今より追懐するだに嘆涙の種なりけり、馳て舟を或る岸邊に着け、二三の民家の戸を叩き、予等は山内の僧侶の、兵燹にて焼き出されたる者、一夜の宿りをと、懇に請ふも素氣なく断られ、さして行く筈置の山の昔ならぬぞ、宿る可き家しなれば、如何はせんと、傍に材木の積みありしに、腰打ち掛け何れも茫然たる折しもあれ、手拭を冠りたる町人風體の者、跣足にて忍びやかに來たり、「吾は山内の庇護にて生活し居る賤き者なるが、卿等の一行をば、最初より一仇一什見届け來れり、只今御宿を案内すべし、御出あれと言ふ、常應院之を誰何するも、決して其姓名を告げず、唯生命にかけても御附添申すべし、御安心あれと、断然として言放つのみ、依て一同夢幻の間に草鞋を



穿ち、此の案内者に連れられ、或る農家に入りたるに、破陋狭隘にして、居間の外には座敷の設もなく、到底宮を請ふ可くもあらず、兎や角評議の末、納屋へ入らせらるゝこととなりしが、其の不潔にしてむさ苦き、何とも云ふべきなし、農具肥桶、藁など雑居せる傍に、九尺許の板間あり、前は三尺許の土間なるを以て、宮には板の間に御腰を掛けさせられ、三人の僧侶は、斯る中にも油断なく警衛せり、宮寒氣を覺ゆるとの御意に付、蒲團貳枚取寄せたるに、其の綿の薄くして硬き、其の垢染みて異臭の鼻を衝けるには殆んど困却せり、然るに、夫れにても苦しからずとの仰せにて、御用ひあり、此の時已に夜の八ツ時半なりし、折柄數萬の敵軍露々として切りに攻寄せければ、宮には終宵、少しも眠に就かせ給はざりし、以て如何に御困難をせられたるか、其の一斑を恐察し得べし、此の御宿は下尾久村小原長兵衛宅にして彼は實に之れに依て、後世まで名を掲げ譽れを存せり、(以下十六日)

五月十五日長岡護美故菊池武時及び故加藤清正等を祀典に列し其武功を表彰せられむことを朝廷に建議す

〔細川家譜卷之十〕

(細川頼邦譯下)

明治元年戊辰五月十五日護美上言シテ曰今般 王事ニ身ヲ没シ候者於東山招魂祭被 仰出往々勤 王ニ志候者益興起可仕且楠中將之精忠豐太閤之偉略ヲモ益御表顯被爲在 皇國之御盛典ト奉存候然處肥後國菊池氏ハ累代ノ勤 王ニテ皇室御急迫之間百回苦戰其忠誠義烈今古超越スト可謂且又加藤清正モ豐太閤ノ先鋒トシテ海外ニ御國威ヲ輝シ其武勇一世ニ卓絶今日ニ至リテハ愚民モ大ニ仰慕異域之青史等ニモ鬼將軍ノ威名赫輝シ更ニ論ヲ不待候得ハ今日 御一新之秋早々御贈官等其大勳偉烈ヲ御表顯被爲在候ハ、益士民奮興之御一助ニモ相成可申臣多年之志願伏而奉冀候ト云々

五月中旬下野國藤原に在陣せる大島圭介新兵を募らむと欲して若松に赴き松平容保に而して種々建議する所あり遂に意を達する能はずして藤原に歸る

〔幕末實戰史〕

(大島圭介傳)

愚案するに我が兵隊も初めは人数多かりしも數多の戰にて多くの上官兵卒を亡び追々微勢とありたる故新兵を募らざれば大功を建る事難し因つて會津に至り新規農兵募集の策を立んと五月十五日頃山川定藏と共に若松に赴きたり留守中の事務は大川、沼間、山瀬、天野、武藏、水島に托せり

初めて若松に至りし處當城下は四面に高山ありて鉢底の形を爲せり去れとも聞きしに優る繁華にて市中の人家一萬九千餘もありて不自由なる事ふし此の頃は別して繁昌市中にも娼妓體の者多く城東の天寧寺に東山とて温泉場ありて此節は諸國脱走人群衆し最も盛ふる由余は多事ふりしに因つて此の境に遊ぶ能はず遺憾不少

會津兩君に調し種々の愚衷を建議し板倉小笠原侯も日々登城ありて事務を謀れる由但し矢張因循姑息加之奥羽同盟の事成りしを以つて一體の人心大に弛緩せし形ありて建議せし件々も急には行はれず大に失望せり余は七日町の旅亭に宿せり工兵方吉澤勇四郎先頃より大平口に出で建築をふせしが此の頃若松へ出て來りし由にて同亭に宿し白河の動靜を聞き共に大息し事の危きを察せり越後の方は戰氣隆盛日々前進し不日越後一圓だけは手に入るべしと云ふ風聞あり若松表に五六日滯留藤原(鬼怒川ノ上流ナル鐵橋)に歸れり五月廿日と覺えたり藤原に還るに日光口の動靜を聞くに今市は土人去りて肥人來り肥藩の人員凡そ千人程と云ふ日光は往日に異ふる事ふし而して宇都宮の兵隊船主、玉生邊へ出張の報あり沼間其他勉勵して大原の曠原に胸壁三四個を築造せり

五月十六日上野の賊徒討伐の際踪跡を暗まされたる輪王寺宮を探索して届出つへしとの旨を示達せらる

〔江城日誌第八號〕



五月十六日

御布告書之寫

今度上野山内屯集之賊徒討伐之砌輪王寺宮御立退ニ相成行衛更ニ不相分候ニ付右御行衛相分り候ハ、早々可申出旨御沙汰候事

五月

五月十六日上野の殘賊を掃討すへしとの令達あり

〔江城日誌第八號〕

五月十六日

○肥後肥前備前筑前筑後伊州稻田之藩々へ御達之趣

昨十五日上野ニ而打洩し候殘賊掃除被 仰付候條指揮次第進擊可致候事

但今十六日四ツ時筋違門内へ相揃可致整列候事

五月十六日上野の殘賊掃討につき各藩の部署を指定せらる

〔江城日誌第八號〕

○昨十五日上野ニ而打洩し候賊掃除被 仰付候條各藩兼

而之持場吟味いたし精々可致盡力旨被 仰出候事

但講武所へ可相揃事

廣小路三枚橋邊

薩州

因州

肥後

本郷駒込根岸邊

備前

長州

佐土原

大村

肥前

道灌山谷中王子邊

藝州

伊州

筑後

淺草藏前邊

筑前

尾州

五月十六日上野屯集賊兵討伐に際し本藩兵の進擊方面及び負傷者等を總督府に申告す

〔江城日誌第六號〕

當藩隊湯島より黒門に進擊候様被仰付候間湯島より不忍池端黒門前へ進擊夫より分隊仕一隊ハ上野南手下谷より山内

五月

士分

深手

高山

秋藏

歩之者

同

千田

四郎左衛門

足輕

薄手

高野

庄藏

右昨日戰爭之節手統迄外小者ニ至迄死傷無御座候以上

五月

肥後

隊中

五月十六日上野の戦功を賞して本藩戦士に酒肴を賜ふ

〔明治三年  
御議控〕

寫

其藩兵隊不容易依盡力上野屯集之兇賊等連ニ令屠戮候條大儀ニ 思召因而不取敢爲一應之御慰勞目録之通被下候段總督府御沙汰候事

五月十六日

東海道總督府參謀

明治元年

六六五



肥後藩隊長中

一酒 五樽  
一賜 二十二連 以上

五月十六日長岡護美軍事及び國事上に關する意見を大總督府へ具陳したき旨を豫しめ輔相岩倉具視に申請す

〔一新録自筆狀〕

一軍事者當職之儀ニ付見込之趣大總督に言上右督府よりも專御示合せ被爲在候様被仰越度事  
一御處置筋之儀者職務ニ之無之候得共 朝廷之御爲存付候次第ハ三條公に申出御條理相立候様盡力いたし度奉存候間三條公に被仰越置度事

五月十六日本間殿を以岩倉卿に被成御差出候事

五月十六日豊後府内藩主大給左衛門尉は其の謹慎宥免に關し我藩在京吏員の斡旋せしを謝し物品を贈る

〔京都并返達御用狀扣〕

大給左衛門尉様當春以來御謹慎之處此度被免候付御謹  
懐中ハ私ども彼是心配仕候旨ニ而左ノ通

奥助 内山 又助  
押懸 本間 治兵衛  
林 新九郎

奥助 志垣 傳内  
右之通御使者ヲ以被下置候間此達段相申候以上  
五月十六日  
村上 彈助 殿

五月十六日輪王寺宮下尾久村の農家を出て忍びて江戸淺草に歸り東光院に入り給ふ

〔井上言彰義隊 附輪王寺宮殿下〕

翌十六日、早天、屋前の井戸傍にて鹽嗽を進め、朝餐として握飯に鹽をつけて捧ぐ（米は佐十郎方より送り越せり頗る精ざるも器物の如何にも不潔なるを以て、握飯となせり、長兵衛方より味噌汁）斯る程に、小銃の音各處に起れり、納屋より外を捲ぐ宮には稽古の爲とて一口二た口召上れり其の御用意の程恐れ入たり。周章して東西に駆け出だすさま、唯事面を覗くに、山内の僧侶、並に隊士と覺ぼしき者共、種々の物品器具を携へ、周章して東西に駆け出だすさま、唯事ならずと見えにけり、會々長兵衛伺候して、朝來官軍は、山兵衛隊の嫌疑ある家々には、容赦なく踏み込み、梁と床下の差別なく、鎗にて突き、又は鐵砲を放ちて搜索せり、聞ゆる銃聲は之が爲なりと、此の談話を聞きて、一行依に恐氣を懷き、淨門常應の兩院は竹林坊に向て、宮御方をば如何にして御守衛なさるやと切に詰問す（是より先き竹林坊申上る以上は、宮御方の御一身は、）豪放なる竹林坊も、此の時には默然として何等の返答を與へざりき、時に戸外にて配慮に及ばずと放言せるを以てなり。一御免なさい」と呼ぶ者あり、入口近く居を占めたる常應院は、直に何者なりやと反問す、彼、昨夜の案内者なりと答ふる儘、戸を開きたるに、火事装束の立出にて、精進鉢の折詰、四個を持參せり、此の時も其の身分を質したるに、喋みて云はず、然れども、中堂其他諸寺院の焼け落ちたる事より、目下坂本町へ延焼しつゝある事など、詳に報告し、猶淺草方面より當處迄の往來には、三町四方計り一面の水浸りとなり、深さ岷の邊迄に達する處あれども、其の深處には、笹を植て紙を結びて目標とせり、而して、官軍らしき者は一人も見受けずとの、彼の一言に、一行は何と云ふ譯もなく駈けるが如く納屋を出で、淺草へ赴く事とせり（中略）

此の日は連日の霖雨始めて霽れ、灼々たる曬影は惜げもなく新晴を放てり、（中略）宮の御一行は案内者に連れ、箕輪より太郎稻荷の脇に出で、往來少き間道を四方に氣を配りつゝ進ませらる、宮には日傘を持ち、草鞋を召して御歩行あらせられ、其の日の六つ頃（御着の節は）に淺草合羽橋なる、藥土山東光院へ御着、裏門より入らせられる、東光院



は竹林坊法類の住職なるを以て退かせらる、常應院は此處にて初めて彼の案内者に、密に宮御方なるを告げたるに、彼も亦初めて、山門御掃除御用を承る下谷竹町湯屋渡世にて彰義隊士にも懇親者多き塚谷事越前屋佐兵衛なる旨を白せり、依て常應院は金若干を慰勞として遣したるに、彼は生命を抛げ出し弾丸を潜り抜け、是れ迄御供したるは、金錢の欲しき爲に非ず、宮様の御難儀を見奉るに忍びざれば、先祖より七代山内の恩澤を享けたる萬一を報ぜん赤心に外ならず、金子は却て私より獻上致し度き位なりと、斷じて受けず、止むなく三僧協議し義氣の強きものは金錢を卑み、記念となるべき物品を喜ぶ事あればと、宮へ御伺の上、御召の御布と足袋とを賜りたるに、彼は非常に喜び、落涙して拜戴せり(本文中の括弧は原書の儘也)  
(本文中の括弧は原書の儘也)

五月十七日輪土寺宮東光院を去りて市ヶ谷自證院に到り潜匿し給ふ

〔井上言 彰義隊 附輪土寺宮殿下〕

宮の御一行は、東光院に一泊あり、翌十七日四ツ頃宮には竹林坊のみを随へ、劍客伊庭車兵衛の高弟にして、同院寺中たる正田二郎、加島新之丞の兩人に前後を警衛せしめ、東光院を出で、迂回するは却て嫌疑を受ける恐れありとて、大膽にも上野山下を通り、本郷より小石川水戸邸前を通ぎ、御堀に沿ひ市ヶ谷自證院へ成らせらる、(淨門院、常應院を出發せり)宮、自證院御滞在中は、表面上同寺の徒弟として其の御居間に宛たる所には、粗末の机に古びたる經卷を乗せ、座蒲團をも供へず、以て外見を掩へり、尤平生は院主の座室に在らせられ、重役以上の僧侶ならでは知らしめず、故に彰義隊の者共は勿論、上野山内の寺院と雖も知るもの絶えてなかりき、同廿一日竹林坊へは其の勞を慰め、且つ用事に托して夫れとなく御暇を賜はる(竹林坊は豪放洒落世間を揮らす聲高に談笑するを以て善匿)  
(は本文中の括弧は原書の儘也)

五月十七日宮堂上方の名義にて金錢を貸與し貨殖を計ることを禁止せられし旨布達せらる

〔王政復古帳〕

(五月十七日非藏人口並軍務官の細橋樁衆御呼出ニ而御渡之御書付並御口達書共寫とも五通の内)  
近來宮堂上方名目ニ而御貸附金ヲ稱シ取扱候向も往々有之候趣相聞へ以之外之事ニ候今般御一新之砌右様之儀は無之候筈ニ候自然右等ニ似寄候儀取扱候もの於有之は御取糺之上嚴重之御沙汰可有之候間心得違無之様被仰出候事

三月

右之趣先達而御布令可有之處御達し漏レニ相成候付更ニ御回達有之候事

過日御布令ニ相成候宮堂上名目ニ而貸附金ト稱シ候向者取扱之儀被止候得共右御布令ヲ口實ト致シ借請返辨不致ものも有之哉ニ相聞に以之前之事ニ候向後心得違無之様更ニ被仰出候事

但シ以前取扱來候分は名目金ト雖モ無故障返辨可致候事

五月

五月十七日諸國街道に私に關門番所を置くを禁せらる

〔王政復古帳〕

(五月十七日非藏人口並軍務官の細橋樁衆御呼出ニ而御渡之御書付並御口達書共寫とも五通の内)  
諸國街道筋ニ於テ私ニ關門或之番所等取達置候儀被停候事

五月

五月十七日國事多事の際諸事省略すへき旨を達せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕



〔五月十七日前橋侯家臣へ渡されたる五通の内〕  
國家多事之折柄軍資ヲ始總而莫大之御費用ニ付土木之功ハ勿論 朝廷御費用ヲ始諸事御省略被 仰出候事  
但大宮御所之儀者急速御造營被爲在候事

五月

五月十七日軍防局を軍務官と改めたる旨布告せらる

〔王政復古帳〕

〔五月十七日前橋侯家臣へ渡されたる五通の内〕

軍防局御印章從五月十日軍務官ヲ御改ニ相成候付御布告之事

五月十七日

軍務官

五月十七日軍資金上納には一萬石未滿の端數も計算すへき旨の令達あり

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

五月十七日於軍務局伊吹喜三太を以前橋様衆へ被仰出候口達御同方より被差廻

先月十九日被 仰出候軍資金之儀高一萬石ニ付金參百兩上納被仰出候處猶又頃日御評議之上萬石之上端高在之候分は

何萬何千何百何十石迄金錢ニ而上納可致旨被 仰出候

五月

五月十七日江府内の殘賊悉く退散せしを以て爾後私に襲撃すへからすとの旨達せらる

〔江城日誌第九號〕

各藩に御達之恩

當府内潛伏之殘賊最早退散ニ及び候條明十八日より各藩ニ而私ニ襲撃一切被差留候尤巡邏斥候之ものより賊徒見付次第書付を以中軍ニ可申出候臨機御指揮可有之旨被 仰出候事

五月十七日

五月十七日長岡護美早々東下して總督府に心を協せ舊幕旗下の士の鎮撫に盡力すへしとの旨に對し請書を進達す

〔王政日新錄〕〔熊本縣廳所藏〕

徳川慶喜謝罪之道茂相定既御處置可被 仰出之處旗下之士未鎮定ニ不到此儘被差置候而之 朝威不被爲立筋ニ付左京

亮儀當官を以早々東下仕御總督府に示合せ鎮撫之儀勉勵可致旨蒙 御沙汰候付而昨日於 禁中御委細被仰聞候趣奉畏

左京亮儀速ニ出張仕候様盡力可仕々奉存候此段御請申上候以上

長岡左京亮

五月十五日

重臣共

辨事御役所

右御届五月十七日秋吉持參森主計へ相渡

五月某日長岡護美關東出張中議定職心得を以て政務を處理すへき旨を命せらる

〔一新録自筆狀〕

〔辰五月廿七日大坂發國友堀田持參の書翰一節〕

長岡左京亮

今度出府當官御用向者勿論今日より關東御用濟候迄議定職同様之心得を以於政事向茂執掌可有之事

五月

明治元年



〔前略〕  
 一左方亮様關東鎮撫として御出張ニ付而之議定同様之御心得ニ而於御政事向も可被成御執掌旨御沙汰之趣別紙寫是亦差  
 進中候今日之形勢御根本を被堅候儀御急務ニ可有之御心付之儀者無御伏藏御建言等も可被爲在御事と奉存候且又御東  
 下として去ル廿四日より御下坂之處航海之御船も無之第一御會計必至度御差支彼是ニ而無餘儀御滯坂ニ相成居申候儀  
 關東大破と申儀夷船報告も有之實證探索之爲一昨夜より牧平左衛門列四人兵庫に被指越置候事ニ御座候拙者儀も御先  
 ニ出張之旨ニ而致下坂候得共右等之次第ニ而未タ相滯居申候内外無類之繁雜ニ而不能委曲要事迄勿々申縮候以上〔本  
 前略〕  
 五月廿七日

尾藤金左衛門

御家老殿  
御中老殿

五月十七日佐渡鎮撫使參謀津田山三郎は佐渡への渡航を止め北陸道の參謀として勤仕すへき旨  
 を命せらる

〔津田家家記〕

閏四月高倉四條兩卿隨行ニテ汽船ヨリ越後ニ赴キ同五月高田へ到着ノ上兩卿ヨリ左ノ通り達セラル

津田山三郎

右者此度當表戰爭中ニ付佐渡表へ參勤之義ハ太政官へ御斷申上候間諸向議定迄先規定之通參謀職無服藏自分見込ヲ以  
 テ可相勤者也

五月十七日

五月十七日毛利敬親上京の途次大坂に到る

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

五月廿四日 原田九郎兵衛より 六月四日着

一筆致啓上候、

一左之御方々様此許御着坂ニ付例之通御安否伺之奉札彼方様御留守居ノ迄仕出申候

去ル十一日爲御歸邑御着坂

中川修理大夫様

去ル十七日爲御上京御着坂

毛利大膳大夫様

五月十八日先きに上野山内攻撃に参加せし各藩兵隊の觀兵式を行はせらるゝ旨大總督府よりの  
 令達あり

〔明治三年 兪議控〕

上野山内討伐之節戰爭相働候藩々兵隊明十九日整列御覽被仰出候條辰半刻大下馬前ニ而相揃旨御沙汰候事

大總督府

五月十八日

下參謀

五月十八日我藩各處に派遣せしめたる兵員數調書を軍務局に提出す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一軍務官

一銃隊

四拾九人

一指揮官

右徵兵

内壹人隊中取締役兼帶

一徵兵教授方並助役之者

二人

明治元年

六七三



右依御達差出申候

- 一 惣帥 壹人
- 一 番頭 四人
- 一 物頭 拾九人
- 一 司令士 拾壹人
- 一 銃隊 六百三拾五人
- 一 役付 二人
- 一 大砲輜重持夫 百人
- 右關東出張
- 一 惣帥 壹人
- 一 副士 壹人
- 一 銃隊取締役 四人
- 一 醫師 壹人
- 一 銃隊 五拾四人

右久我大納言殿大和國鎮撫爲御總督御發向ニ付依御達御警衛として出張

五月十八日奥羽鎮撫總督九條道孝陣營を秋田に轉せんと欲して仙臺を發す  
〔防長回天史 第六編上〕

奥羽鎮撫使ト奥羽同盟(抄略)

- 一 番頭 壹人
- 一 物頭 五人
- 一 重士 五拾壹人
- 一 司令士 四人
- 一 銃隊 二百拾九人
- 一 徒士 拾三人
- 一同役 百八拾人
- 右千生邸詰込
- 一 四百二拾四人
- 右左京亮上京之供連
- 一 肥後國天草島並豊後國日田表に非常爲警衛人數差出置且豊後國速水郡大分郡直入郡國東郡當分取締所に人數差出置候得共何れも員數相分不申候
- 右之通御坐候

五月十八日 細川越中守内 内 山 又 助

十八日(五)總督府ハ仙臺ニ藩ニ左ノ如ク達ミ蓋シ數日來物議沸騰總督一行ノ轉陣ヲ遮ラントスル者アリシヲ以テナリ今度羽州秋田ニ轉陣ノ所人心洵々疑惑之念ヲ生シ候由右ハ深キ存慮有之事ニ候間諸藩一統致鎮撫違奉朝命候様屹度傳告可有之者也

同日二卿(九條總督)以下仙臺ヲ發ス佐賀小倉ニ藩兵其前後ヲ護衛シ仙臺兵更ニ其前後ニ隨フ  
五月十八日本藩小笠原美濃下津休也に財政改革を委任す

〔機密間日記〕

五月十八日

小 笠 原 美 濃  
下 津 休 也

右者於御城御兩殿様御前ニ被召出今度 朝廷之御趣意を奉し萬民撫育兵制變革之筋ニ至候迄國家之舊弊一新致候儀も是迄通之會計不調ニ而之寸分茂 思召通被届兼候付御勝手練等之儀美濃休也に被遊御委任候依之兩人共涯分丈差入古例舊格を茂斷然相改時勢相當之處置いたし速ニ富國強兵之場ニ至候様御直ニ被遊御沙汰候事

五月

五月十九日我藩兵白川城應援として出征を命せらる適々兵食缺乏して困憊せるを以て之を辭す  
〔一新録探索報告〕

(慶應四年五月御勘定所取賈土彌一郎書取一節)

一同十九日奥州白川表應援として出張被 仰付候御達有之差寄御用金も乏敷其手當拜借之儀願出居候へ共未タ御沙汰無之彼地者官軍を不好會津を願望スルノ土地兵食等之儀如何可有之哉下地疲困之御人數今度こそ責而御渡方ニ而も有餘

明治元年



を付ケ不申而者中々難堪次第ニ付七八千金者此等之入費可有之人足廻も大砲運轉六ヶ敷肩上ニ而運ひを付候間兩大砲手ニ而貳百位者入可申彼是見頁候へハ五六十日之積ニしても貳萬五六千之金無之而者甚々心細ク誠ニ當惑之次第 惣督府より拜備之一條不被行時者出兵之氣力無之一統御斷之外無之如何治り可申哉

五月廿一日夜半認

齋

土拜

〔淺井鼎泉記録〕

一奥州白川應援御斷の事は不首尾にも相濟候得とも更に横濱向地一圓井ニ甲府等の守備被命候ニ付御人數の中を夫々手分して被差越候事と致候此時分御先手には軍用金に欠乏を告候間御用達中井新衛門千場太郎兵衛其他都合五人より金五千兩借用致し又玄蕃様にハ此迄茂木御在城の處御家臣被差越御上京被成度旨御相談有之候に付早々御上京可然旨御勸申上候處直に御發程被爲在金五千兩爲換取計方御依頼相成候ニ付爲換取組右の御金ハ京地に於て御引渡可致段京都の其向に申越し其金をも差寄の御手當に流用致し彼是にて凡そ壹萬餘兩の現金出來致候間一時ハ大に都合を得申候其後住江甚兵衛轟應助列江戸到着の際金壹萬兩御國許より送金有之候ニ付是にて現金貳萬餘兩と相成候之を二月十二日以來御國許より送金ありし始と致候初江戸到着の際御留守居方より引續きたる殘金壹萬兩餘有之候ニ付之に中井列りの借用金五千兩玄蕃様の爲換金五千兩住江列の持越金壹萬兩京都出發の際持越したる貳萬五千兩を合すれハ都合五萬餘兩と相成候此五萬餘兩にて京都出發以來五ヶ月間の凡の取賄致したる事故隨分骨を折申候幸 朝廷より兵員の舎營料丈ハ御取賄有之候付辛ふして事濟申候此會計の事に付ては齋土彌一郎列會計方一同不怪心配致し候

五月十九日我藩砲隊長安田源之丞甲府に在りて鎮撫使附屬となり掛川藩兵を督して八王寺へ出張を命ぜらる

〔安田家 肥後 明治元年關東征伐事件覺書〕

五月十九日至意御本營へ出張スヘキ旨參謀局ヨリ達アルニ付直ニ出張セシ處掛川藩八王寺へ出張ニ付其方被差添取補向同藩隊長ト申談シ精々差配可有奮勵盡力旨副總督御沙汰ノ達章渡サル夫ヨリ柳原卿ニ謁シテ出張向ノ處留筋等具サニ拜進ス畢テ御直ニ左ノ辭令ヲ下附セラル

自今可爲附屬トノ御朱印ナリ

五月十九日日本藩京都留守居役内山又助をして金札借用願を提出せしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

會計官

今度金札御製造之上列藩石高ニ應シ萬石ニ付壹萬兩宛拜借被仰付候間可願出旨御達之趣奉長候越中守領知高五拾四萬石被下置候付右之割を以拜借可奉願處此節者先拾六萬五千兩拜借被仰付被下候様奉願候殘分之儀者猶追而拜借可奉願と奉存候尤返納方之儀者御達之通無相違上納可仕候左候ハ、御仁惠を以富國之基礎相立候様可仕と難有奉感戴候且末家細川若狹守細川豊前守儀者宗家領分内分之儀ニ付別段拜借不奉願越中守拜借之内より夫々分配可仕と奉存候以上

細川 越中守

内山 又助

五月十九日

五月十九日伊達宗城は書を長岡護美に致して意見の交換を需む

〔子爵長岡家文書〕

馳拙格得貴意候運句之水害實ニ可懼之至何分放晴所祈先以 皇上益御機嫌能被爲涉乍憚御同情奉恐悅候隨而彌御雄勝可被成御勤務爲朝野并賀之至存候今朝小松出局にて承候得者彌江戸表へ御進發之由薩阿柳河モ同様との事定而御多忙と察入候此度社實ニ長良再生之振機靈策御施運不日平定上ハ被爲安寂慮下ハ可被救蒼生之苦 朝權赫々諸外國人モ寒

明治元年

六七七



心スル也官軍全勝不日可被奏と存候全體此大決斷四月頃ニ有之候ハ、今程ハ全治可期聊遺憾之至乍然是ハ無用之儀自是更始ニ存候將又徳川氏ハ龜之助へ繼續被仰付江戸城ニ居住封地百十萬石と申に僕下阪迄ハ 廟議密決之處自ら關東形勢今日ニ至變體之儀有之故に移封亦滅地之再議ニ至候半歟と相察居候且亦足下ハ先ツ久敷留東之儀候哉此度四藩合義軍如何程之兵隊ニ候や伺度候

○僕考にハ此大水害ニ當り陸之進軍ハ費日數費金銀如何ニも無益他藩とも何れ被於足下而は航海被成候方費且勞を省可然かと心中存候分任舊知己及吐露候此他中陳度心緒萬護候得共御繁務と存候故省略期後音候勿々敬白

五月十九日

伊 豫 守

左 京 亮 様

机 下

二仲時下御自重專念存候音曲箱井關齋右衛門よりよふノ一ツ入手近便可相廻と申越候處御進發御留守ニ相成候ハ、如何可致御歸京迄預り置可申や御報可被下候僕モ不存懸外國知事被仰出候處愚輩難當不堪恐悚候故辭表差出置候處今日迄御聞□之儀不被仰出痛心惱慮此事候加之從三位宰相被任叙候趣是又深く畏入恐縮之至ニ付御猶豫願上置候不他儀ニ付敷願通早々相整候様御周旋所希候已上

五月十九日官軍越後國長岡城を抜く

〔一新録探索報告〕

（七月三日附在江戸本藩吏員北野角太郎より在熊本機密開吏員宛の書翰に添附せる別紙の内）

越後三條迄差遣候飛脚同所迄兼長岡ニ而致用辨歸候

一先月（五）十九日長岡落城後官軍方三條邊まで進軍枳尾茂乘取候處出羽より米澤三千人庄内千五百人長岡殘兵共惣合而壹萬四千人所々ニ而日々戰爭三條邊ハ勿論枳尾之儀も北軍ヲ取戻し此方ハ長岡より半里計八田ト申處ニ而對戰之由

一官軍ハ長陣故軍用不自由之事

一薩長松代ハ強兵ニ相見へ候得共其餘ハ難儀之様子

一會人數ハ長岡落城之後ハ擾々ニ而防戰いたし勇兵之由其上米澤庄内等新手之大軍相加候故官軍茂難儀ト申方

一長岡落城之節村松手引有之候由ニ而同城侯に懸合候處ニ心無之趣ニ而家老二人切腹ニ而相濟候由

五月廿日日本藩兵大和鎮臺守衛を免せらる

〔王政復古帳〕

五月廿日軍務官より御留守居御呼出ニ而御渡之御書付寫

肥

後に

其藩大和鎮臺守衛被免候旨御沙汰候事

五月

五月廿日日本藩軍資金上納期に至り故ありて果さず仍て猶豫請願書を提出す

〔王政日新録〕熊本縣廳所藏

今度軍資金被仰出當月上納之分は廿日迄ニ持參可仕旨御達之趣奉畏候依之越中守領知高之割を以今日迄ニ相納候筈ニ而金子調達之儀大阪表に申遣置候處近日之霖雨滿水ニ而金仕登來不申何分今日迄之上納出來兼候間何卒御猶豫奉願候尤到着次第早速相納可申奉存候且末家細川若狹守細川豐後守儀茂宗家領分内分之儀ニ付是又一同相納申管ニ御座候此段も御聞置可被下候以上

細川 越中守内

内 山 又 助

五月二十日

明治 元年

六七九



陸軍御局

五月廿日日本藩世子護久議定職を免せられ且つ上京を促かざる

〔王政日新録〕熊本縣 廳所藏

御用有之候間只今早々非藏人口に出頭可有之候也

五月廿日

辨事役所

細川右京大夫殿

重臣中

尾藤金左衛門罷出候處左之通之由

細川右京大夫

議定職被免候事

五月

御用有之候間只今早々非藏人口に出頭可有之候也

五月廿日

辨事役所

細川右京大夫殿

重臣中

右之通之御呼出ニ而御座候處内山又助御供ニ而出方ニ相成居候付名代ニ而相勤候處左之通御書付御渡ニ相成候事

細川右京大夫

御用之儀有之候間兼而被仰付置候通早々上京可有之候事

俱京都表ニ於テ被仰付候御用之儀ニ候間此旨相心得可申事

五月

〔一新録自筆狀〕

慶應四辰五月廿七日浪華發之早打國友半右衛門堀田慎之允持參世子君召之事(尾藤金左衛門より政府當の書翰)以別紙申達候若殿様議定職被免且御上京御促之儀付而之御書附於御所御渡ニ相成候處左京亮様御下坂ニ差臨夫々手數も整兼居候付態と今日より國友半右衛門堀田慎之允を早打引返ニ而御國許に被指下候間右御書付寫差進申候於京都之御用筋者御親征供奉可被爲蒙仰哉と相考申候得共未々聡と相分不申候御國事御多端之砌間茂無御登京と申候而之御國計等之儀如何可有之哉と奉存候得共何様前文之通ニ而之御登京不被在候而之難相叶時宜ニ付於御國許御評議被成候様奉頼候左京亮様よりも御直書且國友堀田兩人に委々被仰含之趣茂被爲在候由ニ付直と御承知可被下候

五月廿日參與横井平四郎從四位下に叙せられたる旨を郷里の友人に報す

〔彌富文書〕彌富能太 氏所藏

一書拜呈仕候御兩家愈御安康珍重ニ奉存候隨而小拙事何之さし障りも無御座上京仕御休意可被下候先以出立前ハ何角御世話ニ罷成千萬忝々拜謝難申盡奉存候爾後宿本萬端御世話被成下乍此上幾重ニ茂御依頼萬々奉希候小拙此節大政官御改正格外之御拔擢被仰付從四位下ニ拜任匹夫之身誠ニ未曾有之天寵を蒙り實以奉恐入候依之位階之當分御受難申上御役所御預申上置候段々承り合候處御斷之決而罷成不申候由ニ付甚以當惑罷在候御推察可被下候新堀隱居出立後も寛りと到留之由何角御配意と奉存候其後之病氣も次第ニよろしき様子ニ承り悦入申候誠ニ繁雜甚敷晝夜寸暇無御座候此段迄呈上い才之儀之宮川立歸沼山ニも參り可申候御承知可被下何も大略仕候以上

五月廿日

小楠拜

明治元年



千 左 衛 門 様 (彌富千)  
大 君 (桂大支)

五月廿日日本藩安田源之丞我大砲隊に離れ掛川藩兵を督して八王寺へ出張す

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

五月二十日 八王寺表出張被命タルニ付大砲隊ヲ離レ將來ノ意見アルヲ具シテ森彌左衛門其他一同ニ申繼キ相別レテ  
出發ス

五月廿日既肥藩兵甲府城警衛の爲め京師を發す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔五月廿六日京都立早打飛脚六月四日熊本藩持參書類の内〕

五月廿日

一伊藤左京大夫様方以奉札、左京大夫儀ニ條御城東御門御警衛 御免甲府城御警衛被 仰付候付出張人數今日御當  
地發足爲致候右御知被申上度各様迄宜得貴意旨申付候

五月廿日林忠崇兵を率ゐて箱根を侵し小田原藩の兵を追ふ尋て戦利あらず海に航して陸奥に逃  
る

〔近世史料編纂綱例〕

十九日(五)林忠崇沼津ヲ脱シテ箱根ニ赴ク

二十日林忠崇等箱根ヲ侵シ軍監中井正勝ヲ殺シ三雲種方ヲ追フ

廿七日小田原藩兵箱根ノ賊ヲ討ツ林忠崇海ニ航シ陸奥ニ逃ル

〔中村水雲事蹟〕

(第十回の一節)

斯くて平井城之介(中村六藏)は雲井龍雄に別れて光善寺(東京芝白銀米澤)を辭し再ひ身を潜めて行々大磯に到れば此時  
恰も幕府の脱走人林昌之助あるもの二百有餘の兵卒を率い箱根の山中に於て小田原藩兵と勇戦し一時は頗ぶる勝利を  
得たるも西軍大舉して小田原藩兵を助け昌之助は遂に收斂し東に向つて走れりと……  
故に箱根の地は正に修羅叫喚の巷とあり旅人の行通頗ぶる危険なりと傳ふ

五月廿一日江戸上野山内の徒誅伐の報昨日京都に達したるを以て諸藩に對し勉勵協力平定の功  
を奏すへき旨を達せらる

〔一新録自筆狀〕

(前略)

一辨事御役所方前橋様に御渡ニ相成候御書付別紙一通御留守居方相達候付差進申候  
右之趣爲可申達如是御座候以上

五月廿七日

尾 藤 金 左 衛 門

御 家 老 衆 中

御 中 老 衆 中

辨事御役所方之御書付左之通

德 川 龜 之 助

過日以来旗下末々心得違之者云々(五月十四日上野屯集の徒誅伐に關し德川龜之助に示達の條に出づるを以て茲に之を略す)

明 治 元 年

六八三



別紙昨日大總督宮方奏聞有之實以不容易形勢深被爲腦 宸衷候付彌以勉勵協力 皇威を宣布し天下平定之功を奏候様可致旨被出候事

五月

五月廿一日我藩兵の大坂に在るものを關東へ急派すへき旨長岡護美に命せられ且つ軍旗一流を下賜せらる

〔一新録自筆狀、江戸京都來狀扣〕

自慶應二年至明治三年

以別紙申達候今度左京亮様關東御出張被爲蒙仰候付御先手御人數出張等之儀去ル廿一日別紙之通御達有之候則寫之通差進申候此段爲可申達如是御座候以上

五月廿七日

田中八郎兵衛  
尾藤金左衛門

御家老宛  
御中老宛

此別紙ハ御沙汰書帳にキ六有之候

五月廿一日軍務官御書付を以御達

長岡左京亮

江戸上野邊に屯集之賊徒暴激至らざる所なく去ル十五日より御誅伐相成候段昨夜大總督宮より申來候就而之今度之出兵之内先手人數在阪之由候間其分ニ而茂至急ニ差出候様分而 御沙汰候事

五月

五月廿一日辨事方御留守居御呼出ニ而勘解由小路右中辨様方御渡之御書付

長岡左京亮

右兼而東行被 仰付置候處彼表既ニ開兵端候段報告有之別而至急之場合ニ付差向滯阪兵出張致候様被 仰付候事但軍艦之儀之軍務官之差圖ヲ可受事

過刻申達候先手人數薩州に御預之軍艦より可被差廻候此旨申達候以上

五月廿一日

追而萬端薩州に引合可致候事  
坂封ニメ上ハ書

軍務官

肥後

留守居中

〔一新録自筆狀〕

慶應四年五月廿七日京發他筆狀之内

以別紙申達候左京亮様今度關東御出張ニ付去ル廿一日阿野中納言様を以御旗一流御渡ニ相成申候此段爲可申達如是御座候

五月廿七日

田中八郎兵衛  
尾藤金左衛門

長岡帶刀殿外家老  
中老宛

五月廿一日松平慶永其臣松平貫之助水野小刑部をして參與横井平四郎を訪ひ關東の事を探らしめ且つ書を岩倉具視に贈りて意見を陳す

明治元年



〔三條實美公年譜〕

是夜(五月廿一日) 松平慶永直臣松平貫之助水野小刑部ヲシテ參與横井平四郎ヲ訪ヒ東事ヲ探ラシム既ニシテ書ヲ具視ニ呈シテ曰

至急之用事ニ付昨夜中只書岩倉公閣下候御關東報知之御書而江城日誌等拜見仕候右者中御門卿ヨリ相廻リ申候直ニ阿州黃門へ遣シ候此邊之儀ハ明日參朝之上萬々御議事之節可申上ト奉存候扱又兼テ横井平四郎へ手寄候家來之者今夕横井へ往訪之處肥後藩人十七日頃横濱出立之者今日着之由十五日曉ヨリ十六日迄モ江戸之方角ニ當リ大火之趣全ク兵端相開キ候事ト存候由十六日夜ヨリ十七日曉ニテハスヘテ鎮火之様子全ク官軍御勝利ニモ可有哉之由且又安場逸平ナル者肥後藩ニテ江戸へ朝六日立ニテ是又薩船ニ乘組今夕着京江戸之事情官軍ニ屬シ民權密心得居候者ト存候大略之處家來承リ歸リ申候大略故能分リ不申候何分ニモ明日長岡左京亮に被命逸平官代へ呼出關東之形勢言上致候トカ又ハ倉公御宅へ御呼寄御聞ニテモ宜右兩様之内被成候ハ、御宣ト存候今後之御處置出兵被仰付候御模様ニモ東國詳悉之形勢御承知之上ニ無之候ハテハ犬牙之事モ可出來哉ト奉存候此段不願恐懼任心付例之應急奉言上候也恐惶謹言

五月廿一日第十字

慶

永

右 兵 衛 督 殿

五月廿一日松平慶永は我藩安場一平が關東の事情を齎し京都に來たりしを聞き所感を略叙し之を長岡護美に致す

〔子爵長岡家文書〕

昨夜中至急之所用呈閣下候先以梅天鬱々今日も沛雨如盆傾き候先以閣下愈御清勝奉敬賀候扱ハ本月十五日拂曉封發之

三條公御書狀昨夜岩倉公へ相達今夕廻覽相成申候小生被讀之處十四日徳川龜之助へ上野御討伐之御達有之加之輪王寺宮へも御立退之事被仰遣候て翌十五日卯之刻より官軍進撃之模様ニ御座候尤條公より被廻候江城日誌ニ委細認有之候事ニ候何レ明日參朝之上得拜顔萬々御話可申心組罷在候處夜陰ニ至リ修理罷出何事ソト承候處兼而小楠へ手寄居家來多小楠方へ來訪對話中へ安場一平江戸より歸リ江戸事情大略承リ申候即家來より修理へ相囑修理より承知仕候所ニテハ江戸事情頗詳悉ニテ一平之所言條理明白初テ得信實之確報胸中判然申候殊ニ尊藩之事ニも候故明朝早々一平被召寄候て關東之事情飽マテ御聞糺被成下候テ一平を官代へ御召連レ岩公へ被仰上候トモ一平より言上爲致候而も兩途何レ之道ニても御見込を以被成候ハ、宜かと奉存候此度之兵事は伏水一舉之一六勝負ニハ相濟申間敷候何分早ふ平定第一と奉存候至急早々申上候頓首

五月廿二日

慶

永

長岡 左京亮閣下

五月廿一日長崎府浦上村の耶蘇教徒百十四人を捕ふ

〔慶應三年探索書扣〕

六月報知略

- 一 浦上村天主堂此迄三四ヶ處相立置候を昨夏取除ニ相成其後何時もなく民家ニ密々竝立事如左
- 一 里之郷下土井 友 八 一同坂下山ノ中 次 助
- 一 同 下ノ宿 松 藏 一中之郷 松 五 郎
- 一 本原郷平 又 市 一同辻 千右衛門
- 一 家之郷馬場 市 三 郎 一同 元 助

明治元年

六八七



以上八ヶ處各一間之内を天主堂と定メ耶蘇野死之像を天井か糸にて釣下ケ日馬利亞耶蘇を抱ける像或ハ摩西以來之像を安置致候

一浦上村鎮守として官府カ

大神宮之社を立候を邪徒兩人申様若成就ニ相成候時ハ忽チ打摧キ可申と依之右之兩人御檢ニ相成可申筈ニ候

一五月廿一日朝官府カ邪徒百十四人呼出ニ相成三藩に御預ケ之旨被申渡同日八ツ時出帆ニ相成候其節最早今度天主堂之拜も終そと一同に「我父天ニマシマス、デウスサマ、リウス、リウヒ、ヒーリウス、スベテサントス、ミニモ一テ、アメン」等ト唱テ禮拜セリ

一浦上本原郷又市ト申者も被召捕候依之近邊之者家内ニ挨拶ニゆき氣之毒ト申候得者家内申様之私亭主之餘程デウス様之御氣ニ入ニテ此度之早く天堂ニ生ませうと喜居候ト申候（此報知書に記名なけれども同探案書扣中奥に觸込みたる報告書と参照すれば此も本願寺長崎出役唯寶寺良爵の書なるへし）

五月廿二日上野山内の賊徒既に掃蕩せられしかと猶ほ各地不穩の狀あるを以て各藩更に兵備を嚴にして出兵の命を待つへき旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

前橋公鎌田才吉より廻狀を以今廿二日非藏人口ニ而五辻彈正大弼殿を以御渡之御書付可及順達旨被仰渡候付御順達申候との廻狀一通

在京

諸藩に

江戸表旗下末々心得違之者寛仁之御趣意を不奉拜戴主人慶喜恭順之意ニ背キ謹慎中之身を以脱走ニ及び上野山内其外屯集官兵を暗殺し民財を掠奪益兇暴を逞し官軍に抗衛し實ニ不救之國賊ニ而不被爲得去ル十五日御誅伐被 仰出候

段大總督官より被及 奏聞候間各藩又兵備を嚴ニして重而之 御沙汰可奉待旨 御沙汰候事

五月

五月廿二日本藩廣田貞右衛門願に依りて刑法官判事試補を免せらる

〔王政日新録〕（熊本縣廳所藏）

御用候間唯今早々非藏人口へ出頭可有候也

辨事 役所

五月廿二日

細川 越中 守 殿

家來中

右之通ニ付小暮罷出候處去ル九日廣田貞左衛門茂刑法官試補御斷願書被差出置候處被 聞食候段御付札を以大原左馬頭様被 仰渡候事

但委細ハ參與帳御届之座ニ扣有右御付札之本紙ハ早速御奉行に相達候事

五月廿二日長岡護美は自己の決心及び軍令を本藩出征隊長等に示す

〔一新録自筆狀〕

以別紙申達候今度左京亮様關東御出張ニ付去ル廿二頭々に御渡ニ相成候御書並御法令寫と茂三通差進申候此段爲可申達如是御座候以上

五月廿七日

田中 八郎 兵衛  
尾藤 金左衛門

明治 元年

六八九



御家老殿  
御中老殿

今般關東出張蒙 御直勅候ニ付而者鎮撫筋専ら盡力いたし暴威ヲ張り抗官軍之輩ニ於而者奮然討伐可奉報 朝恩覺悟ニ候條此旨相心得可被抽忠勤者也

五月

長岡左京亮

法令

- 一營中は申ニ不及旅宿たりとも諸事嚴肅ニ相心得猥之遊行且喧嘩口論等仕間敷事
- 一酒長し中間敷事
- 一亂妨狼藉之振舞有之間敷事
- 一進退行止一隊々々列を不亂乗船上陸之節茂先手より番順之通無混雜様相心得可申事
- 一分捕は軍功之證左といへとも戰場ニ落散或は空營ニ捨置たる品を取歸賞を貪候様なる不廉之所行堅有之間敷事
- 右條々堅可相守もの也

慶應四年五月

別紙

於軍中分隊之節は一隊之隊長に委任いたし候條臨機之所置研究いたし指揮行届候様心懸可申萬一心得違之者有之おるては屹度軍法ニ可被處候

五月

長岡左京亮

五月廿三日來廿五日楠正成の祭典を執行せらるゝ旨の達あり

〔王政日新録〕(宛本縣 應所藏)

(五月廿三日前橋藩留守居より我藩外六藩へ廻達書付)

來ル二十五日就桶中將祭日於河東練練場假ニ神座を設ケ祭典式執行被仰出候事

右ニ付從辰刻申半刻迄之内諸官參拜可爲勝手事

一右刻限之内諸人參拜御免被仰付候並有志之輩詩歌獻供且諸兵隊之練練備神覽候儀御免被仰付候事

但神前詰之者に夫々相斷不及混雜様可致事

右之通被仰出候事

五月

五月廿三日丹後宮津藩主本莊宗秀等有恕の恩命あり

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(五月廿三日非藏人口ニ而前橋藩鎌田才吉へ五辻彈正大弼を以て御渡之書付)

本莊伯耆守

本莊彈正忠

差扣被免候事

謹愼被免候事

五月

五月

五月廿四日德川龜之助を駿河國府中城主に封し一橋田安兩家を藩屏に列せられ且つ上京を命せらる

〔江城日誌第十一號、京都并江戸返達御用狀扣〕

明治元年

六九一



五月廿四日

德川龜之助名代松平確堂一橋大納言田安中納言へ御渡  
ニ相成候

勅諭之寫

德川 龜之助

駿河國府中之城主ニ被 仰付領知高七拾萬石下賜候旨  
被 仰出候事

五月

但駿河國一圓其餘ハ遠江陸奥於兩國而下賜候事

五月

一橋 大納言

自今藩屏之列ニ被加候旨被仰出候事

田安 中納言

右同文

右三通三ツ折同紙上包

德川 龜之助

今般家名相續被仰出候ニ付爲御禮上京可致候事

五月

一橋 大納言

今般藩屏之列ニ被加候ニ付爲御禮上京可致候事

田安 中納言

右同文

五月

德川家臣之輩自今官位之儀被差止候事

右者御對面所ニ於て大監察三條左大將殿より御渡ニ相  
成參謀西四辻殿并下參謀軍監列座之事

〔松平春嶽公編維新前後逸事史補〕(宇野所藏)

一朝廷より閏四月二十九日余か甥なる田安中納言慶頼の嫡子龜之助を以て德川氏を繼かしめ七十萬石を賜ふ(編者云田安  
川氏を繼かしめられたるは閏四月二十九日にて  
祿七十萬石を賜はりたるは五月二十四日の事也)

一德川の八萬石と云ふは草高にして現石三百貳拾萬石なり七十萬石を賜はりたるも矢張草高なり

一爰に一つの議あり百萬石を賜ひて江戸城を其儘賜ふと云ふことあり又駿遠參の内を七十萬石になさんと云ふことあり

百萬石にて江戸城を賜ふは德川家にとりては大に不幸也將軍の任もなく兵馬の權もなくして江戸を所有することは逆  
も持堪へかねるは顯然たり此事は西郷より勝安房大久保(翁)に請せしと勝大久保は七十萬石にて駿遠參を賜ふ方大に  
よろしとの事にて如斯極まれりと決して彰義隊の暴舉に付七十萬石に減しられしと云ふは無根の妄説也德川家へ七十  
萬石賜ふ杯のことは我々議定の評議には係らず全く西郷大久保木戸等岩倉三條等の御内評議也余が此に記載せしは凡  
説を以て記すものにして信偽は保證しかたしと存候へとも多分は間違ひなかるへし内々其筋より承りたり明治史要を  
見て知るへし

五月廿四日萬石以下の領地並に寺社領の所屬を定めらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

(五月廿四日前橋藩鎌田才吉ヨリ廻達セル同日御渡の書付)

以來萬石以下之領地並寺社領共其國之最寄之府縣ニ而支配可致事

五月

右之通被仰出候間未々迄不洩様相達可申事

五月某日軍兵催促の爲め上京中なりし大總督府副督正親町公董關東へ下る

〔一新録探索報告〕

(五月廿六日附木藩近藤信之助書の一節)

一正親町殿以下公卿一兩日前關東に御發途之由

五月廿四日長岡護美京都を發して大坂に到る

〔一新録探索報告〕



慶應四年五月廿七日京發機密問御物書下廻全廿七日御國元は急成御用有之堀田恒之允國友半右衛門に御飛脚番被差添早打引返被差立候付拜呈仕候

左京亮様今度關東御出張として御下坂去ル廿四日六時之御供揃ニ而壬生邸被成御發途即夜六時分大坂御屋敷に被成御着奉恐悅候是方先御發船之都合等末一向相分不申御供之面々之勿論小坂組(小坂大八組五月十六日)杯茂御東下御宜カル間敷く別紙稜書(見當)ニ茂顯置候通議論紛々ニ而如何相納り可申哉關東大破ニ及候段是又稜書之通ニ而未タ確證ハ得不申候得共左も相成居候ハ、彌以御成功之道無之何ぞニ歩々付申候哉日夜苦心萬々ニ御座候差向難澁之ものハ御舟一艘茂無之各藩之船茂一艘茂參居不申異人之船茂思々敷無之豐夫ハ御手ニ入候而も御銀稜書之通ニ而逆茂被行申事ニ無御座候勿論今度之御入費之 朝廷方御出金ニ無之候而之相成不申事ニ候得共是以一錢茂無之唯今分ニ而之先御東下之處如何相成可申哉々奉存候

一今度御出張ニ付而ハ三番組(下津籠)尤議論沸騰ニ而下津殿ハ説合兼只々下津殿押付勝手ニ相成候由ニ而組中甚憤懣已ニ壬生邸押出之節頭ニ壹人も時宜致不申位ニ而事ニ成候ハ、双方共甚懸念之趣ニ相唱申候

一左京亮様ニ茂如何尊慮被爲在候設此元迄御踏出ハ實ハ京地ニ被成御座候ハ、只々御出張を促し何分御滯京ニ而ハ御都合惡敷候付御下坂ニ而得斗御評議之筋ニ而御座候處御先手人數御繰出之命下り候付別紙稜書之通金左衛門殿御人數分隊ニ而出張ニ相成候處御艦無之其儀茂整兼今更當惑至極此末如何御所置を被付候哉々奉存候(中略)

右之外錄上之儀茂御座候得共何分不能愚毫猶進退相究候處ニ而ハ猶御左右も可有御座其節ニ讓開筆仕候以上

五月廿七日(本書六月四日夕能本稿)

丈 之 助 源 藏

機密問

御物書中様

五月廿四日辨事役所に於て中川大炊より輔相岩倉具視の我藩世子護久に與ふる親書を留守居内山又助に交付す

〔王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

御用之儀候間唯今早々非藏人口へ出頭可有之候也

五月廿四日

辨 事 役 所

細川右京太夫殿

留守居中

今廿四日辨事御役所方御呼出ニ付罷出候處若殿様は岩倉様方之御直書入白木文箱壹ツ中川大炊を以御渡ニ相成急便方相達候様被仰渡候付則相達申候以上

五月廿四日

内 山 又 助

村 上 彈 助 殿

五月廿四日參與横井平四郎禁中玉座及び議定參與等出仕の狀を在熊の家族に通報す

〔小楠遺稿〕

先月廿一日之御狀到着難有拜見仕候時益御機嫌能奉恐悅候隨而私事相替り不申御安心可被下候先日宮川急歸にて最早到着と存候此許の成り行い才御承知と奉存候引き續き庄村歸省是又同様其後格別相替り不申候

左京亮様初薩阿二侯御東下阿と左京様は今明日に此許御立大阪より火船にて直に江戸に御發向より江戸は去る十五日に上野に集り居候賊御討伐官軍大勝と相聞え申候三公御到着之上は江戸丈は彌以治平可仕候其上にて會津御征伐に御議定に御座候仙臺米澤杯大分賊に應し候え共是は會津落着いたし候えは治り候に相違有之間敷候暑中出軍實以痛心の

明治元年

六九五



至に御座候 禁中日々多事繁用誠に困り入申候然し前にも申上候通り 主上日々御出座議定參與被召出萬事被開召候  
私共罷出候所より者玉座は一聞半位八疊之御間に中央に高き御疊二枚敷き御敷物何舞薄き一通外に御たばこ盆 丁度私之物位なり  
のみにて御近習衆も一と間隔て二三人も扣へ被居候私共は御居間之下御敷居の下とに罷出申候參議一同に罷出候時  
有之或は一人罷出候事も御座候千餘年來絶て無之御美事に御座候御容貌者長が御かほ御色はあさ黒く被爲在御聲はお  
ほきく御せもすらりと被爲在候御氣量を申上候え八十人並にも可被爲在哉唯々並々ならぬ御英相にて誠に非常之御方  
恐悅無限之至に奉存候(以下略)

五月廿四日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

五月廿四日甲府出張中の我藩兵隊任務を終りて江戸へ歸る

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

同廿四日 甲府出張ノ大砲隊引揚方被差免江戸へ歸陣ス予ハ掛川藩ノ兵ヲ差配シテ八王寺ニ滞陣ス  
以下ハ退三一己ニ關シ全ク總督府附ニ相成率ル所ノ兵隊ハ他藩ノ兵ノミニ付記載セス

熊本藩

安田源之丞 録之  
后退三ト改ム

五月廿五日德川龜之助に駿河國を下賜せられたるにつき同國元領主等に所替の準備すへき旨を

命せらる

〔江城日誌 第十二號〕

五月廿五日

水野出羽守(駿東郡沼津五萬石)  
本多紀伊守(益津郡田中四萬石)  
瀧脇丹後守(庵原郡小島壹萬石)

今般德川龜之助駿府城主ニ被 仰付同國一圓下賜候ニ付追而所替可被 仰付候間兼而用意可有之旨 御沙汰候事

五月

五月廿五日日本藩米田虎之助沼田勘解由に備組受持の交替を命し且つ虎之助に征東軍總帥を命す

〔慶應四年 京都江戸狀扣〕

以別紙申達候

米田虎之助

右者右吉將監元組當分支配受持被 仰付置候處被遊御免郡夷則元組當分支配受持被仰付旨

沼田勘解由

右者郡夷則元組當分支配受持被 仰付置候處被遊御免右吉將監元組當分支配受持被仰付旨

米田虎之助

右之通去ル廿五日相達申候

右者今度關東御出兵之惣奉行被 仰付旨

明治元年

六九七



右之郡夷則元組關東出兵被 仰付候得共御國元之御用向相勤可申旨

右之通同日 御直ニ被仰渡候

右之通候條此段爲可申達如是御座候以上

六月

惣連名

尾藤 金左衛門 殿

尙々木文虎之助に仰付之趣之清水數馬に之御便之節御知セ候様存候以上

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕 (佐田傳之助 筆記)

五月廿五日

是保君當時御部屋住ニテ御家老 職米田虎之助ト奉稱ル 今日於御城今度關東出兵ノ總御奉行被仰付旨 國君詔邦公御直ニ被仰渡仍テ至急ニ其御用意アリ御引率ノ御組ハ郡夷則殿元組當年ニ番手御備組ナリ

〔長岡雲海公傳〕

(男爵米田虎雄談話)

余の御二方(詔邦 護久)の御前を退くや道家角左衛門來り余を祝して曰く「貴下の此行や實に武門の冥加ふり御三方より貴下に限りて此度の總帥の任を命じ給ふことは決して故ふきにあらざるべし貴下願くば其旨を諒せられんことを」と小笠原美濃曰く「此度貴下の部下に屬すべき御備の中に副頭一人の缺員あり貴下宜しく其人を撰擇せらるべし」と余乃ち河田和氣之助を以て其缺を補ふ今番頭以下重なる人員を擧ぐれば番頭は奥村軍記大河原次郎九郎の二人にて物頭には中村左助横田治部右衛門等副頭には河田和氣之助等ありたり

〔米田男爵談話 小早川秀 雜記〕

其後漸く御變革が治つた時分でございますが正四位様(邦)から急に私に出るやうにと云ふ御沙汰でございます、早速御前に出ました所が、此際奥州征討の任に當る者はお前より外にはないから、甚だ大儀ながら直ぐ様早打で、長岡(美)からも手紙が來て居るから京都に上るやうにと云ふ御沙汰でございます、丁度其時沼田勘解由がお備を持つて居つた私は其任に當るといふ事は此上もない名譽だが、併し間違へば腹切るかも知れぬ、兎に角御三殿様(久護美)の御命を蒙るといふのは武門に取りまして此上もない難有い事で、又家に取りましても面目千万の次第でございますそれで正四位様から手づから御刀を下された、斯う云ふ事は實に武門に取つて此上もない結構な事だと涙を流して悦んで御請けを申上げて歸りますと、新堀の隠居(休也)が來ましたから、今難有い事には御三殿様から其方が任に當るから今度の大任の統率を言付けると云つて、御刀までも下され誠に難有い事でございます、實に結構な事だが後は如何なるかと言ふと、後はどうするかと言つても、夫れは私にも考がある、後の事は決して御懸念に及ばぬと言ひますので私はそれでは直ぐに立ちますと云つて、鶴崎から船退丸と云ふ小さい船に乗りまして出掛ました

五月廿五日輪王寺宮舊幕軍艦に搭乗して奥州へ渡航すべく品川灣を抜錨せしめ給ふ

(井上言 信編 彰義隊附輪王寺宮殿下)

宮には同(五)二十五日夜半を以て軍艦に乗り込み、奥州に渡航すべく決定せらる、是れ自證院(亮)は内にあり、竹林坊は外に在りて、共々畫策し、河野大五郎を以て品海に碇泊する回陽丸乗込みの海軍提督榎本和泉に交渉し、密航する事となりしものなり、依りて鐵砲洲船松町二丁目に廻漕を營業となし居る松阪屋事星野長兵衛の義氣あるを聞き、急に自證院へ呼び出し、院主より長鯨艦まで端艇を出し、一行を送り届くべき旨を依頼したるに、彼れ生命を賭しても此の名譽の御用を果すべしと、快く承諾せり、自證院は金五百兩を與へ、猶異例を以て、庭前より宮へも御目通を



仰せ付られ、御菓子をも賜はる、松阪屋は地上に拜伏して落涙するのみ、宮奥州へ渡らせらるゝに付き、近侍のものなくては不便なりとの仰せに依り、常應院は佐兵衛に旨を含ましめ、周旋萬端、漸く安藤、關等の御家來を搜索し得て、二十五日松阪屋へ出會の約を爲せり愈當日となれば、宮には小笠原壹岐守長行の御手醫者本町三丁目の西川玄仲の書生となり、自證院出入り伊藤喜作の帷子羽織を召し角帯に木刀を差し、雪駄を穿てり、誰が目にも代診と鑑定を付くべき出立なり、匹田丑之助(二部)藥籠を背負ひて御後に従ひ、玄仲先に立ち、又前後二三町を隔て、匹田、加島の二人御附添申し上げ、同日夕刻、松阪屋方に着せらる、此處には淨門院、常應院の兩僧、御家來鈴木安藤守、安藤直記、關右京、其他河野大五郎羽倉三郎の數人待受に相成り、夜陰に乘じ一同松阪屋裏手より端船に乗込み官軍の目にも留らず、首尾能く長鯨艦に着せり、(中略)

宮の長鯨艦へ御乗り込みあらせらるゝや榎本和泉等御人拂ひにて拜謁を願ひ「殿下奥州に赴かせ給ふ尊慮を、隔意なく仰せ置かれ度く、又拜承の上にて和泉上申の次第もあり」と言上す、宮には御言葉爽かに「別意あるに非ず、上野山内兵火の爲に焼き失せられたれば、僧侶として身を措くに所なし、奥羽には木寺も多く、戦争もなし、依て暫く戦地を避けて、天下の靜平を待つのみ」と仰せらる、和泉之を領し、更に語を續きて曰く、「和泉不肖と雖も御乗艦の上は、尊體を御引受申したる者なり、就ては飽まで尊體の無事安穩を圖らざる可からず、後日の證左として、前言の趣旨の御手書を賜はらんことを請ふ、猶此の後、南北朝の昔の如き事、御勸め申す者ありとも、決して同意し給ふ可からず」と、宮「其の心配には及ばず」とて、直に御手親ら筆を執りて、和泉に與へ、猶御慰勞の御言葉さへありたれば、和泉深く之を感佩せり、此座に在りしもの常應院一人のみなりし、斯て長鯨艦は品海を抜錨しけるに、榎本は回陽丸にて觀音崎まで御見送りを爲し、長鯨は海上無事に五月二十九日水戸領平泊港へ着港せり

五月廿五日先きに奥羽方面探索の使命を帯ひて出張せし本藩古庄養拙植野虎平太竹添進一郎等

仙臺に在ること數旬此日仙臺を發して江戸へ還る

〔防長回天史第六編上〕

奥羽撫使ト奥羽同盟

肥後人竹添進一郎カ坂(仙臺藩使者坂元力奥羽列藩の建白書を撰へ五)等ノ汽船ニ便乗シ江戸灣ニ入りシ際ノ事情ノ直話ニ「時ニ榎本武揚舊幕軍艦ヲ率キ江戸灣ニ在リ人ヲ船中ニ遺ハシ仙臺人ニ謂ハシメテ曰ク若シ此ノ如クシテ江戸ニ入ラハ人船共ニ忽チ捕拿セラレン如カス一二人ヲシテ單身決死書ヲ大總督ノ軍門ニ致サシメンニハト仙臺使人等其說ニ從ヒ宮島誠一郎ト書ノ任ニ當リ他ハ東歸ス予等一行ハ舊幕艦内ニ泊シテ密ニ上陸シタリ」ト見ユ

〔古庄嘉門入ノ日までの履歴〕

(閏四月廿八日の續き)

同(仙臺)城下ニハ當時恰モ奥羽連合シテ官兵ニ抗スルノ協議中ニテ各藩ヨリ重役ノ者兩三名宛來會シ居レリ一日仙臺公ヨリ予等ナ城中ニ招カレ今日ハトテモ君等ハ當地ヨリ奥ニハ行キ得ラレサレハ必ラス近々ノ中歸ラルヘシ其上ニテハ當方ノ形勢ヲ細川公ニ能ク傳ヘラレテ拙者共ハ決シテ直接ニ朝廷ニ向テ弓ヲ挽ク存念ニハアラサレハ朝廷ノ方ニハ表而ヨリ宜敷様トノ事ナリシ予等惟ノニ當時奥羽ノ形勢ニテハ海陸共ニ閉塞シテ是レヨリ東ヘハ一步モ行クヲ得ス速カニ東京ニ還リテ尙東西ノ形勢ヲ詳カニシ而シテ熊本ヘ歸リ藩主藩廳ニ具申シテ計ル所アルヘシト東京ヘノ便船アルヲ待ツ中ニ幸ニ仙臺ノ湊ヨリ汽船ノ小ナルモノ一艘東京ヘ向テ發スルアリ是レニ便乗シテ東京ヘ着シタリ(以下六月某日羽列藩の艦氣あるを告ぐの處に續く)

五月廿六日賊兵來りて奥州白河城を襲ふ官軍防戦甚勉め遂に夜を徹し翌日之を撃退す

〔一新録探索報告〕

明治元年



林支助東行雜誌(抄略)

一五月廿六日早天より敵兵江戸街道を除之外白川城之周圍より襲來り櫻町口を堅たる長兵ハ鹿島河原ニ出張て防戦せしか敵兵カラメと云所を放火して襲來り猛烈ニ攻立此口最危急屢他之口に救助を乞へり

此戰ハ朝より暮に及び双軍頗苦戰を極めたり

一同廿七日此度ハ前日と違ひ唯棚倉道之一筋より大兵を以て襲來り頻に攻立たり何故に一方のみより攻ると思ひし處午時比より俄ニ奥州口より不意に攻來り最烈敷攻立て打てとも打てとも敵兵不退苦戰たとへかたなく遂に夜に入り漸敵兵退けり

兩日共敵兵凡一萬ニ殆き兵なり

一五月廿六日白川戰爭中に敵之一軍畑宿より竊に間道を経て白坂に來り守り居たる大垣黒羽二藩は山中より不意ニ放丸黒羽兵隊敗走大垣兵隊踏留りて頻に苦戰する其隙に固より地理に委しけれハ黒羽之兵後に廻りて敵兵を撃んとせし處彼も其筋を見て引あけたり

〔全書〕

(六月十五日青木彦兵衛報告の一節)

六月五日 取書

見聞之次第書取

一仙臺如何ニも會ニ説得せられたると相見會之中分至極至當之理ト相考投頭佐會之論ニ相成會之歎願書等取次致し候覺悟シ而兵威を張り押上り候由既ニ領内之旅人之通行を留九條御を抑留いたし軍監某を殺害ニおよひ候趣又片倉小十郎ハ既チ官軍ト接戰敗走ニおよひ白城白石へ引籠居候へ共又追々敗兵を集メ今度ハ本藩の者ヲ不頼手勢のミ成もつて官

軍ニ抗し候との聞ニ付追々當所之官軍をも御差向ニ相成既ニ薩之二小隊ハ過日仙臺ニ當ル覺悟ニ而出兵之段承申候白川口戰爭も頻リニ盛ニ有之先月廿三日<sup>四日ハ</sup>五日六日連日之大合戰賊兵六百八拾二人打取候由城を取返し候後も追々戰爭仕候處先日賊敗軍後奥羽之兵も會仙ヲ相促し白川へ爲向候得共此頃中戰を相止三四里を隔互ニ白眼合居候由江戸中ハ上野戰爭後犬猫も居らぬ位ニ而市中も大ニ安堵いたし居申候尤市中之賑合も是迄之通隨分勝手ニ致し候様との御觸有之候由ニ而來ル八日ニハ隅田川々開<sup>例年ハ五月</sup>廿八日なり等もいたし大花火をも催候由

右六月五日承り候事

本月十一日於西城宮御内松山一郎ヲ承候咄之趣

一白川城に賊軍取返しニ相懸り候時ハ都合十二口ヲ責懸候由是ニ當ルニ薩長忍大垣四藩の軍兵を以防戰竟ニ賊軍を追退候由前條六百八拾二人之打取ハ何レニ此時ト相見へ申候官軍も半ハ戰死五百之勢ハ貳百五拾ト相成申候由依而當月朔日御感狀等四藩ニ賜り候文其ハ日誌ニ有之候間相省申候且長州ハ戰爭ニ相なれ餘程熱戰候由仙臺之兵頻ニ隊列を進速發いたし候へ共決而不應候而木蔭等ニ片寄一發も不打候而段々近ク相成連發ニ相放候哉否矢聲を發し相應候へハ賊兵ハ官軍ヲ打れたるト心得已か炮聲ニ被劫崩レ立候ニ付長ハ只聲を發シ追懸々々打初散々打崩候由其有様ハ水鳥の羽音ニ驚崩立候様ニ有之餘程奇妙ニ戰候段承申候<sup>但此日七百發打候者有之由四藩之内何レカ不詳</sup>

五月廿七日日本藩世子護久及び長岡護美等の俸給四月支拂殘額半月分を支給せらる

〔王政日政錄〕<sup>(熊本縣廳所統)</sup>

四月分月給殘半全明後廿七日被相渡候間己刻未刻迄ニ御請取可被成候事

五月廿五日

右之通被相觸候間此段申入候也

五月廿五日

明治元年

會計官

刑法官



溝口 孤雲殿  
木村 得太郎殿

右御達之通ニ付松尾形助罷出候處御使番淺山深左衛門を以左之通若殿様分

一金四百兩  
左京亮様分

一同貳百五拾兩  
一同貳百五拾兩宛  
溝口孤雲殿分  
木村得太郎分  
右之通手形ニ而相渡尤四月分半分相渡候様分也

五月廿七日

一昨廿五日刑法官方別紙兩通之通御達相成候付罷出候處若殿様左京亮様當四月分月給殘半高宛御渡ニ相成申候間則相達申候以上

五月廿七日

内 山 又 助

籤 作右衛門殿

尙々溝口孤雲殿木村得太郎分月給殘當四月分殘半高相渡候付差廻申候以上

五月廿七日在京本藩老臣尾藤金左衛門は長岡護美の征東につき從軍を命したる人名を在藩老臣に通報す

〔一新録自筆狀〕

慶應四年五月廿七日京發他筆狀

以別紙申達候

堀内 彈右衛門(軍學)  
堀内 平助

右者左京亮様關東御出張之御供被仰付置候處彈右衛門儀御用之儀有之御床几下ニ被差置候右ニ付平助儀副士之被遊御免彈右衛門代として被差出旨

五兵衛嫡子  
白木 武雄

右者御物頭副士ニ而右同斷御供被仰付旨  
右之通去ル廿一日及達候

下津 縫殿

柄木 助七組共

白木 五兵衛組共

後藤惣左衛門(砲術)  
門弟共

江村 悰(益)  
師

江村 悰(益)  
師

渡邊 道柳(全)

右者左京亮様關東御出張之御供被仰付置候付至急ニ御先ニ被差立旨

彈右衛門嫡子  
堀内 平助

右同斷御供被仰付父彈右衛門爲陳代被差出旨被仰付置候付至急ニ御先ニ被差立旨

五兵衛嫡子  
源次右衛門養子  
白木 武雄  
中山 閔五郎  
甚内養子  
萩原 壽三郎

右者御物頭副士ニ而右同斷御供被仰付置候付至急ニ御先ニ被差立旨

右之通同廿二日及達候

田中 八郎兵衛

右者左京亮様關東御出張之御供被仰付御供並御滞陣中御家老之場を茂兼相勤候様被仰付旨

平野 太郎左衛門組共

右者左京亮様御下坂之御供被仰付旨

右之通同廿三日及達候

七〇五

明治元年



兵左衛門弟 山川 龜三郎

右者左京亮榎關東御出張之御供被仰付大隊司令士左右半大隊司令士教佐ニ差添被仰付御供並御帶陣中御小姓頭之假支配被仰付旨一昨廿五日及達候

候  
右之趣爲可申達如是御座候以上  
五月廿七日 尾藤金左衛門  
御家老 衆中  
御中老 衆中

右同斷御供被仰付置候付大隊司令士被仰付旨昨日及達

五月廿七日我藩津田山三郎北陸道鎮撫使參謀を免せらる

〔津田家記〕

津田山三郎

本營無人ニ付如舊參謀中付置候處賊徒追々落去且陸軍將下向茂有之旁以不及在職候仍差免候也

五月廿七日(津田時に越後國高田に在り此免により) 變廿八日高田を發して歸京したりと云ふ

五月廿八日仙臺米澤二藩の京都館邸を沒收し且つ二藩人の人京を禁せらる

〔一新録探索報告〕

(五月廿六日附近藤信之助覺書の一節)

一仙臺御屋敷一昨日比々御不審懸り候而封印詰込ミ人數者其以前婦人ニ至迄引拂申居候由米澤右同様封印其外駿州沼津相州小田原何をも同様

〔防長回天史第六編上〕

奥村鎮撫使ト奥村同盟(抄略)

二十八日(五)京都ニ於テ 朝廷仙臺二藩ノ邸ヲ沒シ二藩人ノ入京ヲ禁ス其文ニ曰ク

伊達 陸奥 守  
各通 上杉 彈正 大弼

其藩事松平肥後追討ニ付重キ御沙汰之旨有之速ニ 朝命奉戴既ニ出馬ニモ及候趣之處豈圖ンヤ肥後降伏謝罪之名ヲ口實トシテ奥羽諸侯ヲ連合シ竊ニ彼ノ兇暴ヲ資ケ候哉ニモ相聞候段前後如何御不審不少勿論其狀確實ニ候ハ、其罪難容乾度御處置之品モ可被仰出候處斯迄順逆ヲ不辨次第第一國論一定セサルヨリ所致歟ト被思召追テ事跡明細御檢覈相成候迄先家來中入京被差停屋敷被召上候旨御沙汰候事

五月

(編者曰、前掲二書の日付異なれとも暫く防長回天史に據る)

五月廿八日輔相岩倉具視は在大坂長岡護美に答書を贈り其の東下を促し且つ北地の事情を通報す

〔子爵長岡家文書〕

拜承前後何かハ不存候得とも御書之儘早々吉井に可申聞候仁右衛門盡力紀州云々實々重疊と存候兎角寸刻も早く御出馬千祈萬禱候也扱十五日後東國報知更ニ無之苦心此事ニ候字和鳥より深情報知メリケン商人話と鍋島より大阪屋敷へ一通とニ而漸々粗知るのみ昨日も小松後藤等へ段々申遣候次第何卒少シニ而も分り候事候ハ、御申越之事偏冀上候仍早々如此候也

五月廿八日

御端書秘之儀必々無相違と存候得とも只々東國一報次第之御發しと存候吳々東國情實書に御爲知可給候様念候北國軍

明治元年



事官軍如何と存候程之苦戰ニ候得共終に長岡迄乗落し申候其上かねての薩長軍纏着更ニ長土より一大隊出候よし彌北國ハ定り可申かと存候早々如此候也  
過日御書直ニ御請申入候御落手の事と存候也

長岡左京亮殿

御請

具 視

五月廿八日日本藩征東軍總帥米田虎之助熊本を發して東上す

〔佐田家肥田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

五月廿六日

右ニ付〔關東出兵の總〕京都表 左京亮様ヨリモ御直書ヲ以テ成丈至急御登京有之度御待被成居旨ニ付明後廿八日御出發〔御奉行御仰付〕豊後路通早駕ニテ鶴崎ニ到リ夫ヨリ駕迅丸ニ召シ御登京ノ筈ニ御決定自分モ〔佐田傳〕御供ニ被召連旨命アリ

〔長岡雲海公傳〕

〔男爵米田虎雄談話〕

一斯くて余は早打にて上京の途に就き鶴崎に至るや鎌田軍之助等來り關東出兵の不可ふる所以を論す余大義明分を以て之に論し即刻上船して鶴崎を發す

五月廿九日我藩先鋒隊を至急關東へ派遣すへき旨軍務官より更に令達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

六月二日村上より

先月廿九日軍務官より御呼出御渡ニ相成候御書付一通

肥 後 藩 に

蒸氣船廻着次第一日度早ク先手之人數關東表に可被差出候此旨相達候様 御沙汰候事

五月廿九日

五月晦日舊藩臣高家以下の稱號を廢し資格を定められたる旨布達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔六月朔日前橋藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達九通の内〕

元旗下上京歸順之面々先般徳川御所置被仰付候上者出格之思召ヲ以元旗下都而本領安堵被仰付候就而者高家以下席々舊號を廢し凡而中大夫下太夫上十三等之列被仰付候間爲心得申達候事

五月

右一席下大夫ト可稱事

元 交代 寄 合

〔中略〕

右一席中大夫ト可稱事

元 寄 合

右一席上士ト可稱事

元 兩番席 以下 席々千石 以上

〔中略〕 五月

元 兩番席 以下 席々千石以下百石迄

元 高 家に

其方共従前徳川氏ニ附屬シ職務者 朝廷向之扱致來候處今般更ニ御奉公被仰付候上従前之職務無用ニ付以後武家一同

明治元年

七〇九



之心得を以御奉公可仕 御一新大變革之御時勢體認いたし文武精勵一廉之御用ニ相立候様心掛可申家格之儀は従前之順ニ循ひ交代寄合之上ニ被定候得共俱ニ同一席ニ而中大夫と可稱候事

五月

五月晦日諸藩に公務人を置き其職務權限を定めたる旨を示達し且つ貢士の對策條件を指示せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔前掲六月朔日前橋藩鎌田才吉より廻達の内〕

一從來於諸藩留守居役ヲ以公務取扱候儀不相當ニ付向後公務人之職を設け貢士是を勤都而 朝廷ニ關係いたし候事件可爲取扱事

但公務人者國論ニ可代者勿論之儀候得共 朝廷ニ而者公務人即貢士ニして其藩ニ而ハ可代國論職分たるへし其心得を以人才任用可届出事

一公務人藩々ニ於て新ニ可代國論職分之物ニ命シ差出候ハ、其藩是迄之貢士者爲引取可申是迄差出置候貢士ニ而命シ候ハ、其藩ニ而可代國論職分ニ任舉可致事

一公務人員數并差替等之儀可爲貢士規則之通事

但定員之外助役を置病氣等之節御用之事件傳達等爲致候儀者可爲勝手事

一公務人者始終 朝命を奉シ其藩論を振起シ萬端之取扱等并ニ議事之條目各國之持論凡而實着ニ基キ各自固有之見込相立敢而他之耳目を借り強而雷同不致様可相心得事

右之通被仰出候は 朝廷之御趣意諸藩之情實脉絡貫通四海一途之御規模被爲立候御旨趣ニ付厚く可相心得事

五月

一貢士對策所當分荷亭家

一貢士對策定日毎月

五日 十五日 廿五日

但已刻出仕

右期日之外差掛候建議有之候ハ、辨事傳達所に差出可申事

一政體中所載貢士對策條件

租税之章程

驛遞之章程

造貨幣

定權量

興外國結新約内外通商章程

拓疆

五月晦日我藩上野山内賊徒討伐の顛末を軍務官に具申す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

軍務官

江戸上野邊に屯集之賊徒暴激至らざる處なく因而去十四日夕御誅伐被 仰出候付翌十五日曉七半時より各藩西丸下發六半時頃より進軍弊藩人數手分ケ大略左之通

一大炮隊財津勝之助大島久平二手先物頭木造左門和田權五郎大槻權九郎吉田源左衛門番頭柏原要人始惣人數貳百餘人

明治元年

宣戰講和

水陸捕拿

招兵聚糧

定兵賦

築城砦或武庫於藩地

彼藩與此藩爭訟

右順次ニ一條宛建議して定日對策所に持參之事

但書取差出候上猶御用之有無を相伺可致退出尤病氣

不參之向者各代を以可差出事

右之通被仰出候各勉勵して誇大空遠之論不涉時宜之適

用を主とし着實施行之建議專要ニ可相心得旨御沙汰候

事

五月



上野邊に繰出ス

一本陣手櫻田目付迄押出同所堅  
 一殿物頭寺本兵右衛門物奉行堀十左衛門虎ノ門應援此所龜山  
 一白石清兵衛手銃隊赤坂應援此所大村  
 一番頭落合彌兵衛物頭野田彌三左衛門手去十四日より千住より東治田沿イに出張  
 一物頭吉海市之尤山路太左衛門橋本駒隨從  
 右之通ニ而朝五時より廣小路と下谷大名小路俗製成との間ニ而砲戰薩州因州繁藩相備ニ而廣小路正面より薩勢進撃當  
 手は小石川より本郷加賀屋敷前ニ押出湯島ニ押下ロシ池ノ端柳原之中屋敷に入込大砲手を配り不忍池を隔て討之小銃  
 隊は池ノ端中町通より廣小路に押出因州と合して薩勢取合之横矢を討賊初は三枚橋迄進て砲戰せしか退て黒門を駈ノ  
 土俵及土手之陰より大小砲を烈敷打出ス三藩之人數進不得就中當手薩兵苦戰之段相聞候間虎ノ門應援は本陣手に任せ  
 寺本兵右衛門堀十左衛門五半時頃。繰出ス尤砲戰始ルト程なく湯島廣小路より下谷ニ懸ケ處々出火且連日之雨天ニ而  
 泥深く旁難戰晝九半時過頃兵火味方之後ニ迫候付木造左門和田權五郎薩ノ隊長と示合せ勢を山下ニ廻し一時ニ乘入候  
 方ニ決し當手徒上之者を教導とし廣小路裏手を山下に押廻ス其人數前後之次第一番和田權五郎堀十左衛門二番薩小隊  
 三十續而木造左門寺本兵右衛門大機權九郎吉田源左衛門山下より山王山に乘入り黒門内ノ賊を眼下ニ見卸し砲撃ス賊  
 必死となつて暫時砲戰官軍ノ死傷も不少此時當手徒士高山秋藏と申者一番ニ乘入り細川勢一番乗と唱候處ニ小彈來テ  
 左ノ股並耳ノ下一寸五分程下ヨリ口中に打通す然れ共舌を損せず骨を不痛此勢ニ隨而因州備前肥前伊州裏手よりは長  
 州大村佐土原兵士山内ニ込入り寺院堂塔ニ火ヲ放チ柏原要人手大砲隊は池を逸り乘入り八ッ時過惣勢悉く乘入一山終  
 に落去し賊ノ死傷數不知當手討留も數多有之候得共混雜中討捨ニいたし候段申越候夕七時頃惣軍引揚六ッ時前櫻田邸  
 に歸陣其節警手負分捕等左之通

徒上使番 淺手 高 山 秋 藏  
 徒上貝役 深手 千田 四郎 右 南門  
 生捕 柏屋筑後手之者之由 壹人

分捕

- 一鎗太刀 百本計
- 一大小之類 目籠二棹
- 一大砲 七門
- 一小銃 七百挺
- 一彈藥等 大八車十輪

此品々總而御總督府に差出置候  
 右之趣關東出先より途注進候付此段不取敢御届申上候以上

五月晦日  
 軍 務 官

肥後中將内  
 内 山 又 助

五月晦日正月以來國事に殉せし者の祭典を行はせらるゝにつき其の死亡の月日姓名等を調査報  
 告すへき旨示達せらる



〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔六月朔日前橋藩鎌田才吉より廻達せる五月晦日御渡の書付九通の内〕

戊午以來國事ニ殉難致し候靈魂祭禮可被爲在旨兼而被 仰出候處今般差掛り當正月以來奉 朝命奮戰死亡之輩祭典被 仰出候間番々ニ於て一々取調來ル六月十日迄ニ兵士死亡之日日姓名等相認神祇官に差出候様被 仰出候事

五月

五月晦日日本藩軍資金上納之件先きに淀川洪水に依つて猶豫せられしもの既に川明きたるを以て速に上納すへき旨を達せらる

〔王政日新録〕（熊本縣 縣所藏）

今日軍務官が御呼出ニ付罷出候處軍資金上納之儀此程淀川洪水ニ付川明迄之處暫時御猶豫ニ相成候處最早川明候事故早々上納可有之旨伊吹喜三太を以被仰渡候此段相達申候以上

五月晦日

内 山 又 助

藪作右衛門殿

五月晦日伊達宗城書を長岡護美に贈り其の上野戦況を報したるを謝す

〔子爵長岡家文書〕

華墨拜讀酷暑日々加之候愈御清榮并賀之至候頃御家來堂人廿二日江戸出立横濱より英船ニ乗組一昨日歸着十五日之上野邊戦近况委曲被仰下初而得確説官軍之勝利先々可賀々々御互ニ愉快之至貴藩兵隊尤も多功其中高山之勇武不堪感激實ニ賢兄之胸次深察申無比類働ニ御座候様々奉復可申上處小松今夕出立三條一書差立外ニも當官要事多忙ニ付仰略御報知被下候御禮迄申上度如此候恐々頓首

五月盡日

外 國 知 官 事

海 陸 軍 副 督 大 兄

亦云今夕ハ櫻宮手前齋字亭にて當局中呼集僕近々上京難盃催候後藤又赴次第本戸も可來貴慮突然輕刑にて裏門より御入來も一興ニ候半歟

五月某日酒井忠績舊誼を重し徳川氏の臣僚たらんことを大總督府へ情願す

〔一新録探索報告〕

姫路御使者志水三九郎が淺井新九郎に見せ候由之書付寫三通

大總督府に致願書寫

謹而奉哀訴候今般主人慶喜恭順謹慎無二念之段達 微聞且祖先以來治世之遺勳を被 思召家名相續被 仰出誠ニ難有 微慮之程奉感候同氏忠悃儀主家輔翼之道行届不申が遂ニ徳川累代 朝廷恭敬之意度貫徹不仕次第ニ相運實ニ悲歎懼 懼之至ニ奉存候依之嚴敷謹愼爲仕奉待 御嚴討候忌諱ニ觸候儀ニ而奉恐入候得共廣く言路を被爲開候ニ付奉申上度私家筋之儀元來徳川家臣僕ニ而主家奉蒙 御委任が隨而過分之僭秩を辱し候儀ニ付 天恩之莫大成之世々子孫不奉忘候得とも徳川家衰運之今日ニ至累世之恩義を不顧主家と並列比肩候様ニ而之君父を輕蔑せる之筋ニ當り御譴責を茂可奉蒙讓令寛宥之 衆慮を以御咎之被免候共又臣子之上ニ而ハ誠ニ難忍事ニ御座候殊ニ封建之御制度ニ御座候上之各藩陪 臣之分茂是迄之通ニ可有之奉存候付私共家筋ニ而之徳川家隨從仕奉報 御國恩度志願ニ御座候又領地之儀之忠悃奉蒙 天譴且此度御變革之折柄ニ付被 召上候儀之當然之御事ニ而聊遺憾無御座候間何卒前件申上候下愚之至願御憐察之上 御聞齊被成下候様奉願候此上奉恐入候得共僭シ格別之 皇恩を以是迄所領之上民共飢渴を免候ハ、難有仕合ニ奉存候 抑 王政御一新世道御匡濟之時ニ膺り假初ニも君臣之分義を致忘却私利を營候様ニ而之奉欺 天朝儀ニ而上之御失體 を醸し下ハ賊臣之覬覦を生し可申哉と深く痛心憂慮之餘り奉犯 天怒之罪不顧萬死只管奉致願候誠惶頓首

明治元年

七一五



慶應四年戊辰  
五月

酒井忠績

六月朔日奥州白河城の官軍出て、賊兵を撃拂せんとし伏兵に陥りて敗れ還る

〔一新録探索報告〕

林支助東行雜誌(抄略)

- 一 右兩日(五月廿六日) 大戰之後ハ又々小戦となり居しに六月朔日奥州街道根田より少先に當て泉田と云所あり其所に敵兵屯集したるを見て追拂んか爲に薩長大垣等之官兵進撃ニ及し處暫相争ひ砲器等を棄て遁逃せり依て官兵追撃せし處七曲之坂を越て小田川の村外れに築きたる砲臺ありハ直ニ其臺場ニ向て發砲せし處遽に兩方の山間より伏兵起り前後左右より發砲せしかは終ニ官軍大敗器械等悉く棄置白川城迄逃歸せり
- 一 朔日後ハ又々日々夜々小戦ニ而更ニ大戰ハなし
- 一 彼ハ切所要地ニ悉く臺場を築き置常に輕兵を出して戦を挑み或ハ餌を與我を欺て策中に陥入れんとす官兵も亦朔日失策の後ハ大ニ怒りて我よりも亦彼を誘引して輕々敷出て不乗彼策故にさしたる戦争ハなく日を送れり乍去斥候隊杯之出役ハ日夜に不絶所謂夜打朝懸の爲に番兵殆其苦に不堪然るに彼ハ晝夜に唯守兵之虚のミ狙居れハ實に罽印之景況なり
- 一 白川城ハ九番町に薩兵堅め櫻町に長忍之兵守り田町にハ大垣兵堅め上り町仁江町之二口ハ土兵堅め田町口杯ハ隠し臺場を五ヶ所ニ設置難戰ニあらされハ輕々敷ハ其臺場よりハ不發砲萬一防禦し難き場合ニ立至りし時ハ其臺場より打出すの手筈にて其他山間に晝夜を不分伏兵を設置寸分も無空際殊殊之外堅固ニ守り居其他の持口も不劣嚴重ニ守りたり
- 一 彼ハ宇都宮城より白河城迄の間之宿驛ハ云に不及近在近郷一圓燒拂官兵をして粮にも苦み又足を留の地なからしむるの策を爲すと見えて或ハ間をして燒んとし或ハ十人二十人深夜風雨の夜杯も屢來りて燒んとし種々術策を施せとも未

た是迄ハ太田原の外ニハ越堀二軒燒失せしのみニ而其他の宿驛少も不燒乍去村落ハ處々燒失せり

一 土藩登朱

一 薩藩登朱ト二百孔

一 忍藩登朱ト百孔

一 大垣藩登分

右白川出張之藩々の兵士一日の賄なり

一 大垣藩ハ無事の時如前與ヘ有事之時ハ臨時に賞金を與て兵士を勞ると

一 大垣藩五月廿六七日比より大ニ心を用ひて人夫を役し折々酒代等を與ふ蓋戰爭中人夫之事ニ困苦せしならんか

一 大垣藩玉藥等は悉く國許より不絶調達あり或ハ於江戸表も折々買入れ途中ニ而も同藩運送之荷物ニ度々あり

右藩出師以來武州梁田ニおひて戦しを始とし都合十三戦したりと金穀と云ひ玉藥と云ひ如何に美政とハ乍云感し且

可驚事共也

一 白川城出張之藩々即薩長土大垣の四藩會議の上ニ而重臣一名宛早打ニ而督府に來り獻策あり其次第一通りハ元來奥羽寒地なれハ九月より降雪ニ而迎も戰爭不行故其前六七八之三月を以て是非兩國平定させされハ不叶義ニ而左なす時ハ是迄の如く唯白川城之一路より進撃ニ及しとて其効恐くハ薄く速ニハ運ひかたからんか且彼ハ多兵ニ而要地に據り居れハ中々寡兵ニ而ハ攻撃しかたし依而一軍ハ水路より直ニ岩城を襲ひ岩城拔ハ其より棚倉城にかゝり固より白川よりも進軍し海陸兩道より攻撃ニ及ハ白川城之圍を解くのみならず棚倉城をも拔取り大ニ破竹の勢をなし又一軍ハ九條澤の兩脚附屬薩長筑肥四藩兵隊秋田より打出て三方より一時に攻合云々尤於督府も一々採用木梨精一郎渡邊清左衛門監して海路よりも薩長備大村佐土原五藩海路より岩城に向て出帆せり其他陸路よりも追々各藩練出ニなり金穀も無滞調達ニ相成り玉藥等借用せし藩もありしと

(編者曰、防長回天史を見るに) 出發ヲ命セラレタル諸藩兵、六月四日薩州兵因州兵、六日大村兵、十一日乗船ニテ奥州出張ヲ命セラレ薩州兵佐土原兵大村兵ハ十四日品川ヲ發シ十六日平沼ニ着ス因州兵ノ出張ヲ命セラレタルハ(中



略)六月二十八日品川解纜ニテ海路平潟ニ向フ(中略)六月七日柳川兵十一日鏡子ヨリ乗船ニテ平潟出張ヲ命セラル  
 (中略)十日佐土原兵奥州出張ヲ命セラレ薩州兵大村兵ト同時ニ品川ヲ發シ是モ十六日同時ニ平潟ニ着ス、備前兵モ  
 此頃出張ヲ命セラレ十日江戸發陸路進行シ二十日二十一日柳川兵ト相前後シテ平潟ニ着セシコト上ニ記ス、十日長  
 州兵白河出張ヲ命セラレ二十二日白河入城、(中略)平潟口ハ最初ヨリ我木梨精一郎軍監トシテ大村藩渡邊清左衛門  
 參謀トシテ出張シ因州河田左久馬モ引續キ參謀トシテ因州兵ノ先發部分ト共ニ出張シ木梨ハ八月ニ入り平潟口總軍  
 監ヲ命セラル云々とあり)

一金ハ白川城を取りし節少々の蓄金もあり又各藩之備金もあり且度々國許よりも募りしよしなれとも各藩疲弊之上なれ  
 ハ多くハ不如意にて是ニハ殆困窮之様子なり

一金穀に困窮之事ハ勿論ながら最難之廉ハ人夫なり已ニ遠ハ二十里外より夫を募り居れとも如意ニ不行民ハ各々生業を  
 専務とする事不能酷敷被役怨聲道路ニ充ち滿ち此上若大兵出張あらハ夫方之一儀ニおひてハ最大の難事ならんか

一兵糧運送之道ハ黒羽にも水運出來宇都宮にも同様阿久津にも水運自由なり又阿久津より上にも上れとも至而急流ニ而  
 上りハ至而難く至而遅し元來阿久津邊より白川邊ハ重大之荷を負大牛數居れハ阿久津より其牛ニ而運送せん事便  
 ならんか

右水路且船之大小船着之時限等別ニ巨細記載したり

(中略)  
六月

林 玄 助

六月某日本藩古庄養拙植野虎平太竹添進一郎仙臺より江戸に返り奥羽列藩の戦氣あるを告ぐ奉  
 行淺井新九郎之を諭せとも聽かず依て歸藩して關東の情勢を報告せしむ

〔淺井鼎泉記録〕

一古庄嘉門(嘉門は養拙の後の名)竹添進一郎益田藤彦植野虎平太京都より關東探偵の爲都合に因りてハ津輕迄も被差越候趣にて  
 江戸へ來り滞在罷在候就てハ御先手御人數の中に此迄の御方針に對し種々の物論を惹起し隊長より申出の趣も有之旁  
 々右の四人の中古庄竹添植野の三人ハ奥州津輕候へ被差越候命も有之候ニ付肥前の人數奥州仙臺出張の便船より彼地  
 に罷越候様取計らひ(四月廿六日三人ハ佐賀藩の船)而して益田藤彦は父源七より家督爲致度に付急に歸國可致旨申越  
 したれば御國へ返し候事に致候處明治元年六月四日の事なりし不測右の三人とも江戸に歸り來り候ニ付如何なる子細  
 にて罷歸り候哉と尋候處奥州仙臺迄參り急に報知すべき事件有之罷歸り候由申候ニ付奥州の事情相尋候處逐一申述ふ  
 るを聞くに官軍方にて聞込候處とハ大に相違し仙臺にて奥州十九藩會合の上會津藩征討とハ餘りの事にて畢竟 朝廷  
 に情實の達せざる所より生じたることなれハ其冤を訴る爲十九藩連合の兵隊を以て上京するふとに決し七月中旬を以  
 て一同江戸城に迫り候筈なれハ必らず總野の間に於て官軍と大衝突あるへし當是時鼎泉ハ如何なる處置を取り候哉と  
 尋候ニ付鼎泉答へて申候様ハ別の處置ハ無之各隊長を始め兵士の面々不殘君命を以て軍に此に従ふものなれハ若し總  
 野の間に大戦争あらは快く一戦を試み一死を以て君命に對ふる所あらんのみ併し去月十五日官軍上野屯集の幕徒征討  
 の處僅一日にして事全く平くことを得爾來府中は全く靜謐に歸し亦一人の官軍に抗するものなし又林庄之助昌殿幕兵を率  
 ひて小田原侯を脅し共に箱根の關門を扼したれとも是亦一朝官軍の攻撃に合ふて盡く敗走し(五月廿七日)小田原の大  
 久保家ハ之が爲に遂に其封土までも沒收せられたりと聞く(六月三日大久保忠濟の首)又甲府も近日稍々不穩の兆有之由  
 なきとも御國の大砲手に出張被命最早夫々手配相調居候ニ付是も別條ハ可無之幕府の富士艦外三四隻の軍艦浦賀を封  
 鎖して官軍の運輸を斷つ由流言すれとも是も官軍にて夫々手配行届居れハ子細有之間敷と巨細官軍の模様申聞候得と  
 も彼等信する色なく奥州の連合軍より白川城を取戻し同所ハ既に連合軍の占領に歸したる事ハ知り居るやと申候ニ付  
 之を知れりされとも官軍より之を回復したることハ(官軍の白河城を回復せし)承知なきものと見えたりとて委細即今の  
 形勢を説示したれとも彼等は只々連合軍の利ありし事を説くのみ而して彼等が持參したる仙臺侯の御直書なりと云ふ



を一見せしに別に入用の事も無之ニ付鼎泉彼等に向ひ申候様ハ貴下等御國に歸らハ官軍の實勢も亦ケ様々なりとて只今自らより話したる趣を詳に報道あるへしとて別途外國の汽船より一應歸國せしむることとなせり

〔古庄嘉門今日までの履歴〕

〔五月廿五日の條のつゞき〕

予等惟フニ當時奥羽の形勢ニテハ海陸共に閉塞シテ是レヨリ東へハ一步モ行クヲ得ス速カニ東京ニ還リテ尙東西ノ形勢ヲ詳カニシテ熊本へ歸り藩主藩廳ニ具申シテ計ル所アルヘシト東京へノ便船アルヲ待ツ中ニ幸ニ仙臺ノ湊ヨリ汽船ノ小ナルモノ一艘東京へ向テ發スルアリ是レニ便乗シテ東京へ着シタリ  
東京ハ上野戦争後ニテ其戦勝ノ官兵ハ大方ハ奥羽ノ方へ向テ漸々出發シテ東京ノ大本營ハ官兵ハ至テ寡少ナリシ同縣熊本ノ兵モ多少來リ居レトモ未タ何レトモ發向セサリシ因テ思惟ニ此時ニ當リ熊本ヨリ最大多數ノ兵ヲ然ルヘキ有爲ノ將校等ニ引卒セシメテ東京ノ本營ニ入り内ハ天皇陛下ヲ守護シ奉リ外ハ本營ニ在ル各藩ノ殘兵ヲ繰縦シテ兵權ヲ握リ大ニ天下ト角逐スヘキハ此時ヲ失セハ復タ何ノ時カアラント直チニ熊本へ歸り藩主ノ邸廳ニ出頭シ奥羽ノ形勢仙臺公ノ傳命ヲ傳へ東京ノ景況等意見ヲ雜へ詳細ニ具申セリ(以下八月三日)

六月二日我藩征東軍總帥米田虎之助大坂に到る

〔佐田家 戊辰之役奥州出陣日記〕

六月二日

曉七時分浪花御着端舟ニ召シ五半時分大坂御屋敷左京亮様御前エ御出正午過御退席御客室エ御下宿遊ハサル云々

六月三日奥羽鎮撫總督丸條道孝郡山を發して盛岡に入る

〔防天回天史第六編上〕

〔奥羽鎮撫使・奥羽回天略〕

二十九日(總督一行) 將ニ盛岡ニ入ラントス城外ノ北上川水漲リ舟橋渡ル可カラス乃チ郡山ニ駐マリ六月三日ニ至ル昨日來雨少シク止ム因テ郡山ヲ發ス中途ヨリ雨又甚シ二艘(九旗)及ヒ佐賀兵ノ一半既ニ川ヲ渡ル忽チニシテ舟橋絶エ佐賀兵ノ一半及ヒ小倉兵渡ルヲ得ス河南ニ止マリ以テ七日ニ至ル總督ノ盛岡ニ入ルヤ城北本誓寺ニ舍ス是レヨリ盛岡ニ滞在シ五日ニ至リ暫ク此地ニ駐マルヘキコトヲ發表ス

六月四日我藩米田虎之助京都に至る

〔佐田家 戊辰之役奥州出陣日記〕

六月三日

〔前略〕 四時過御屋敷前ヨリ舟ニ召シ幕邊淀エ御着御飯被召上鳥羽街道ヲ經テ翌四日晚八時過京都高倉通丸田町横井平四郎氏ノ旅亭エ御着宮川(小源)住江(茂四)能勢(道)三人モ一同上京  
同四日 大暑  
夕刻日没比ヨリ岩倉卿エ御出ノ處留守ニ付室町通薩藩吉井幸輔旅宿エ御出夜六半時横井氏旅亭ニ御歸

〔米田男爵談話小早川秀雄筆記〕

彼方(大)に着きまして、それから長岡様に拜謁を願ひ今度御手紙を頂戴して誠に難有うございます、此節奥州征伐の任に私が適任と思召しお刀まで御受け申上て此方まで出ましたといふと、嗚呼苦勞であつたらうとの御言葉下され、兎角する内京都も沸騰して居るし猶豫して居つて天下が彼の南北朝のやうになれば益々天下は大事になるから、甚だ御苦勞だけれども、今から岩倉參議に會うて、自分の志のある事を斯様々と詳しく申上げると長岡様が仰せられるので、私は承知しまして、丁度淀川に水の出で居る時で、家來一人連れまして、出掛けた、溝口孤雲が歸つた時には



山に積む程見送りがあつたが、自分が淀川から舟に乗つて行く時には、一人も見送り人がない、(以下五日の條につづく)

六月四日關宿藩主久世隱岐守は藩臣派を立て黨争粉亂せしを以て統治不能の責を負ひて大總督府へ謝罪歎願す

〔一新録探索報告〕

見聞之次第書取(青木彦兵衛報告抄略)

惣督宮御内村井少進面晤之内左之通  
關宿之城主久世謙吉様 當今ハ何之守トカ改名之由 先達中官軍關宿城に進撃風聞有之候ニ付奸徒之家臣等君侯を誘出及脱走候處正議之家臣大ニ憤り所々相尋漸尋出し去ル四日同國之在村を連歸候由可憐ハ當年十五歳ニ而未タ前髪有之候處大鬘ニ刺落し奴僕の姿ヲふして處々連行候由ニ付家臣等ニ向ひ又何方に連行乞食して麥之御飯を喰ふらハいやト云而涕泣被致候由漸たましすかし城内に連歸り直ニ謝罪之儀願出元關宿脱走臣小野某本藩の者同居手筋を以西城に罷出前條之次第を相述臣子之情他藩ニも御願ニも相成候而ハ何分不忍次第ニ付國內へ憤被仰付置御沙汰之次第相待申度歎願ニ罷出候由ニ御座候事

右六月七日承候事(以下六月六日に掲載す)

〔淺井鼎泉記録〕

右の事ありて(關四月廿三日關宿藩士杉山對軒等深川の藩邸に到り其の主人を尋はんとせし事なり)  
四五日の後(淺井の記述さへなるべし) 關宿藩の士一人來りて鼎泉に面會を請ひ候旨從者來りて申候ニ付其様子を尋候處至りて眞實なる空説なれとも衣類ハ盡く破れて見る影もなしと云ふ見も角も引見すへしとて案内せしめたるに彼人座

に着くや先づ口を開き我藩公御揚不行届の爲藩内二派に分れ遂に鬭争を起し候ニ付密に藩邸を逃れ出で諸所流寓の末當時ハ山王社内に潜伏中なり依りて御苦勞ながら貴下自ら彼地に來りて藩公に一見賜ハリ度藩公より貴下に親しく頼まれ度事あればと申候ニ付宇土邸より山王社迄は程遠からぬ處なれば直に之を請し彼地に至りて藩公に面會致候處藩公申され候様は藩内兩派に分れて遂に今日の爲難と相成誠に御恥ケ敷事に有之候是れ畢竟自身の不行届より生じたる事にて今更致方無之此上ハ偏に御國の御保護によりて 朝廷に謝罪の道相立候様致度何卒御盡力被下度と依りて鼎泉は一應營に歸りて直に駕籠迎を遣ハし之を營中に迎へ其旨總督府に届出候處直に御預に相成り追て何分の御沙汰あるへしとの事に有之候

六月五日米田虎之助輔相岩倉具視に謁し本藩勤王の誠意あるところを陳辯す且つ軍旗肩章を賜り大坂へ下る

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

六月五日

朝飯後岩倉卿エ猶御出ノ處參 内ニ差掛リ時間ナク仍テ 御所エ後刻御出有之度トノコトニ付正午過 御所エ御出御對面暫御滯座尤京都御留守居役内山又助御同行申上ル  
此日薩藩兵隊千人許君公引卒東海道エ出發ノ筈ニテ御所エ御出ノ處西郷吉之助關東ヨリ早打ニテ着イタシ賊ハ江戸近傍引拂白川邊ニ集合セル山中來ル仍テ俄ニ薩侯海軍ヲ引卒白川口エ出張ノ命アリシト云然レトモ右ノ兵隊ハ砲兵歩兵佐土原藩兵隊ト共ニ堺町御門通ヲ英式ニテ出發ス其整頓歩行感ス可シ見物ノ老若左右ニ充滿ス  
夕方吉井幸輔エ御出暫御對話七時過御歸宿  
御所ヨリ御渡ニ相成赤地ニ菊御紋附御旗一旒井ニ錦短冊肩驗三百人前内山又助受取來リテ差上ル仍テ御受取遊ハサル日没比横井氏旅宿御立宮川列三人御見送トシテ三條マテ來ル云々(以下略)

明治元年



## 〔米田男爵談話小早川秀雄筆記〕

それから淀川を上りまして、京都に着き、御所に着きました、さうすると誠に天の幸でございまして、公卿御門の前には鹿兒島の兵が皆一列に立つて居る、もう鹿兒島の兵が残らず奥州に行くと思ひまして、玄關を通ると大久保様ニヒョット會つた、是は誠に仕合せで、さうして上りが出来たかといふ、いろ／＼長岡様の心配してござる事とも、就て申上げ、拜調に出ました、さうすると萩の間といふのに大久保様が自身に案内して行かれた、そこで御日に掛つて、今日まで遅延して居る次第を詳しく申上げ、又何處までも先鋒を望むと云つたので、岩倉様は大層悦んで、肥後の國の人達はあゝ云ふ了簡の人でないと思つて居つたが、始めて貴方が来て其事が分つた、宜しうございまして、委細私は含みますから御安心なさいといふので上首尾、所が吉井幸助が門の所に團扇を使つて居る、さうして上つたかと云ふ、斯う々々した譯で急に上つた、甚だ遅延して居るから 朝廷に□寄つて其事も岩倉様に詳しく申上げたといふと、面倒な事をして居るよりも奥州に行つてガンガンやれば宜いぢやないかと吉井が言ふ、何れ又御目に掛らうと云ふので別れた、其時 朝廷から頂戴した大きな菊の旗は今私の家に寶物として居りますが先づ上首尾に行つたのでございます(以下次の六日の藍につゞく)

## 〔長岡雲海公傳〕

(男爵米田虎雄談話)

夫より余は岩倉公に見えむとて御所に至りしに公家御門にて偶然大久保利通に會へり大久保曰く「余等は貴下の上京を待つこと甚だ切なりし余は今貴下の無恙上京したるを見て甚だ安心したり而して貴下は是より何處に行かむと欲するや」と余曰く「將に岩倉公に見え我藩の事情に就き具陳する所あらむとす」と曰く「然らば余に従つて來れ余將に貴下を導て岩倉公の許に至らむとす」と斯くて大久保に導かれ岩倉公の許に至りしに公曰く「何ぞ來ることの遅きや」と余

曰く「我藩是まで種々の情實に纏繞せられ大に天下の大勢に後る然れども是固より我公の本意にあらず」とて余は藩地にて 御二方の余に仰聞けられたる事より大坂にて護美公の御心配あらせられたる事等を具に公に上申したるに公曰く「肥後藩の事余甚だ之を憂へたりしが今貴下の話を聞て大に安心したり」とて太く悦べたり於是余は公の許を辭し吉井を訪ひ「親兵費の呈出は斯く／＼の事情にて今日まで遅延したれども既に呈出の運びに至らしめれば幸に安心あれ又關東出兵の事も太く貴下等の心思を勞せしめたる由ふれども是亦余藩君の命を以て更に一備の兵を率ゐて上京したれば不日大阪在來の兵を合はせて關東に向て進發せむとす我藩既往に於ては多少出兵を遅延したる情實なきにあらざれども今後に於ては余誓て此等の情實を打破し「我藩君の主意を貫徹せしむることを努むべし」と吉井曰く「御藩既に親兵費の呈出を了し關東出兵も亦不日決行せられむとすれば天下の慶事何事か之に加へむ是にて余も亦大に安心したり」と此談話中刺を通して來り訪ふものあり見れば即ち西郷隆盛あり曰く「只今關東より歸り來れる處あり」と余等兩人喜むて之を迎へ問ふに關東の戦狀を以てす西郷上野陷落の事より關東の形勢等に至るまで詳に説示する所ありたる後余に謂て曰く「聞く貴下には不日關東に向て進發せられむとすと余及吉井君も亦早晚彼の地に出張すへければ余等三人が戦地に於て相見るの日も亦應に遠きにあらざるべし」と則ち互に再會を期して別る此時余は「朝廷より各藩に賜はりたる軍旗一旛を吉井より受取りたれば之を家臣中井某に捧せしめて歸途に就けり

六月六日日本藩米田虎之助大坂に歸り京都の事情を長岡護美に復命す時に藩士中征東に異議を唱へ米田等を苦しむるものあり

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

六月六日

朝五時過大坂御着直ニ左京亮様エ御拜調正午比御下宿カジマ屋別荘エ御入云々(以下略)

明治元年

七二五



〔米田男爵談話小早川秀雄筆記〕

それから旗を持つて淀川を下つて御屋敷に行つて見ると、沸騰が盛んである、御都合の大層宜かつた事を長岡様に申上げて、宿に戻りますと――丁度私は長田の別荘に居りました――。さうすると熊本の面々五十人ばかり来まして今度兵を率ゐて奥州に出兵する御趣旨はさういふ譯かと云ふから、私は唯御三方様の御趣旨を受けて行くのであつて、降る者は助け、叛く者は討つといふのが、御國議であるといふと、格別異論もない、其人達が返ると、又三十人ばかり来て、さういふ御趣旨で上るかとか聞く、宮部等も非常に議論をするけれども、何處までも叛く者は討ち降る者は助くるのだといふ、さうすると今度は御備頭とか附役とか飯も喰はずに押寄せて来て非常な混雑中、急に御使が来たので、御邸に参りますと、長岡様がお上り遊ばすと云ふ、附役始め神戸から船に乗つて東京にお先に上る事に決した、時にあんな西洋の船には断然乗らぬと云ふ、小等原、奥村(軍記)などは皆船に乗らぬ陸を行くと云ふ、東京まで陸を行つた時に、ひよつと箱根邊で抑へられて通されぬ時にはどう處置をするかといふと、赤ん坊ではあるまい、押へて通さぬなら打破つて通るより外には處置がないではないかと云ふやうな譯で、私も非常に苦心しました、

〔長岡雲海公傳〕

(男爵米田虎雄談話)

一、夫より余は大阪に歸り護美公に謁して岩倉公に謁したる時公より余に傳へられたる言と大久保吉井西郷等に遭ひて聞きたる話を詳に言上し且つ曰く「虎雄が此地出發の踴躍ひ置きたる通り關東出兵に反對するものは盡く送返し給ひたるや」と公曰く「いや一人も歸したるものよし」と曰く「然らば一日も猶豫し給ふべからず君には是より蒸汽船に召して江戸に御直航あるべし虎雄も亦將に部下の兵を率ゐる君と船を同くして出發せむとす」と兼て 朝廷より我藩の爲

に用意せられたる蒸汽船に萬般の準備を命じ將に公の御上船を請ひ参らせむとするや藩士の議論又々沸騰せり曰く「公の海路御進發は危險より宜しく陸路御進發あるべし」と余は此等の議論あるに拘はらず強て海路御進發を主張し先づ兵士の上船を命じたるに何事ぞ彼等兵士は船中にて西洋人より無禮を加へられたりとして散々亂暴を働きたる由にて軍務官山良省吾等遂に之を持って餘し一統をして大阪に引返さしめたり長州の櫻井某護美公に謁して曰く「貴藩の兵士は西洋人に少し無禮を加へられたりとして斯る亂暴を働くとは何の意ぞ所謂大事の前の小事なり僅かの小事よりして遂に出兵の期を誤るは余の大に取らざる處より我藩の高杉晋作の如きは獨り西洋人に無禮を加へられたるのみならず土足に掛けて蹴られたることさへありしに彼は能く忍むで彼等と争ふことふかりき丈夫の事に處する應に此の如くふらざるべからず今御藩の兵士は僅かの事よりして遂に彼が如き亂暴を働らき而して 朝廷より態々差廻はされたる蒸汽船には一人の乗組人もふきに至りては余亦 朝廷に對して心痛に堪へざるものあり」とて頻りに我藩の不處置を責めて止まされば余公の側に在りて之を聞き甚だ赤面したれども致方なく遂に余一人にて部下の兵士を率ゐる乗船せんことを申出たれば櫻井も大に悦び之にて右の不始末も漸く無事に方附くことを得たり

六月六日賊徒各地に出沒するを以て諸藩兵に命し勦討せしめらる

〔關東鎮臺日誌第一〕

六月六日

肥 後 藩 兵 隊  
稻 田 隊

柏木村圓照寺に賊徒屯集ノ趣ニ付早々出張打取候様被 仰付候事(柏木村は東京市外 澁橋町の内なり)

〔一新録探索報告〕

明治元年



見聞之次第書取(青木彦兵衛報告抄略)

一 本月七日夕刻俄ニ新宿之先キ何村縁照寺へ賊兵相集り候由ニ而即刻出兵被仰付淡州家來共一同七ツ半時分同所に押寄候處賊ハ逃去り候跡ニ而初之聞へハ三百計も有之由ニ承り候へ共漸拾四五人も居候由仕方もふき者共相見小銃一挺か持參其寺ニ近村方強談ニ而も持越候賊兵糧夜具等少々右寺院ニ殘居申候可恐事ニも無之事ニ付其夜直ニ引揚ニ相成申候御物頭手等少々翌朝迄同所に殘居申候而翌晝前ニハ歸陣ニ相成申候事(本文淡州家來とあるは前掲稲田隊の事なり稲田家は鎌須賀阿波守の家老にて淡路島を領するものなり)

一 本月六日筑前藩ニ御達ニハ下野大田原江戸より三に賊屯集いたし候由ニ而急速人數差向候様御沙汰ニ付昨夜九ツ時分二百人餘出兵いたし候賊兵三千之間へ有之候得共三四百も可有之ト申而罷出候由大田原餘九様 壹萬千四百石

一 本月八日阿州兵隊三百人到着直ニ講武所に屯營之事

一 柳川藩兵隊四月廿五日京師發足處々川支有之漸本月七日當地到着之筈ニ候處下總方へ出兵被仰付當地に足を不留彼地へ趣キ申候但兵隊人數百九拾八人之由

六月六日姫路藩主酒井直之助上京す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

酒井直之助様

右之御方様當月六日御上京ニ相成申候間此段相達申候以上

内山又助

六月十二日

六月七日先きに發布せられたる大赦令未だ關東地方に普及せざるを以て速に施行すへき旨重ねて布達せらる

〔關東鎮臺日誌第二〕

六月七日御布告書

今春 朝政御一新之御場合正月十五日 御元服之御大禮被爲行御仁恤之 聖慮ヲ以 朝敵ヲ除クノ外大赦被 仰出候處於關東者如何ノ次第ニ有之候哉于今施行不致候ニ付今度改テ被 仰出正月十五日以前之罪人 朝敵共余大逆無道ヲ除クノ外一切被差赦候條速ニ施行可致旨大總督宮 御沙汰候事

六月

六月七日列藩封地に於て兵士を編制し臨機令に應ずへしとの旨を達せらる

〔王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

(六月七日加州里見亥三郎より廻達の書付)

藩に

萬石ニ付國元へ五十人之兵士備置京師に二十五人殘置候様前後御布告有之候處京師に殘置候人數之儀は一切御取消ニ相成候間國元之分厚ク備置可申何時出兵可被 仰出も難計尤是迄殘置候人數は伺濟之上進退可爲致候事

六月

六月七日輪王寺宮會津に到り給ふ

〔井上言彰義隊附輪王寺宮殿下〕

長鯨は海上無事に五月二十九日水戸領平瀧港へ着港せり、此處には磐城國平の城主安藤對馬守子息理三郎出迎ひ居り、萬般鄭重に御待遇申上げたり、此れより宮には駕籠に召され、六月七日會津に着せらる、然るに覺王院は上野にて圖らず宮の御行衛を失ひしより、傲慢一徹の彼は、奥羽諸侯の連衡を企て、各藩を遊説せんと、會津に至りしに、恰も

明治元年

七二九



好し、宮御着の翌日にて、偶然の邂逅に、彼は再び宮の御供たるを得たり、

〔一新録探索報告〕

〔七月三日附本藩在江戸吏員北野角太郎より在熊本機密間吏員宛書翰ニ添附せる別紙「去ル十二日奥福島方之飛脚矢吹山岩城邊打廻り六月廿八日之夜歸藩」とあるもの、内〕

一輪王寺之宮ハ岩城小石濱より上陸ニ相成本田侯安藤侯厚ク取扱之よし同處ヲ須賀川會津に御入之よし御供ハ兵卒六百人程と申候

六月七日本藩の納入すへき軍資金年額の三分の一金五千四百兩を陸軍局に提出す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

陸軍局

今度軍資金被仰出高壹萬石ニ付三百兩宛を以て上納之儀者三分ノ一宛正月五月九月ニ相納候様尤五月分金納之儀は廿日迄ニ持參可仕旨御達御座候處淀川瀧水ニ而川明迄之處上納御猶豫被成下難有奉存候依之越中守領知高之割を以當五月上納分左之通相納申候且末家細川若狭守細川豊前守儀者宗家領内分之儀ニ付左之通一同ニ上納仕候右者領内土藏床地并永荒地等之高辻は除之上納可仕處右石高爰許に相分不申候ニ付此節者無減方相納候得共右取調方國許に申遣置候間相分候上當九月上納之節此節分共差引仕ニ而可有御座候

一領知高五拾四萬石

此軍資金壹萬六千貳百兩

右三分ノ一

五千四百兩

此節上納分

内

高三萬五千石

三百五拾兩

細川若狭守分

高三萬石

三百兩

細川豊前守分

右之通御座候以上

細川 越中守内

六月七日

内 山 又 助

六月七日我藩征東軍總帥米田虎之助中老尾藤金左衛門は大坂より書を在藩老臣に贈り奉行一人上坂せしむること藩世子護久急速上京のこと及び軍資金送致の事を懇請す

〔一新録自筆狀〕

辰六月七日京發自筆狀寫（京發とあれとも實は大坂發なり）

極急キ得貴意申候御東下ニ付而者段々御用多御奉行兩人ニ而之間互り兼、御用辨兼候位ニ而彌以御手薄ク何卒急ニ御奉行一人被差越候様存候私者何之申分茂無御座御懸念被下間敷奉願候田中本間兩人よりも急ニ被差越候様申出候、邸内義論誠ニ因循危キ御場合兩人咄合近日之既ニ軍法之處置も可致賦と晝夜忿怒ニ堪兼心中御憐察之程希申候乍末若殿様に者極御急キ御出馬被爲在候様吳々茂奉祈念候且又御用金極々御手薄ク當所ニおいて種々心配いたし候得共漸ク三万兩内外位相調尤も初發ハ八萬千貳百兩調達致し候得共御下坂後不時臨時之御出方多其上近日ニ至り長田（大坂に於ける本藩の用達也）初メ手筈違ひ御斷申出江戸ニおいて万金位調達之見込有之手代を差添被之地ニ而右金員此節之御用ニ付